俺の日常はこんな感じ。

火焔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺の日常はこんな感じ。

【Ｎコード】
Ｎ７５６９Ｖ

【作者名】
火焔

【あらすじ】
平凡ながらも楽しい日々を送る主人公の、高校生活最後の１年間の話。

時には視点を変えて、基本的には主人公目線でほのぼのとした日常を綴ってます。

「ほのぼのとはいえ、結構いろんなことがあるよな」

うん、そりゃお前が勝手に動くからだ。

「作者の腕だろ。俺を独り歩きさせるなよ」

……頑張るよ。

※連載開始から毎日更新記録中

新学期（前書き）

はじめまして、作者です。

主人公「はじめまして、主人公です。
名前は文中にて」

初投稿ですので、かなり駄文です。

それでも読んでくれる方がいたら、
目の前で土下座したい勢いです

それでは、後書きでまた会えますように！！

新学期

今日は始業式。

高校3年生として新たなスタートが始まる……。

なんて、そんな新鮮な気持ちは一切ない。

2年間、クラス替えもなく担任も同じ。

変わらないことが多い分、緊張感もなかった。

つまらないと言えばそれまでだけど、変わらない日常とは素晴らしい。

平凡な人生最高！

まぁ、そんな感じで今日から学校だ。

春休み明けで久しぶりに会う友達との再会を楽しみに思いつつ、教室の扉を開けた。

「おはよー、みっきー」

「おぅ。

おはよ、香」

最初に挨拶してきたのは
木元香（きもとかおり）。

天然だと思う。

「みっきー、おはよー」

「おー、隊長、瀬田。
おはよ」

「おはよー」

隊長こと
如月沙智（きさらぎさよ）。

それから瀬田心（せたこころ）だ。

今さらだけど、
俺の名前は三木佳亜（みきよしあ）。

少し口が悪いとか言われる。
よろしく。

それから席に着いて、しばらく香達と喋った。

黒板には今日の日程……9時から始業式らしい。
時計に目をやると8時45分。

「……おい、そろそろ体育館行くか」

「うん。
ちょっと待って、お腹すいた」

香が鞄からクッキーを出す。

香はいつも移動前に時間が掛かるから、俺はちょっとだけ早めに声を掛けることにしてる。

これは2年間の経験で学んだことだ。

「みっきー、飴持ってない?」「あー、はいはい。
キャラメル味でいい?」

「うん、ありがとー」

制服のポケットを漁って取り出した飴を3個、香に渡した。

俺は授業中、空腹を満たす為に飴を常備してる。

多分、そのうちの半分は香にやってるけど。

「さぁ行くぞ。
飲み物は飲んだか？」

「待って。
飲む飲む」

結局、体育館に着いたのは9時ギリギリだった。

それから教室で担任先生の話。

「代わり映えしないが、全員元気なのが一番だ。
欠席、遅刻、それらを少なくするようにな。
なぁ、遅刻魔？」

「はーい」
先生の言葉に軽く返事しとく。

俺は2年の時、有名な遅刻魔だったからな。

「3年だし就職進学に響くぞ？
特に女子はな」

……あ、言い忘れてたけど俺は女です。

新学期（後書き）

みっきー、女だってね。

主「そうだよ。悪いか」

うん？口悪い……か？
と思ったけど、女だったら悪いほうかもね。
正直、基準無いから困ったけど。

主「うん、そうかもな。
これから頑張ってな、作者」

頑張るよ。
ここまで読んでくれた方、ありがとうございました！！

主「作者共々、よろしくお願いします。
ありがとうございました」

我が家（前書き）

２話目投稿ー！

佳亜「いぇーい、どんどんぱふぱふー」

１話のみならず、２話まで読んでくれる方に土下座の勢ｉ（殴なぜ殴る！

佳亜「それでは、後書きでまた会いましょう」

自分のことを俺というのに、特に理由は無い。
一番しっくりきた。
それだけだ。

俺は女にしちゃ地声が低いせいか、女らしい言葉が似合わなかった。
だったら……と、男のような言葉遣いになったのは小学生の時だった気がする。

これがまぁ、かなり馴染んだね。

馴染み過ぎて今後どうしよう、とか思うくらいに。

あ、敬語はちゃんと使うよ？
その時は「私」って言うし。

……うげ、自分で言っててキモい。

「みっきー、みっきー」

香が隣の席から呼んできた。

ちなみに苗字が三木だからみっきーと呼ばれている。

中学時代は下の名前呼びが多かったけどな。

同中出身の瀬田が俺をみっきーって呼んでたから2人にも伝染したらしい。

「なに？」

「今日みっきーん家に遊びに行ってもいい？」

「多分、いいよ。
一応、母さんに訊いてみるけど」

始業式とか学校が半日の日は、一番家が近い我が家で遊ぶことが多い。

今日もその流れだ。

学校が終わって教室を出てバイク小屋に向かう。

俺はバイク通学だ。

ちなみに、香と隊長もバイク。
瀬田は自転車だ。

我が家は坂道を登った場所にある。
瀬田は自転車だから来ないことが多い。
今日も来ないらしい。

俺達は俺を先頭にバイクで我が家へ。

しばらくして到着。

家の前の芝生にバイクを停めたら、まずやる事が2つある。

「きゃぁぁぁ！！」

「落ち着け。
なにもしないから」

まず1つ目は、叫ぶ香の足元にいる愛犬を捕獲することだ。

「家康、ハウス」

愛犬を誘導しつつ、名前を呼ぶ。

愛犬の黒いラブラドール、家康。

こいつは家の壁をよじ登って脱走する。

繋げばいいんだけど、夏は暑そうだし冬は寒そうだし自由にさせてやりたい。

いずれ脱走癖を止めさせないとな。

俺が名前を呼ぶと、家康は出る時と同じように壁を乗り越えて入った。

……こいつ、不思議と俺の言う事はよくきくんだ。

門を開けて家の敷地に入ると、めちゃくちゃ吠えてるもう1匹の愛犬ゴールデンレトリバーの信長が。

正しくは、ゴールデンレトリバーに見える、だ。

こいつ雑種だし。

見た目はゴールデンレトリバーだけど、目はぱっちりだ。

ゴールデン特有の垂れ目じゃない。

そもそも、大人しいと評判のゴールデンはこんなに吠えないと思う。

基本的に家族以外とか知らない人は咬むし。

とりあえず2匹をベランダへ。

それからベランダの出入り口に俺が立って壁になる。

その間に、香達は家に。

これ、我が家の客人を招く基本体制。

香達が玄関を閉める音がしてから、愛犬達を解放。

「ただいま。
信長、家康」

2匹の頭を撫でて、挨拶の鼻チュー。

鼻をちょんとくっつけるだけ。

ちなみに信長は9歳、家康は5歳だ。

ついでに、我が家の庭は無駄に広い。

裏庭も合わせたら、もう一軒家が建つくらいの広さがある。

愛犬達にとっては最高だろうけど。

とりあえず俺は家に入った。

我が家（後書き）

佳亜「まさかの続き物っていうね」

思ったより長くなっちゃったからね。

佳亜「作者の力不足だな」

くすん、頑張る……。

佳亜「ここまで読んでくれた方、ありがとうございました」ぺこり

本当にありがとうございました！！ぺこり

暇潰しにでもして頂けると幸いです。

我が家　2（前書き）

佳「こんにちは。
続けて呼んでくれた方々、ありがとうございます」

ありがとうございます！！
それでは後書きにて、またお会いしましょう！

我が家　2

玄関を開けると、廊下には香と隊長がいた。

「相変わらずだな、香」

「だって怖いんだもん……」

香は犬が苦手……というより、動物が苦手だ。

猫みても逃げるし。

とりあえず2人をリビングに。

コップにコーラを注いで出す。

「出たー、みっきーの家って絶対コーラあるよね」

「いいじゃんコーラ。

つまみがあればなおよし」

「「ビールか」」

2人から素晴らしいツッコミが入る。

しかし俺は華麗に受け流す。

「お姉ちゃん、おかえり」

「ああ、ただいま。
結衣」

隣の部屋から出てきたのは妹の結衣(ゆい)。

今日からぴかぴかの中学1年生だ。

「中学校はどうだった？」

「あのね、友達も出来て楽しかったよ。
入学式は長かったけど」

「そうか、よかったな」

結衣は童顔だ。

小学校を卒業した後でも、小4くらいに間違えられた。

身長はそんなに低くないのにな。
童顔ってすげぇ。

「こんにちは。

香さん、隊長さん」

「こんにちは」

「隊長さんって言われた！？」

「俺が家でも隊長って言ってるからな。
結衣、隊長さんじゃなくて沙智さんだぞ」

隊長とは当然あだ名だ。

香や瀬田はさっちゃんってと呼ぶけど……どうも俺は「〇〇ちゃん」とかの呼び方が慣れない。

とはいえ呼び捨ても言いにくかったんだけどな、なんとなく。

そしたら瀬田が何かの冗談で「隊長！！」って言ってたから、よしこれだ……と。

ちなみに、瀬田の名前も似たような理由で苗字で呼んでる。

心って名前がどうにも呼びにくかった。

ならば苗字だ、と。

そんな感じで落ち着いた。

「結衣、昼飯食った？」

「うん、お母さんがおにぎりとか買ってきてたから。お姉ちゃんの分もあるよ」

「そうか」

母さんはいつも夕方まで仕事に出てる。

「2人は？
昼飯持ってる？
香は訊くまでもないけど」

「うん、持ってきてるよ」

「失礼なっ！
それじゃ私がいつも食べ物持ってるみたいじゃん！」

「事実だろうが」

そんな感じで喋りながらゲームをやったりして騒いだ。

「あああ、みっきー強すぎ！！
どんな訓練したらそうなるの！？」

「うっせ。
経験値２５００（最高値）なめんな」

ちなみにリモコンをぶん回す有名なゲーム機だ。
香も同じゲームを持ってるから遠慮なくぶちのめす。
まぁ手加減無しとか、そんな子供染みた真似はしないが。
ハンデをつけても俺は勝っちまうからしょうがない。
経験値２５００なめんな。（２回目）

４時半を回ったところで、今日はお開きにする。
香の家はここから１時間くらい掛かる場所だ。
隊長は２０分くらいの場所だけどな。
バイクだし日が暮れると危ないから早く帰ったほうがいい。

「それじゃあ、バイバイみっきー」

「また明日ね」

「ああ、また明日。
2人とも気を付けて帰ろよ」

俺はバイクを停めた芝生までは見送りをする。
ちなみに家康はリードをつけて電柱に結びつけてきた。

「「バイバーイ」」

2人に軽く手を振ってから家に戻った。

我が家　2（後書き）

佳「なんか今日の話、説明っつーか、紹介っぽいね」

まだ3話目だからどうしてもね……。

佳「でも今のところ毎日更新だね」

うん。

頑張る（キリッ

佳「ここまで読んでくれてありがとうございました」

ありがとうございました！！

次回は佳亜の母登場（予定）です！

佳「登場しても目立つかな……？」

我が家　3（前書き）

佳「タイトル悩んだんだな」

うん。

しっくりくるタイトル思いつかなくて……。

佳「んで、続きにしたわけか」

その予定なかったんだけどね。

話の流れ的に大丈夫かな……って。

佳「もっと腕あげような」

うん……。

前書きで長々と失礼しました。

後書きでまた会いましょう！

我が家　3

家に戻ってからは結衣と中学について喋ってた。

「中学校の勉強って難しいの？」

「最初は簡単だよ」

「わかんないときは訊いてもいい？」

「いいけど、英語だけは訊くなよ」

「なんで？」

「俺、中学で英語の授業ほぼ聞いてなかったから。
いまだに全然わからん。
お前はちゃんと聞けよ」

「……うん、気を付ける」

そんな感じで喋りながら、俺は洗濯機をまわした。

「ただいまー」

「「おかえりー」」

母さんが帰ってきたらしい。
今は１８時半。
母さんが帰ってくるのはいつもこのくらいの時間だ。

「洗濯終わった？」

「あと脱水。
腹減った」

「すぐご飯よ」

母さんは買ってきた惣菜を電子レンジにかける。

別にいつも惣菜ってわけじゃない。
普通よりは多いけど。

俺は母さんの横で皿の準備をする。

「今日香ちゃん達来てたの？」

「うん」

「何してたの？
飲み物出した？」

「ゲームとかね。
コーラ出したよ」

「そう。
ところで家康が電柱に繋がれてたけど」

「……あ」

忘れてた。

「家康、ホントごめん」

家康は電柱の横に寝そべって大人しく俺を待ってた。
俺を見つけてパタパタとしっぽを振ってくれる。

すぐにリードを外してやった。

「つーか、母さんが外してくれてもいいのにな……」

いや、忘れてた俺が悪いんだけどさ。

家康の頭を撫でてから家に入った。

家の中は夕飯のいい匂いが漂う。

「ご飯よ」

「うん」

「ねぇ、ところで」

「ん？」

「信長、ベランダに閉じ込めたままだけど？」

「……頼むから先に言ってよ」

なぜ外に出た時に言ってくれないんだ。

忘れてた俺が一番悪いんだけど。

……とりあえず、今日の愛犬達のご飯は奮発しようか。

我が家　3（後書き）

佳「一応、紹介的なやつは終わったな」

うん。

だからとりあえずこの前書き後書きの語りは外そうかな、と思うんだよ。

佳「ぐだぐだだしな。

たまにやるくらいでちょうどいいと思うよ」

それからさ、なるべく季節に合わせて話を書いていきたいわけよ。

佳「うんうん。

今、話の中だと4月くらいだしな」

そう。

だからなるべくカットして現在の8月に近づけたいのよ。

佳「わりと大幅なカットだけど、大丈夫？」

まず、読んでくれる方にご理解していただかなきゃね。

それまでは前書きで「今、〇月ですよー」って言いますので！

よろしくお願いします！！

佳「よろしくお願いします」

前書きのみならず後書きまで長々と失礼しました！

それでは、また次回に。

実力テスト勉強（前書き）

今回はほとんど会話が無い……すみません。

時期は5月頭くらいです。

読んでくださっている方々、ありがとうございます！

それでは、どうぞ！

実力テスト勉強

現在、朝の４時。

今日は学校で実力テストがあるから、これから勉強する。

学期始めにある実力テストって嫌い。

範囲とか無いし。

しかも俺は長期間の勉強が出来ないタイプだ。

飽き性なんだよな……。

だからまぁ、こうやって朝方にテスト勉強するわけ。

ちなみに、定期テストや期末テストも必ず一夜漬けだ。

商業系の高校に通ってる俺の学校は、実力テストは国英数の３教科だけ。

これはラクでいいな。

「……まずは数学かな」

眠気を吹っ飛ばすために独り言を呟く。

効果は薄いけど。

数学の勉強はノートさえあればいい。

俺は黒板の版書に忠実にノートを書くから、教科書はいらない。

わかる問題は軽く目を通して出来るか確認するだけ。

微妙な問題は別のノートに解いてみる。

……のちに、このノートが夏休みの宅習として提出されるのは秘密だ。

一通り終わって時計を見ると6時。

「そろそろ英語の勉強に移るか」

残念ながら独り言で眠気は飛ばないらしい。

どこかで言った気がするけど……俺は英語が大の苦手だ。

理由もどこかで言った気がする。

中学の授業って大事だね。
みんな、ちゃんと聞こうね。

誰に言うでもなくそんなことを考えつつ、教科書を開く。

俺の場合、数学とは逆で英語は教科書に全て写す。
日本語訳とか大事な所とかも全部。

なぜかって？
英文をノートに写すのが面倒だからさ。
はっはっは。

こんなんだから、余計に英語が苦手になるのかもしれない。
教科書はパッと見だとめちゃくちゃ勉強出来る人みたいだけど。

気を取り直して、英単語を覚える。

英語って単語さえ覚えてたら、わりとなんとかなるよね。

記憶だけは得意なんだよね、俺。
今までもそれでかなり助けられてきた。

そんな感じで単語を覚えたら、英文と日本語訳にさっと目を通しておく。

……勉強終了。
現在の時刻、７時。

英語の勉強は１時間で充分だ。
勉強してもわかんないから。

あと、国語は勉強しない。
何が出るかわかんないから。

国語って結局、国語力の問題なんだよ。
大丈夫大丈夫。

つーか、めっちゃ眠い。
３０分だけ寝よう。

横になった俺はすぐ眠りについた。

実力テスト

遅刻魔の名にふさわしく、いつも通りギリギリで登校した俺。

「おはよう、みっきー。
遅刻？」

「おはよ。
セーフだ」

さすがの俺でも、そんな頻繁に遅刻しないっての。

「ねぇ、みっきー。
この問題……わかる？」

通学鞄から荷物を取り出す最中、隊長が数学のノートを持って見せてきた。

「ああ、これは」

問題の説明と解き方を教える。

英語が苦手な俺でも、実は数学は得意分野だったりする。

「さっすがみっきー！
ありがとう」

「どーいたしまして」

数学しか教えられないけどな。

「ねぇ、みっきー。
２１ページの「英語は訊くな」まだ言い終わってないよ！」

香が英語の教科書を開いた時点で、俺は香に背を向ける。

「いや、マジでわかんないって。
俺より隊長のほうがわかるだろ」

「そんなこと言ってー！
家では毎日ちゃんと勉強してるんでしょ？」

「だから長期勉強出来ないんだって」

このやりとりは毎度のことだ。

「おーい、テスト開始まであと１０分だぞー」

担任の先生が教室に入ってきた。

「やば……みっきー！

この英文のｉｔってどこ！？」

「だから俺に訊くなっての」

いっそ担任（体育教師）に訊いてくれ。

「お、終わったぁ……。
いろんな意味で」

「お疲れ」

実力テスト3教科が終了。
香が机に突っ伏してる。

「さすが余裕だね。
成績上位者め」

「別に余裕じゃねぇよ」

皮肉を込めて瀬田がつついてくる。

何を隠そう、実は俺こんなだけど成績はわりと上位だ。

ホント世の中間違ってると思う。

勉強時間とかがあんな感じなだけに、努力してる人に申し訳ない。

……かといって、そういう人のことを考えると謙遜も出来ないんだけど。

実際、こんな考えも失礼だよなぁ……。

「みっきー、どうしたの？
難しい顔しちゃって」

香が話し掛けてきたことで思考に沈んだ意識が浮上した。

「……ん、なんでもない」

「そう？
ねぇ、今日は午後の授業ないから遊びに行かない？」

「そうだな、行くか」

正直眠い。

でもまぁ眠気で誘いを断るほど野暮じゃないけど。

「みっきー、早くー」

「へいへい。
どこで遊ぶんだ？」

「まずはお昼食べに行って、その後にみっきーの家！」

「またか」

今、我が家はコーラ切れしてる。

コーラ買って帰ろう、と考えながら教室を出た。

実力テスト　2

「これはどういうことだろうね」ニコニコ

「どういうことだろうね」ニコニコ

学校に行くと、香と瀬田が満面の笑みで笑い合いながら何か言ってた。

心なしか、その背後には黒いオーラが見える。

「あ、おはようみっきー」

「おはよう……あれは何？」

とりあえず隊長に訊いてみた。

「ほら、あれ見て」

「……？」

隊長が指差す先に目をやる。

それは教室の外にある掲示板だった。

普段は誰も気に留めない掲示板だけど、今日は人が集まってた。

その理由は1つしかないだろう。

「……順位表？」

「うん、今朝貼り出されの。
来て」

言われるままについていく。

人集りの近くまで来ると、自然と掲示板までの道が開いた。

今までに何度か経験した展開に、苦笑するしかない。

「1位、三木佳亜、国語９９点、数学９８点、英語７９点、総合２７６点」

「なぜ読み上げる」

隊長はご丁寧に全部読んでくれた。

「おめでとうございます。
さすがです」

「あ、ありがとうございます……ってなぜ頭を下げる」

つられて頭を下げてしまった。

実は俺……、これでも1位の常連だったりする。

だからなおさら謙遜しにくいという……。

「ホント天才だよね」

「去年もずっと1位独占してたもんね」

後ろから香と瀬田の声が聞こえる。

思いっきり圧を込めて。

「でもホントすごいよね、みっきー。アタシ、27位だよ」

「……どうも」

隊長は純粋に褒めてくれる。

学年で200人くらいいるし、27位もすごいと思うけどな……なんて、ヘタなことは言えない。

1位……。
なんてやりにくい位置なんだ。
順位高いのは嬉しいけどさ。

「ズバリ、成績アップの秘訣は？」

「……特になし」

香に詰め寄られて正直に答える。

「ええー！
絶対なんかあるでしょ！！」

「自分であみ出した記憶力を上げる方法とかさ！
なかったとしたらどんだけ頭良いの！？」

「いや、だから俺は頭が良いんじゃなくて記憶力が良いだけだって
……」

香と瀬田にさらに詰め寄られて再び正直に答える。

マジで記憶力だけは良いんだよな……。

ただ瞬間的にその場のことは覚えられても、あんまり長期間保たな

い。

テストでは使えるけど受験では役に立たない気がする……。

「はい、みっきー。
お祝いにお菓子あげる」

急に鞄の中を探り始めた隊長がそう言って差し出したのは手作りのクッキー。

「みっきーなら絶対1位だと思ったから、昨日のうちに作ったんだよ」

「隊長……愛してる」

なんて素直な褒め言葉なんだ。
抱き締めずにはいられない。

「あ、いいなークッキー」

「さっちゃんのクッキー美味しそう……」

2人もさっきの勢いは消えて寄ってきた。

「みんなで分けて食おうな。
隊長、いい？」

「もちろん」
（みっきーならそうするだろうと思って、たくさん作ったし）
「……え？
なんか言った？」
「ううん、なにも」
なにか聞こえた気がしたけど、気のせいだったか。
「「うーまーいーっ」」
「あ、てめぇら勝手に食うな」
「クッキーたくさんあるよ」
「ん、うまっ」
さすが隊長だぜ。
「ねぇ、みっきー」
香がつついてきた。
「うん？」
「また勉強教えてね」

「ああ、いいよ」

「英語とか「英語は訊くな」……もう！」

その後もしばらくは、やいやい言いながらクッキーを食べた。

種目決め（前書き）

今回短めです。
すみません。

次回からは続き物になる……かもしれない。
すみません、頑張ります。

毎日読んでくださっている方々、ありがとうございます！

種目決め

高校の体育祭って開催日早いよね。

だから5月の間に出場種目を決めておくんだってさ。

「１００メートル走、出場希望者はー？」

だから今日は、体育委員を中心に教室がわいわい騒がしかった。

「ねぇねぇ、なんの種目に出る？」

「んー……」

俺、走るのとか全然ダメ。

それ以外ならまだマシだけど。

でも体育祭は必ず1人1種目出なきゃいけない。

めんどくさい……。

「みっきー、今年も球技に出るの？」

「うーん……そうだな」

うちの体育祭は球技大会も混ざってる。

全部総合した点数で優勝とか決まるんだ。

球技か……。

走りが苦手な俺には向いてると思う。

つーか俺、毎年球技だしな。

「バスケ出場希望の人ー？」

『はーい』

クラスメート数人が手を挙げる中に俺も混ざる。

「みっきー、バスケ？」

「おぅ」

「じゃあ私もー」

香も遅れて手を挙げた。

「俺に合わせなくていいぞ？」

「みっきーと一緒がいいもーん。
1人で別の種目出てもつまらないし」

「ふーん……」

香がいいなら別にいいか。

それからもわいわいと決めていった結果、

俺…バスケ
香…バスケ
瀬田…８００メートル走
隊長…バレー

こんな感じで決まった。

瀬田は短距離は普通らしいけど、長距離に強いからな。

頑張れ。

隊長は……俺より走るのダメかも。

香はたいして違わないかな。

そういえば俺、走るの全然ダメとは言ったけど別に異常に遅いわけじゃないよ。

タイム的には普通だけど、走るのが嫌いなだけだ。

ついでに、うちの学年は赤組だ。

学年ごとに組分けされて、２年は青組、１年は白組。

毎年、なかなか面白い体育祭だと思う。

「頑張ろうね、みっきー」

「おぅ」

とりあえず目標としては、他メンバーの足を引っ張らないようにしよう。

練習（前書き）

うをおおお、ギリギリ！！
毎日更新目指してるのにギリギリなんて申し訳ない！！

毎日読んでくれてる方々、すみません！
ありがとうございます！！

時期は６月の頭くらいです。

練習

体育祭の練習ほどめんどくさいものはないだろう。
整列の練習なんて、ただ立ってるか礼するだけなのに。

「あっつ……」

清々しい快晴が憎い。

「ちゃんと前を向いとけー！」

どこからか体育教師の怒声が聞こえる。

先生……前に並んでる奴の白い体育服に太陽の光が反射して眩しいんだが、この気持ちわかるかね？

ちなみに思慮深い俺は、この暑い中でも紺色のジャージ着用中だ。

まぁ、うちの学校の体育祭は球技出場の人は怪我防止のためにジャージ着用が規則。

とはいえ、開会式でもジャージ着るなんてあんまりいないけどな。

俺は思慮深いから着るよ。
はっはっは。

……そろそろ暑さで頭が沸いてきたのかもしれない。

つーか正直、徒競走とかのほうが怪我しやすい気がする。
サッカー出場ならジャージが安全かもだけど。

ふと、後ろから視線を感じて首だけ少し傾ける。

目が合ったのは隊長だった。

小さく手を振って、口パクで「暑いね」と言ってきた。

俺は苦笑いだけ返した。

体育祭の整列は身長が高い順。

隊長達３人は、だいたい１５５センチくらいで身長差も大きくない。

まぁ、１６３センチの俺は比較的前列にいるわけだが。

3人は整列の立ち位置が近いから話しが出来るけど、だいぶ離れてる俺は暇を持て余していた。

「あの、三木佳亜さんですよね？」

「……は？」

すぐ隣から聞こえた声。

暑さでボーッとしてたせいか反応が遅れたうえに、もともと悪い口調や目つきも直してなかった。

一瞬ビクッと震えた相手を見て、俺は正気に戻った。

「あ……すいません。
失礼しました」

「い、いえ……こちらこそ勝手に声掛けてしまって」

青色のハチマキから、2年生なのがわかった。

同年代の相手にいつまでも敬語は堅苦しい。
俺は早々に言葉を砕くことにした。

「それは構わないけど、感じ悪くてごめんな。
……で、何か？」

「えっと……あっ、名前も言わずにごめんなさい！
私、柳田芽留（やなぎだめる）っていいます。
あの……私……」

「……？」

柳田さんはモジモジし始めた。

そんなに言いにくいことなのか？

「あの……よかったら、私と仲良くしていただけませんか？」

「……仲良く？」

「あっ、図々しくてごめんなさい！
そんなのいきなりダメですよね。
年下だし赤の他人ですし……」

「いや、別に構わないけど……」

「えっ？」

柳田さんは沈んだ表情から一変して驚いた表情になった。

なにをそんなに驚いたのかはわからんけども。

「今の友達だって元は赤の他人だろ。
年下っていってもたったの1年差だし」

「じゃあ……仲良くしてもらえるんですか？」

「よろこんで」

しかし、交友一つにこんな堅い申し込まれ方されたことはないな。
嬉しそうに笑ってるから余計な事は言わないが。

「今日はここまで！
教室に戻ったらしっかり水分補給するように！」

マイクで喋る体育教師の声が響く。

やっと終わりか……疲れた。

「それじゃ、またな。
お疲れさん」

「はい、お疲れ様でした！」

柳田さんに一言挨拶してから教室に向かった。

「ねぇ、みっきー。
さっき話してた子、だれ？」

教室に入ると待ってたらしい香が訊いてきた。

「2年の柳田芽留さん」

「どんな関係？」

「交友1日目」

「……？？」

香達にも今度紹介してやろうと思う。

交友

「先輩っ！」

昼休み。
俺達４人は授業を終えて教室に戻るため、廊下を歩いてた。
そこで聞こえた声に覚えがあるような気がして、振り返ると……、

「お久しぶりです、三木先輩！」

「……ああ、柳田さん」

「私のこと、忘れてませんでした？」

「い、いや。
そんなことは……」

「忘れてたね、みっきー？」

「……」

香に指摘されて、苦笑いしか返せない。

どうも俺は人の顔を覚えられないらしい。

正直、これは困る。
相手に失礼すぎるだろ。

現に、柳田さんに沈んだ表情をさせてしまった。

「そうですよね。
私のことなんて……」

「ご、ごめん。
あ、話したのはちゃんと覚えてるからな？」

申し訳なさすぎて謝るしかない。
でも話したのはマジで覚えてる。

「……ほんとですか？」

「ああ。
柳田芽留さん、だろ？
体育祭の練習中で俺に声掛けてきてくれた、隣の列の」

そこまで言うと、柳田さんはパァっと笑顔をみせてくれた。

……それと同時に両手で俺の左手を握りしめたのは予想外だったが。

「嬉しい！！
本当に覚えていてくれたんですね！」

「あ、ああ……。
うっかり顔忘れててごめんな」

思わずその勢いに押されそうだったが、言うべきことはしっかり言うぜ。

「そんな、全然構いませんよ！！
……あっ、ごめんなさい！」

左手はすぐに解放された。

「別にいいけど……元気だな、柳田さん」

率直な感想だ。

俺自身はこんなに元気じゃないから、なんか新鮮。

「数少ない取り柄です！
あの、ご友人の方々にも挨拶させてもらっていいですか？」

「ああ、どうぞ」

今まで黙って……というか呆然と眺めてた香達に、柳田さんは自己紹介をした。

香達も戸惑いつつ自己紹介を返す。

互いの自己紹介を終えた柳田さんは俺に向き直った。

「えっと、呼び止めてすみませんでした。
あの日のことが夢だったんじゃないかと思うくらい何もなかったので確認しちゃいました」

えへへ、と柳田さんは笑う。

「あれから整列の練習なかったしな。
話す機会もなかったし……気がきかなくて悪かった」

「そんなことないです！
私が勝手に話し掛けたんですし、贅沢言いません」

「……贅沢？」

「はい。
こちらから話し掛けておいてそれ以上望むなんて贅沢です」

「……？？」

イマイチ意味が理解できないが、香の腹の虫が鳴いたから話しを進めることにした。

「……まぁ、また今度ゆっくり話しでもしよう。
もう昼飯だし」

「またお話しを……？
嬉しいっ、ありがとうございます！」

「そ、そう……？
……じゃあ、また今度な」

「はい、さよなら！」

「なんていうか、すごく明るい子だね。」

「そうだな」

教室に戻ってすぐ、隊長から出た言葉に俺は一言だけ返す。

「みっきーモテモテだね」

「……香。
悪い、聞こえなかった」

「ううん、なんでもなーい」

……なんでだろう。
聞こえなかったのに、いい気がしない。

そうだ、聞かなかったことにしよう。
そうしよう。

そう考えた俺は、さっさと昼飯の弁当を食べ始めた。

ワープロ検定前日（前書き）

な、なんだかちょっとだけシリアスな雰囲気が混ざってしまった……。

苦手な方、すみません。

時期は7月の初めくらいです。

ワープロ検定前日

忘れられてるかもしれないが、うちの学校は商業校だ。
同じように商業系の高校に行ってる人はわかるかもしれないけど、
商業科目の検定を受けなきゃいけない。
電卓の検定とかパソコンの検定とか。
この２つはわりと有名だから、普通の人でも知ってるかもな。
で、その有名なパソコンの検定の１つ。
ワープロ検定ってのが明日あるわけだ。

ワープロ検定では１０分間と１５分間に分けられた実技と、筆記がある。

１０分間の実技はパソコンをひたすら打つのみ。
みんな速度と呼んでいる。
これが簡単そうで簡単じゃない。

１級は７１０文字、２級は４６０文字、３級は３１０文字……これ

を１０分間で打ち込む。
規定の文字数から１０文字以上間違えたら不合格決定だ。

入力速度や集中力の高さに加えて、注意力も問われる。
最初のころは直後の疲労がすごかった。

んで、１５分間の実技。
これは文書と呼ばれてる。

名前の通り１５分で文書を作り上げるものだ。
１級になると難易度上がるから２０分間だけど。

これも一字一句正確に、見本や見本に加えられた訂正に忠実に作成しないとアウト。

採点は覚えてないが、３・４ヵ所間違えたらヤバいかもな。

まぁ、実技はこんなとこだ。
筆記については別の時に。

「みっきーみっきー！
図が動かせないよ！」

「指定してないからだろ」

今、俺達4人は明日に備えてパソコン室で練習中。

俺は帰ろうとしたら香に捕まえられた。

「今日は用事あったのに……」

「ごめんごめん。

でも、みっきーいなきゃわかんないんだもん」

「まぁ、特別な用事じゃないからいいけど……」

ちなみに俺と香は1級、隊長と瀬田は2級を受ける。

俺は練習する気が起きなかったから、3人に教える役だけを徹することにした。

「みっきーは練習しないの？」

隊長が訊いてきた。

「ああ。

気が乗らないから」

「前日でそんな落ち着いてさすがだね」

「いや、だから気が乗らないだけだって……」

なんで俺の友人達は、たまに俺の話しを聞いてくれないんだろうか。

「でもみっきー速度は７１０文字なんてとっくの昔に超えてるし、文書も２０分どころか１５分で足りるでしょ？楽勝じゃん」

「まぁ、練習ではな」

「私、どっちもギリギリなんだけど！筆記もあるし……うー」

「頑張れ」

正直、俺自身も実技の心配はしてない。

筆記は……今日の夜にやる。

過去問見たけど、あんまり内容変わってないから大丈夫だ。

多分。

「でも１級の合格率って２０％だよね。みっきーまだ勉強してないんでしょ？大丈夫？」

「大丈夫でしょ。
みっきーだし」

「……」

隊長、なぜ知っている。
つーか勝手に完結させるな瀬田。

「みっきー！
表が入りきらないよ！」

「おーけー、わかった。
香、文書を最初から最後までみてやろう。
あと叫ぶな、耳が痛い」

帰るときには6時をすぎてた。
夏だからまだ明るいけど。

「ねぇ、みっきー」

「ん？」

バイク小屋で香が話し掛けてきた。

「今日、用事ってなんだったの？」

「別にたいした用事じゃねぇよ」

「……なんだったの？」

気兼ねしたが、正直に言うことにした。

「……ばあちゃんの顔でも見に行こうかな、って」

俺のばあちゃん。

数年前から寝たきりで病院に入院してる。

だからなんだと言うこともない。

ただそれだけだから香が気にすることじゃない。

「……ごめん」

「ただの気まぐれだ。

今日じゃなくていい。

……じゃあな、勉強しろよ」

「みっきーこそ！

勉強しろよっ！

……あ、でもそれ以上勉強して点数上がっても……」

「はいはい。

じゃ、また明日。
気を付けて帰ろよ？」

俺は珍しく笑って返事した。

普段から無表情が多いからな。

「ばいばーい」

後ろから聞こえた香の声に手を振ってからバイクのスピードを上げた。

不安定（前書き）

前回に引き続きシリアス要素が……！

しかも長くなりすぎたため、途中でぶったぎりました。

いつもより短めです。

すみません。

読んでくださってありがとうございます！！

不安定

「終わった……。
うわぁぁ、速度足りなかったぁぁ」

「お疲れさん。
それ以外は出来たんだろ？
次は受かるって」

机に突っ伏す香の頭を撫でやる。

「……みっきーは？」

「……どうかな。
結構できたかも」

「ううぅ、憎い！
私よりも後に勉強始めたくせに！」

「俺、短期集中型だから」

「もう、お腹すいた！
みっきー、ご飯食べに行こ！」

「いいよ」

隊長と瀬田は級が違うから、検定時間も違う。
俺達より先に終わってもう帰り着いた頃だろう。

「んー、美味しい」

「よかったな」

よく行くファミレスに入って、香はさっそくカルボナーラを注文した。
俺はグラタンを注文。
ちなみに俺、グラタンは食えるけどドリアは食えない人だ。

……うん、果てしなくどうでもいい。

「……そっち、美味しい？」

「食う？」

「うんっ。
……美味しーい」

「そうか」

その後もどうでもいいことを話しつつ、料理を食べた。

「あ、みっきー、漢検の問題集買った？」

香はデザートの苺パフェを食べながら訊いてきた。

「まだ。
検定日いつだっけ？」

「2週間後だよ！？
大丈夫？」

「んー……大丈夫。
今回は一夜漬けしないと思うから」

「さすがに漢検だもんね。
……あの、さ」

「なんだ？」

スプーンでパフェをつつきつつ、どこか言いにくそうな表情をする香。

「この漢検……私が無理矢理みっきーを誘ったでしょ？
なんていうか……その……迷惑だったかな、なんて」

「……どうしたんだよ。
昨日から変だぞ」

「……」

俺は腕を組んで香の顔を見た。

こいつはたまに不安定になる。

……いや、もしかしたらいつも不安定なのかもしれない。

その時俺は、こいつとちゃんと向き合おうと決めてるんだ。

不安定　2　－ｓｉｄｅ香－（前書き）

前回の続き物でございます。

前回を読んでから今回を読んでくださったほうがよろしいかと思います。

シリアス続いてすみません！

読んでいただきありがとうございます！！

不安定　2　－side香－

私は昔から体が弱かった。

そのせいか、心も弱かった。

小学校は学校が嫌で3回も転校。

中学校は1年生の一学期だけ行って、あとは行かずに入院してた。

私は、小さいときから心の病気だった。

学校も大嫌いで、人混みも、人も大嫌い。

友達なんてずっといなかった。

中学校では1人だけ友達が出来たけど、今ではメールすらしない。

そんな私が、高校に2年以上通っていられるのは……みっきーのおかげだと思う。

ううん、間違いない。

口調が男みたいで言葉がちょっと悪くて、いつもクール。

人によっては、言葉も素っ気なく聞こえるかも。

一見、とっつきにくい感じにみられると思う。

でも……なんだかんだ言って、いつも一番私を気に掛けてくれたのはみっきーだった。

私は、心やさっちゃん……もちろんみっきーにも、自分のことを詳しく話したことがない。

……それで避けられたり妙に気を遣われたら嫌だから。

自分でも自分自身がめんどくさい奴だな、って思う。

だから余計に話せなかった。

みっきーは腕を組んで眉間に皺を寄せながら私の目を見る。

それが不機嫌だからじゃないのが解るのは、みっきーの目には優しい色しか浮かんでないから。

みっきーの目はたまに、思わず泣きそうになるくらい優しい色をする。

大げさじゃなくて、本当のこと。

みっきーは意識してやってるわけじゃないと思うけど、私は随分これに助けられた。

現に、今もそうだ。

「……香。
俺は、人に頼まれて何でもほいほい引き受けられるほど出来た人間じゃない」

「……」

私は黙って話しを聞く。

「検定……まぁ、資格だな。
資格は個人の財産だ。
お前に勧められたのもあるけど、最終的に決めたのは俺だろ。
これのどこに迷惑な要素がある？」

私は不安定だ。

1人で、周りに知らない人ばっかりの中で、検定を受ける自信は……まだない。

だから悪いと思っても、必ずみっきーを誘ってきた。
みっきーはそれを断ったことなんて一度もない。
検定だってタダじゃないのに。

さっちゃんも一緒に受けたりするけど……なんとなく、みっきーじゃないと安心できなかった。

「香」
呼ばれたことで、俯かせてた顔をみっきーに向ける。

「さっきも言った通り、俺は出来た人間じゃない。
……でもな、友達の頼みを聞いてやらないほど薄情にもなれない」

「……」

「だから、なんかあったら頼れ。
1人で抱え込まなくていい」

「……っ」

みっきーはそう言って笑ってくれた。

普段は無表情が多いのに、こんな時だけずるい。

……泣きそうになるじゃん。

「……うん」

込み上げてくるモノを堪えるのに精一杯で、これ以上声は出なかった。

苦笑に近い表情を浮かべたみっきーは携帯を弄り始める。

私が落ち着くまで待っててくれるらしい。

みっきーは、なんとなくわかってるんだと思う。

私が心の病気を持ってること。

……ありがとう、みっきー。

一緒にいてくれて、ありがとう。

いつか、絶対。

近いうちに、ちゃんと話すから。

約束

「夏休み、みんなでうちに泊まりに来ない？」

「泊まり？」

香の一言で俺達は食事の手を止めた。

いまは昼飯の時間だ。

「なんで急に？」

「前から思ってたの。
みんなでお泊まり会したいな、って。
夏休みももうすぐだし」

泊まりか……。

でも香の家ってここから1時間掛かる場所なんだよな……。

でも、行けないこともないし……よし。

「いいな。
楽しそうだし、迷惑じゃなければ行くよ」

「ほんと？
よかった！
心とさっちゃんは？」

「アタシも行こうかな」

「私も」

うん、全員参加だな。

「つーか、こんな人数で行って迷惑にならないか？」

「大丈夫。
あのね、うちのお婆ちゃんが1週間旅行に行くからそのあいだ家使っていいよって言われてるの。
だからお婆ちゃんの家でお泊まり会しようと思うんだけど、どう？」

つまり俺達4人で好きなようにしろ、ってことか。

瀬田が手を挙げて質問する。

「ご飯はどうするの？」

「自分達で作ってもいいし、食べに行ってもいいし……それで大丈夫？」

なにか食材を持っていこうかな……。

「とりあえず、料理だったら隊長と香に任せるぜ」

俺はろくに料理したことないから。

「私達だって作れてもお菓子くらいなんだけど……」

「じゃあ、作れなさそうな時は外食で」

昼休みの間にも、泊まりの計画ではわいわい話しが進んだ。

「じゃ、8月1日から泊まりで3泊4日。
香のお言葉に甘えて、香のおじさんが迎えに来てくれる車で出発。
……ってことで、確認はとりあえずこれだけでいいな」

「「「はーい」」」

3人分の返事を聞いて頷く。

香のおじさんは、いつも香や俺達によくしてくれる。

見た目は６０~７０歳くらいだ。

ちなみに香の父親はいないらしい。

直接訊いたわけじゃないが、時々うっかりもらす香の言葉を繋ぎ合わせると、随分前から父親がいないのはわかった。

……これはあくまでも憶測だが、おじさんが父親じゃないかとみている。

年齢からみても再婚か。

まぁ、いまはどっちでもいいな。

どうしても知りたいわけじゃないし、香が知ってほしくないと思うならそれを探る必要はない。

「それでね……みっきー、聞いてる？」

「……ん？
なんだって？」

「ゲーム持ってきてね、って。
ボーッとしてどうしたの？」

「いや、別に」

「……？？

じゃあ、よろしくね」

「ああ、ゲームな。

わかった」

このメンバー全員参加のお泊まり会なんてなかなか出来ない。

学生らしく楽しもうか。

検定結果（前書き）

後書きにて。

検定結果

「三木先輩！」

「……？」

教室に戻る途中の廊下。
移動が遅れた俺は1人で歩いてた。

そこで後ろから呼ばれて振り返ると、予想通りの人物がいた。

「柳田さん。
こんにちは」

「こんにちは！」

元気だなぁ、と頭の片隅で思う。

俺が最後に元気に挨拶したのはいつのことだったか……。

「何か用事？」

「……用事がないと話し掛けてはいけませんか？」

「あーいやいや、そんなことないよ。
ただ訊いただけで」

たしかに友達なら用事なくても喋るよな。
うん、返答には気をつけよう。

「ただ話したかったのもあるんですけど、実は用事もあります」

なんだ、あるのか。

「なんの用事？」

「学年主任の先生からこれを渡すように頼まれました」

そう言って柳田さんが差し出したのは、でかい茶色の封筒を４つ。

差出人は検定協会だ。

「２つは三木先輩の、もう２つは木元先輩のだそうです。
検定の結果が入ってます」

木元とは香の名字だ。

……なんとなく忘れられてる気がして、不安になったから改めて紹

介してみた。

「わざわざありがとう。
ご足労掛けたな」

「いえ、そんな！
ところで、何の検定を受けたんですか？」

「漢字検定とワープロ検定」

「あっ、私もワープロ検定受けました！
2回目でやっと2級受かりました」

そう言って柳田さんは同じような茶色の封筒を見せる。

「おお、おめでとう。
よかったな」

「ありがとうございます！
あの……三木先輩は？」

もじもじしながら訊いてくる柳田さん。

俺の検定結果を知りたいのか。

知ってもに意味ない気がするけど……まぁ、別に構わない。

「あー、俺は「みっきー！」……香か。
ちょうどよかった」

封筒を開けようとしたところで、教室から香が出てきた。

「え？
なにが？」

「これ、検定結果。
柳田さんが届けてくれた」

「あ！
ついにきたんだね……」

香は表情を曇らせる。

「ああ。
じゃ、開けるか」

「ええっ、ちょっと待って！
心の準備が……」

差し出した封筒を受け取らない。
耳を押さえてなにかブツブツ言ってるし。

その様子が俺に苦笑させた。

「今でも後でも開ければ同じだろ」

「う、うん。

……よし、じゃあ……！」

香は封筒を受け取って勢いよく開ける。

俺もそれに続いて結果を確認した。

検定結果（後書き）

……はい、またしても途中で切れております。
すみません。

1話にしてはあまりにも長すぎた……。（↑力不足

なんか、柳田ちゃんが出ると長くなるような気がします。
柳田ちゃん、よく喋るな……。

それでは、また次回。

読んでくださってありがとうございました！

検定結果　2（前書き）

後書きにて。

検定結果　2

「……」

「……これは……」

俺達は封筒に入ってた一枚の紙をみた。

それは、まぁ単純に言えば検定の結果が書かれた紙だ。

個人の合否が書かれてるんじゃなくて、受かった人の受験番号が書かれてるタイプのもの。

3級、2級、1級、と全部の結果が載ってる。

3級はまぁまぁ多いな。

2級合格者は3級の半分くらい。

ここまでは普通に予想できた。

問題は1級。

俺と香が受けた級だ。

１級の欄に載ってる受験番号は、なんと１つだけ。
１０５、とポツンと書いてある。

……実は、俺の受験番号は１０５だったりする。

「……みっきー！
受かってる！！
しかも１人だけ！？」

「ええっ、すごいです三木先輩！
１級って合格率２０％なんて言われてるのに！！」

まぁ、検定後も出来た感覚あったし自信もあった。
よほどのミスをしてない限りは受かってるかな、とも思ってた。

でもまさか……受かってるのが俺だけなんて、夢にも思わないじゃない。

「おめでとうございます、三木先輩！！
さすがですね！」

「おめでとうみっきー！
……でも憎いっ」

「……ああ、ありがとう」

とりあえず素直に礼を言うことにした。

「みてこれ。
みっきーに教えてもらったとこは完璧なのに、やっぱり速度が足りなかった」

「速度だけだったら練習すればそのうち出来るだろ。
頑張れ」

香の結果は速度が少し足りなかっただけ。

これなら次は確実に合格できるだろう。

「いつかは私も三木先輩みたいに……。
あ、そういえば漢検はどうでした？」

前半、なにか聞こえた気がしたが、あえてスルーしよう。

「漢検……お、受かってる」

「わぁ、私も受かってる！
やったぁ！」

漢検は俺達2人とも合格してた。

ちなみに2級だ。

「おめでとうございます！
……私も漢検受けようかな」

「さんきゅ。
受けて損はないし、おすすめするよ」

漢検って受けるだけでも結構意味があると思う。

仮に落ちても損はないと断言しよう。

「ところで柳田さん。
時間は大丈夫？」

「……あっ、もうこんな時間！？
次の授業体育でした！」

指摘すると柳田さんは慌てだした。

「わざわざ届けに来てくれてありがと。

急ぎすぎて怪我しないよう気を付けてな」

「はい、失礼します！」

そう言ってお辞儀をしてから走って教室に帰った。

急いでてもお辞儀なんて礼儀正しいな。

俺達は柳田さんを見送ってから教室に入った。

「ねぇ知ってる？
ワープロ検定1級受かったのって1人だけだったって！
しかもあの三木さん！」

「うわ、すごい！
さすがだね……」

こんな会話が聞こえてきたのは次の日だった。

正直、苦笑いしか出てこない。

つーか、”あの”ってなんだよ”あの”って。

俺は今更ながら噂の流れる早さを痛感した。

検定結果　2（後書き）

これ実話だったりします。

作者ではなく友人の実話です。

作者は隣で眺めてました。

そして体育祭話をどこにいれようか悩んでおります。

やっぱり夏休み話が終わってからかな……。

ここまで読んでくださってありがとうございました！

みなさん夏バテにはお気をつけ下さい。

それでは、また次回。

敵対視

「また期末テスト1位だったってね、三木さん。
検定もたった1人だけ受かっちゃうし……ほんとすごいよね」

「いいよね、そんなに頭良かったら勉強も苦労しなさそうだよね。
羨ましい……。
秘訣とかあるのかな？」

「仮にあったとしても私達にはマネできないでしょー。
相手は天才だもん」

「そうだよねー」

職員室にプリントを届けようと、教室を出るためドアの前。

廊下から聞こえてしまった他クラスの人の会話に、なんとなく外へ出にくくなってしまった。

「……」

「……だってさ、みっきー」

香が肘で小突いてくる。

……ごめんなさい、他クラスの人。

秘訣なんてありません。
天才でもありません。

唯一、記憶力だけは良いんです。

しいていうなら多分、勝負運も強いんだと思います。

「……はぁ」

俺は諦めて自分の席についた。

「あれ？
職員室行かないの？」

瀬田が訊いてくる。

「気が変わった。
あとで行く」

3人が隠さずに笑う。

……笑うな。

俺達は４人で会話してたところ、勢いよく教室のドアが開けられた。
ドアが壁にぶち当たってうるさい。
思わず顔をしかめるが、それも一瞬。
ドアの方向も開けた人も見ずに、気にしないことにした。

「あらぁ、三木さん。
ご機嫌いかが？
周囲から持て囃されてさぞかし良いご気分でしょうね」

「……」

ドアを開けた本人は、俺に用があったらしい。
現にわざわざ俺の机の目の前まで来て、悪意たっぷりの挨拶をしてくれる。
正直話し掛けられて困ったが、黙ってるわけにもいかないだろう。

「……どーも、七村さん」

俺は七村一姫（ななむらいつき）さんに、当たり障りのない挨拶を返した。

敵対視　２　－ｓｉｄｅ香－（前書き）

なんか……最近シリアス成分多くね？
と思う今日この頃です、こんにちは。

シリアス苦手な方、ごめんなさい。

敵対視　２　－ｓｉｄｅ香－

七村さんはみっきーの机の前に立って、座ってるみっきーを見おろす。

目は闘志がみなぎってるみたいにギラギラさせて。

七村さんは、私達と同じ3年生で隣のクラス。

成績優秀でテストの順位も常に学年2位。

そう、2位。
これが重要。

常に2位……つまり、常にみっきーの下ってこと。

テストは毎回みっきーが1位で、七村さんは頑張っても頑張っても負けてるみたい。

もともと勝負なんてしてないけど。

でも七村さんはそれがすごく悔しいみたいで、なにかっていうとみっきーに突っ掛かってくる。

「検定、お1人だけ受かったらしいじゃない。どんな風にカンニングをしたらバレないのか教えていただきたいわ」

「別にカンニングしたわけじゃないよ」

「あら、それじゃあ随分と運がよろしいのねぇ。今日の放課後、教会にでも行って神に祈りでも捧げてきたらどうかしら？」

「あー、そうだね」

何かを言われても、基本的にみっきーは軽く流す。

机に肘をついて手に顎を添えて、視線は七村さんから外して窓に。

聞いてるこっちがイラッとするようなことを言われても、涼しい表情は崩れない。

ていうか、たとえ困った表情はしても怒ったところは見たことないかも。

怒鳴るのも想像できない。

みっきー、悪いのは口調だけだし。

怒りの沸点は多分私よりもずっと低い。

七村さんはみっきーの机をバンッと勢いよく叩く。

「いつまでそんなすました顔していられるかしらね。
その顔、見てるとイライラするわ」

……それなら来なければいいのに。

七村さんの勝手すぎる言葉にイライラが増した私は、そう言おうとした。

それが出来なかったのは、チラッと向けられたみっきーの視線が『やめろ』と伝えてきたから。

「悪いけど、地顔だからしょうがない。
せめてそのイライラが収まるように、少し消えるから安心して」

みっきーは机からプリントを引き抜いて立ち上がると、気怠そうに教室を出た。

「……ふん。
そのままずっと消えればいいのに」

七村さんはみっきーの後ろ姿にも悪態をぶつけることを忘れない。

私達はまたイラッとしたけど、それよりみっきーを追いかけた。

敵対視　3（前書き）

後書きにて

敵対視　3

廊下に出ると、クーラーがきいた教室との温度差がすごかった。

蝉が騒いで夏らしさをより一層感じる。

「みっきー！」

そんなことを思いながらプリントを持って職員室に向かう途中、さっきまで教室にいた香達が追いかけてきた。

「……酷ぇ顔」

俺は振り返って思わず笑ってしまった。

3人の顔は何とも言い表しにくい表情を浮かべてる。

見ただけでも5つは感情が重なってるだろうか。

「だってみっきー、七村さんが……でもみっきー怒らないし、えっと……」

香は言葉が纏まらないらしい。

まぁ、言いたいことは理解できる。

なんたって短くも長い、2年以上の付き合いだからな。

「ねぇ、みっきー」

まだ言葉が纏まってない香より先に、隊長が声を掛けてきた。

俺は返事をせずに顔だけ隊長に向ける。

「あのね、みっきーはもうちょっと怒ってもいいと思うの。
じゃないとストレスとか、溜まらない？」

「……それは七村さんに怒れって意味？
相手を逆撫でするだけだと思うんだけど」

「それはそうだけど……」

というより、そもそも俺は七村さん相手に怒りは湧いてこない。

俺こうみえてもわりと穏やかな性格だからな。

はっはっは。

「七村さん。
あれでかなり努力してるみたいだしな。
俺みたいなのがヘタなことも言えないだろ？」

まぁ、七村さんは確かに何かあると突っ掛かってくる。
けど、ろくに努力してない俺に余計なことを言う権利は無い気がした。

「でも……」

「かといって手を抜くのも失礼だしな。
軽ーく相手にしつつ流すのが一番だ。
当たらず障らず、適度に」

突っ掛かってくるのを嫌がってテストの順位を下げるのは簡単だろう。

でもそれは努力家相手に失礼極まりない行為だ。

毎度毎度何かを言われるのは正直面倒だけど、無視する気にもなれないし……。

で、今の状態に落ち着いたわけだ。

「みっきー！」

「うん？」

香の声で思考から引き戻される。

「七村さんはみっきーのこと好きじゃないのかもしれないけど、私達はみっきーのこと好きだからね！」

「……愛の告白か？」

思わず吹き出しそうになったのは秘密だ。

「違うよ！！
美しい友情！」

「わかってるって。
冗談だよ、冗談」

俺は職員室に向かって再び歩みを進めた。

つーか、美しい友情って……。

まぁ、そういうのも悪くねぇな。

後ろから駆け寄る3つの足音を聞きつつ、そう思う。

「三木さんってさ」

「うん」

「他のクラスの人が想像してるより普通の人だよね」

「天才とか言われてても、頭は良いけど普通に話しやすいもんね」

「うんうん」

「でも接点無い人は同じクラスじゃなきゃわかんないよ」

「話してみないとわかんないからね。
表情少ないし」

「んで、良い人だよね」

「うん。
口は悪いけど、超良い人」

「他のクラスの奴ら、三木を凡人とは別格みたいに見て損してるよなぁ。
面白い奴なのに」

「ほんとほんと」

七村さんが教室を出た後。

クラスの男女共にこんな会話がされてるなんて、当然俺は知るはずがなかった。

敵対視　3（後書き）

思いの外、長くなってしまった『敵対視』の話……。

今回で区切りがつきました。

でもなんか今後もシリアス話が続きそうな予感……。

いや、微シリアスくらいな気がしないでもない……？

苦手な方、本当すみません。

せめて間にほのぼのした話挟もうかな……。

時間潰しにでも読んでいただけると幸いです。

ここまで読んでくださってありがとうございました！

散歩（前書き）

予想外の長さに……。

読んでくださってありがとうございます！

散歩

「ねぇ、お姉ちゃん」

「なんだ？」

日曜日。

俺は音楽を聴きながらダラダラ過ごして休日を満喫してた。

結衣が話し掛けてきたから中断したけど。

「ちょっと散歩行きたいんだけど」

「行けば？」

「……」

「……わかったよ、一緒に行けばいいんだろ」

俺のダラダラする休日、終了のお知らせ。

「あっつい……」

「もう7月だからな」

今日は３０度超えてるんだっけ。

雲一つない青空で太陽がギラギラと地上を照らす。

ついでだから信長と家康も連れてきたが、暑そうにしてる。

途中で水分摂らせないとな。

ちなみに信長は飼い主以外には咬むし吠える。

どこかで言った気がするけど。

でも散歩の時は他人に吠えないように躾をしてる。

ただ安全は保証できないから、撫でたりするのは断ってるが。

「お姉ちゃん、日焼け止め塗った？」

「塗ってねぇ」

「え、真っ黒になっちゃうよ？」

「日焼け止めとかハンドクリームとか苦手なんだよ。

なんかベタベタするし」

「ふーん……でもあんまり焼けてないね」

「そうか？
まぁ、気合いだ気合い」

気合いで日焼けが回避できるとは思えないが、今の俺は考えるのも面倒だ。

テキトーな受け答えをする。

「そういやお前、学校はどうだ？」

「楽しいよ。
友達もできたし」

「そうか。
よかったな」

「うん。
勉強もまだ簡単で……あ！」

話してる途中、急に顔を上げた結衣が叫んだ。

その方向を見てみると、女の子が１人。

「誰だ？」

「同じクラスの友達だよ。
真緒ちゃーん！！」

「……あ、結衣ちゃん！」

向こうも気付いたらしい。
駆け寄ってきた。

「こんなところで会えると思わなかった！
結衣ちゃん、この近くに住んでるの？」

「うん！
真緒ちゃんはこの辺りじゃないよね？
散歩？」

「うん、そう。
いつもより遠くに来てみようと思ったの」

「そっか」

ちょっと端っこで2人を眺めてた俺に真緒ちゃんが向き直った。

「こんにちは！」

「こんにちは。
結衣がお世話になってます」

「いいえ、こちらこそ！

あの、かっこいいお兄さんですね！」

「……」

いや、確かに俺は服も男っぽいし。
さらに声も女性らしくない低さだし。

まぁ、女の服はイマイチ似合わないし声は地声だからしかたない。

「えっと、お世辞でも褒めてくれてありがとう。
でも俺、お姉さんだから。
よろしくね」

「えっ……？
す、すみません！！」

じっくり顔を眺められて、俺が女だと気付いたのか頭を下げてきた。

「いいよ。
よく間違えられるし、こんな格好してる俺に責任あるし」

間違いはよくあることだ。
別に構わない。

「真緒ちゃん、結衣にはお姉ちゃんがいるって前に教えてたのに…
…」

「お姉さん以外にも兄弟いるんだと思っちゃった……ごめんなさい」

「いいっていいって。
休みの日にでも遊びにおいで。
結衣はいつも暇だから」

「いつもじゃないもん。
でも遊びに来てね、真緒ちゃん！」

「うん、行くね！
それじゃあ、ばいばい結衣ちゃん。
さよなら、お姉さん」

「ばいばい！」

「さよなら。
帰り道、気を付けて」

真緒ちゃんは去っていった。

しかし、男に間違えられたのも久しぶりだな。

最近はあんまりなかったのに。

まぁ、ただ指摘されないだけなのかもしれないが。

「お姉ちゃんってなんで男の人みたいな服ばっかり着るの？」

「男物のほうがラクだし柄が好みだから。

あと俺は女性服が似合わないから」

「ふーん……確かに男物の服のほうが顔に合ってるよね、お姉ちゃん」

「自覚してるから女物着ないんだよ。
まぁ、単純に男物のデザインが好きってのもあるけど」

それからも話をしつつ、しばらく歩いて公園に入った。

散歩　2（前書き）

後書きにて。

散歩　2

俺達は公園に入った。

木陰にあるベンチに腰をおろして、すぐ横にある水道の蛇口を捻る。

蛇口から流れる水を信長と家康が飲む。

流水だから飲みにくそうだが、水を溜める物なんてない。

なんとなく2匹を眺めてたら、そのすぐ後ろを犬を連れた人が通りすぎた。

ミニチュアダックスか……小型犬ってなんか新鮮。

それにしても、家康でかいな。

信長もでかいけど、比べると家康のほうがでかい。

小型犬見たあとだから尚更だな。

「……おい、結衣。
飲み物買ってきていいぞ」

ふと見た公園の隅っこに自販機を見つけ、結衣に財布を渡す。

「お姉ちゃんは？」

「テキトーに頼む」

「はーい」

ちなみに、これはパシリじゃないぞ。

弟や妹をもつ者の自然現象だ。

そう、断じてパシリではない。

「あっ、ワンコだー！」

結衣の後ろ姿を見送っていると、小学校1年生くらいの女の子が駆け寄ってきた。

女の子は家康を撫でる。

「ダメじゃない！

すみません、勝手に……」

母親らしい人が女の子を叱る。

「いえ、構いませんよ。

ただ、こっちの茶色い犬は触らないでくださいね」

茶色い犬とはもちろん信長のことだ。
家康は大人しいから平気だろうが、リードをしっかり握って注意する。

「お母さん、お母さん！
このワンコ、顔怖いけどかわいいねー」

……さすが家康。
子供も理解できる強面だ。

「それにしても……とても大きなワンちゃんねぇ。
うちはアパート住まいでペットを飼えないから羨ましいわ」

「動物、お好きなんですね」

「ええ。
実家のほうでたくさん飼ってるものですから」

なんとなく母親と会話が始まる。

「ふふ、変な顔ー」

家康を撫でていた女の子は、急に家康のヒゲを思いきり引っ張った。

ほんの一瞬、予感か直感か。
ザワリとした感覚がよぎった。

「バウッ！！」

勢いよく一吠えして飛び掛かろうとする家康。

それより先に咄嗟でリードを引き寄せて、首輪を掴んだ。

「……っ。
うわーん！！」

びっくりした女の子は尻餅をついて泣き出してしまった。

家康のリードをベンチの脚にくくりつけて、片膝をついて女の子の様子を伺う。

「びっくりしたな。
ごめんね、大丈夫？」

比較的優しく声を掛けて、女の子を立ち上がらせ服についた土をはらう。

怪我はないみたいだ。

「申し訳ありません。

注意不足でした」

立ち上がってから、女の子の母親に頭を下げる。

「い、いえ。
この子がワンちゃんに悪戯したせいですし……気にしないでください。
この子も、ただ驚いただけですから」

ふと見ると、サイダーの缶を2つ持った結衣が少し離れた所で心配そうにしてる。

手招きして、缶を1つ受け取り女の子に持たせた。

「これはお詫び。
許してくれないかな？」

「……グスッ……うん。
ごめんねワンちゃん」

女の子が家康に頭を下げた。

「ありがとう。
また遊んでやってくれると嬉しいな」

「うん！
また遊ぶね！」

よかった、この子が犬嫌いにならなくて。
こういう体験が犬を怖がる原因になりやすいからな。

そして女の子と母親は帰っていった。

女の子に手を振りつつ、家康を撫でる。

「お前は何も悪くないからな」

女の子だって何も悪くない。

俺の注意不足だ。

まぁ、怪我もなかったからよかった。

「それにしてもお姉ちゃん、力あるね。
咄嗟で家康のリード引っ張るなんて」

「ん、ああ。
なんかあの瞬間無心だった」

咄嗟の時って、わりと無心だったりするよね。

ふと、今まさに公園を出るところだった女の子が振り返って手を振

りながら大声で叫んだ。

「ばいばーい、ワンちゃん！
お兄ちゃん！」

「……」

忘れられてるかもしれないから、改めて宣言しとこうか。

俺は、女です。

散歩　2（後書き）

この話も無駄に長くなりましたね……。
もっと簡略化して掛ける腕をもちたいものです。

まぁ長くなった一因としては、この話が実話ということもあります。
誰の実話かはふせますが。

ちなみに、許可は得てます。
ネタの提供者はノリノリです。

わりとあちこちに実話が入り込んでるかも……？
という読者様のドキドキをひそかに期待してます。

ここまで読んでくださってありがとうございました！

ご感想等ありましたら、作者にぶつけてくださると嬉しくて小躍りします。

いや、Mじゃありませんよ。
ほんとに。

長々と失礼しました。

入院

「なんか体調悪い……」

「更年期？」

「うん」

母さんは数年前から更年期で体調が悪い。

今日は特に酷いらしいけど。

更年期とは…女性の、成熟期から老年期へと移行する時期。平均４７歳ごろから始まる閉経期を中心とする前後数年間をいう。

更年期障害とは…更年期の女性に、卵巣機能の低下によってホルモンのバランスがくずれるために現れる種々の症状。冷え・のぼせ・めまい・動悸・頭痛・腰痛・肩凝り・不眠・食欲不振など。

以上、国語辞典より。

まぁ、母さんは更年期障害で体調が悪いわけだ。

「なんで国語辞典なんてひいてるの？」

「いや、ちょっと説明を……って、また薬飲むの？」

母さんは病院からもらった薬を取り出してる。

更年期の症状を抑える効果があるらしい。

「体調悪いから」

「薬飲みすぎだよ母さん」

母さんの場合、飲みすぎて効果が薄いんだと思うんだ。

「ねぇ、なんか……」

呼ばれて、母さんの顔を覗き込む。

俺は母さんの言いたいことがわかった。

「本格的に体調悪いかも」

「入院、ですか」

あのあと。

体調の悪さなんて当然俺にはどうしようもないわけで、手っ取り早く救急車を呼んだ。

とはいえ、結衣を置いて救急車で付き添いすることもできない。

とりあえず母さんが落ち着くのを待ってから、連絡があった病院に向かった。

「お母さんは、随分と体調が悪いようだからね。
入院すれば点滴で症状を和らげることができるし、飲み薬の管理もできるから安心だ」

俺は先生から説明を受けていた。

まぁ、病院側に管理してもらえるならこれ以上安心なことはない。

ここの先生、いつもお世話になってるからな。

母さんもあの状態じゃ、家にいたって家事もまともに出来ないだろうし。

「ご迷惑おかけします。
母をよろしくお願いします」

「お任せください」

頭を下げて挨拶したあと、お互いに握手を交わした。

「というわけで、しばらく母さん帰ってこないから。そこんとこよろしく」

「うん、わかった」

家に帰って、留守番してた結衣に話しをした。

俺は途中で買った晩飯の材料を冷蔵庫にしまう。

「……お姉ちゃん、料理できるの？」

「結衣。
この世には初めからなんでも出来る人間なんて存在しないのである」

なんでこんな自然の摂理について語ってるのか。

答えは、俺はろくに料理をやったことがないからだ。

はっはっは。

夕食　－ｓｉｄｅ結衣－（前書き）

時期的には夏休み1週間前くらいですよー。

読みにきてくださってありがとうございます！

それでは、どうぞ。

夕食　－ｓｉｄｅ結衣－

2日前、お母さんが入院した。

でもお姉ちゃんがいるし、とくに不安はなかった。

お母さんは入院してたほうが安心できるしね。

ただ一つ。

結衣の安心できない瞬間が、ただ一つだけある。

「ちょっとお姉ちゃん！
包丁持たないでって言ってるでしょ！？」

「うるせぇ。
練習だよ、練習。
いずれ一人暮らし始めたら使わなきゃいけないだろ」

結衣のお姉ちゃん。

見た目はお兄ちゃんだけど、頭が良くてなんだかんだと言っても優しい。

結衣の自慢のお姉ちゃん。

お母さんが入院しても、お姉ちゃんが洗濯はできるし料理も思ったより出来た。

でも、ただ一つ。

包丁を持たせると何か危ない。

「ねぇ、今日のご飯何にするの？」

「野菜炒めと炒飯。

気が向いたらスープ作るかも」

お姉ちゃんの作るスープ好き……じゃなくて！

「ちょっとお姉ちゃんストップ！」

「なんだよ」

お姉ちゃんはめんどくさそうに視線を上げる。

その手にはキャベツ。

「野菜炒めのキャベツだったら、ちぎっていれればいいんだよ！？」

「んなことわかってる。
だから練習だっての」
そう言うとザクザク切り始めた。
結衣はもう見つめることしかできませんでした。

「……？？」
お姉ちゃんは頭にハテナを浮かべてる。
「なんで千切りになってるの！？」
「……さぁな」
まな板の上には見事な千切りがのってる。
目離さないほうがよかったかな……。
お姉ちゃんは包丁の扱いは問題ないのに、なぜか切り方がおかしい。
この間もキュウリがカニさんウインナーみたいに切られて出てきた。

一口サイズに切ってあったのが救いだったと思う。

「……ま、いっか」

お姉ちゃんは千切りキャベツでちゃっちゃと野菜炒めを作った。

……切り替え早いね。

「おい、飯だぞ。
手洗って自分の箸とコップ準備しとけよ」

「はーい」

言われた通り手を洗って戻ると、テーブルにはご飯がならべられてた。

炒飯とスープ、それから千切り野菜炒め。

「「いただきます」」

とりあえず野菜炒めを食べてみよう。

いつの間に切ったのか、もやしまで真っ二つに切られてる。

何をどうしたのか、ニンジンは輪切りですごくペラペラ。

お肉は普通だけど、見た目は野菜炒めには見えない……。

気を取り直して、一口食べてみた。

「……おいしい」

「そうか。
よかった」

切り方はあれだけど、味付けはバッチリ。

どんなに酷い切り方でも、必ず美味しくできるのがお姉ちゃんの料理だ。

「ねぇお姉ちゃん」

「なんだ？」

「包丁あんまり使わないでね」

「いいだろ別に」

「味付けはいいのに、もったいないよ」

「腹に入れば同じだろ」

「……」

料理の神様。
どうかお姉ちゃんが早く包丁に慣れますように。

「なに祈ってんだ？」

「ご飯がもっと美味しくなるおまじないだよ」

「……？」

神様、本当にお願いします。

寝坊

朝、目が覚めて時計を見た。

今日は月曜日だ。

「……」

もう一度確認しよう。

今日は月曜日だ。

つまり学校がある。

現在時刻、９時３６分。

「……！！」

瞬間、俺は飛び起きた。

……が、再びゆっくり横になった。

「どうせ遅刻だし……」

結衣は振替休日だから学校はないし、俺は今行っても完全に遅刻だ。

今行ってもいつ行っても変わらないなら急ぐことはない。

学校に連絡しようかとも思ったけど、やめた。

なぜかって、そりゃあめんどくさいからだよ。

それにただの寝坊だし。

俺はゆっくりと朝飯を食べて洗濯をすませてから学校に行く準備を始めた。

結局、学校に着いたのは１１時を過ぎた頃だった。

教室のドアを開けると、一斉に注目をあびる。

まぁ遅刻魔の異名を持つ俺には、このくらいなんてことない。

「みっきー！」

一番最初に隊長が声を掛けてきた。

「どうしたの？
最近は遅刻も少なかったのに……。
それに連絡が無いって先生が心配してたよ？」

「マジで？」

それは悪いことしたな。

連絡するほどの理由もなかったわけだが。

「あ、今ね、クラスの人が5人ずつ進路指導の先生と進路について話してるの。
いま香ちゃんも行ってるところだけど、みっきーも行ったほうがいいよ」

「そうか」

せっかく隊長が教えてくれたわけだし、行くかな。

……あー、めんどくさい。

「じゃ、とりあえず行ってくるわ。

先生来たらよろしく」

「うん、わかった。
話ししてる場所は進路指導室だからね」

俺は自分の机に鞄を置いて、進路指導室に向かうことにした。

あー、めんどくさい。

進路指導室

俺は進路指導室にきた。

中から話し声が聞こえる。

ノックして返事を聞いてから、ドアを開けた。

「3年の三木です。
遅れてすみませんでした」

「はい、中に入って座りなさい」

謝罪して頭を下げると、聞き覚えのある穏やかな声が降ってきた。

この先生は指導室指の先生であり、おじいちゃん先生。
ちなみに、俺のクラスの副担だ。

「失礼します」

俺が椅子に座ると、香が小さく手を振ってきた。

俺も軽く片手だけ上げて返事した。

しばらく説明を聞いて、面接の部屋への入退室についての指導を受けた。

あと１０分で授業も終わる。

（……そういえば、携帯の着信音消してねぇな）

うちの学校は携帯の持ち込みは禁止だ。

どうしても連絡で必要な人は担任に預けることになってる。

当然俺がそんな面倒なことやるはずもなく、携帯は常に手元にある。

いつもは着信音を消して持ち歩いてるけど、今日はうっかり忘れた。

（……まぁ、俺遅刻してきたし。

万が一鳴った時は「まだ預けてないんです」的なこと言えばいいか）

などと考えていたとき、制服のポケットに違和感。

～♪、♪♪、

……！！

なにこのタイミング。

携帯鳴ったときの言い訳考えた直後に携帯が鳴るとかどんな奇跡。

音に気付いたらしい俺以外にも授業を受けてる5人が、咳をしたり物音をたてたりしてる。

携帯の音を先生に聞かれないようにしてくれてるんだ。

なんていいクラスメイトだろうか。

俺はすぐポケットに手を突っ込んでサイドキーで音を消す。

それが済むと、手で携帯を隠しつつポケットから抜き取って背中側に回して画面を開いた。

そのまま後ろ手で電源を切る。

最中、視線をずっと先生に向けることは忘れない。

（ふぅ……）

これで安心。
よかったよかった。

「では、時間ですので授業を終わります」

もうそんな時間か。

挨拶をして先生は出て行った。

「三木、お前何やらかしてんだよ！」

「めちゃくちゃ焦ったー……」

クラスメイトの男子が笑いながら話し掛けてきた。

「いや、ついうっかり。
サンキュー、助かった」

「暇で寝そうだったのに目が覚めたよ」

「バレなくてよかったねー」

今度は女子が話し掛けてきた。

「あの先生でよかったよね、耳遠いし。
でももしバレてもみっきーなら言い訳考えてたでしょ？」

「そこそこにな。
でも騒音フォロー助かったよ」

「騒音フォローって…」

男子が吹き出す。

「いいクラスメイトがいて俺は幸せ者だなー」

「おーい、棒読みだぞー」

他の奴らがドッと笑う。

うちの男子はツッコミ上手だな。

「ええっ、入院!?」

進路指導室から戻って、香達に母さんが入院したことを伝えた。

「そう。
まぁ、たいした病気じゃないから2週間か3週間したら帰ってくると思う」

「そっか……」

香が何かモジモジし始める。

「なんだ?」

「あのさ、みっきー。
こんな時に訊くのもあれだけど……お泊まり会は、どうするの?」

お泊まり会か……。

母さんが退院するのが7月後半とみても、退院してすぐ家事ができるとは思えない。

そんな中に結衣を残して俺が不在ってのはちょっと無理な話だろう。

「……悪いけど、今回はパス。
できれば行きたかったけどな」

「そっか……そうだよね」

「……もしも行けたら、途中から参加させてもらうよ」

香の落ち込みようがすごくて、つい言ってしまった。

「うん、うん！
その時は絶対来てね！」

「ああ」

行けない時は夜中にイタズラ電話でもしよう。

「そういえば、今日の遅刻ってお母さんの関係で？」

瀬田が訊いてきたから正直に答えた。

「いや、普通に寝坊」

「普通に、って……」

「寝坊だけ？」

「ゆっくり朝飯食って洗濯してきた」

「……」

「さすがキングオブマイペース……」

「アイアムマイペース」

「名乗った！？」

「Ｉ＇ｍ　マイペース」

「発音よくなった！？」

今日もバカ言いながら１日を過ごす。

終業式（前書き）

読んでくださってありがとうございます！

今、時期は7月後半ですよー。

終業式

今日は終業式だ。

限りなくめんどくさい。

「……っきー、みっきー！」

「……ん」

香が横から揺すってきた。

俺は寝てたらしい。

「もう終業式終わったよ？
ずーっと寝てたね」

マジか。

座ったまま熟睡とか俺ヤバくね？

「教室帰ろう？」

「ああ」

教室では掃除が始まってた。

俺は迷いなく、窓拭きの掃除を始めるために新聞紙をとった。

「みっきー、窓拭き？」

「説明しよう。
窓拭きとは一番サボりやすい掃除場所なのである」

これは俺の持論だが、強ち間違いでもないだろう。

サボりやすく、それでいてサボってないように見えるのが窓拭きだと思う。

ようは新聞紙を持っとけばいいんだ。

「じゃ、私も窓拭きー」

「アタシもー」

俺達は掃除時間を喋りながら上手にサボった。

掃除も終わって担任の話しの時間。

「お前ら、ちゃんと宿題やってこいよー」

宿題の一覧表に目を通しながら、担任言葉を聞き流す。

「うわぁ……多いね」

「夏休みだしな」

まったく、せっかくの夏休みが台無しだ。

「……ねぇ、みっきー。
宿題、教えてくれない……？」

「いいけど、英語は無理だから」

「やっぱり？」

「当然」

英語は理解不能。

その後も先生の長い話を聞きながら、頭の中では別のことを考える。

（あー、今日の晩飯どうしよう。
たしか今日は卵が安いから、多めに買ってオムライスにでもしようか。
あと、ティッシュと洗剤もないから買ってこないと……つーかバイクに積めるかな？
一度家に帰って荷物置いてくるか）

と、ここまで考えたところでなんか主婦くせぇと思ってしまった。

……あえて気にしないでおこうか。

「じゃ、夏休みだからって気を抜きすぎないように。
以上」

いつの間にか担任の話しが終わった。

「みっきー、せっかくだから遊んで帰らない？」

荷物をまとめてる途中、香が話し掛けてきた。

「いいよ。
……あ、でも俺一回家帰って結衣の飯の準備してくるわ。
んで夕方４時には帰るけど、いい？」

「うん、わかった」

4時には買い物に行かなきゃいけないからな。

「……みっきー」

「ん？」

「お泊まり会、待ってるからね」

うーん……。

ここまで念を押してくるのも香にしては珍しい。

なにかあるのか？

「……ああ。

行けたら絶対行くから」

「うん！」

とりあえず返事はしておいた。

マジで行けそうだったら行こう。

なんか俺に用があるっぽいし。

「じゃ、どこ遊びに行く？」

俺は微妙に決意らしきものを覚えながら教室をあとにした。

宿題

「あああ解んない！」

ついに結衣が発狂し始めた。

奴はそれほどの相手なのか……！？

と、まぁ実況風に言ってみたわけだが所詮相手は宿題である。

実況風に言った理由はない。

あえて理由を付けるとしたら、多分俺は暇だったんだろう。

「がんばれ」

発狂する結衣に俺は一言だけ応援する。

夏休みに入って、なかなか宿題に手を付けない結衣。

だから俺は強制措置をとった。

簡単に言えば『宿題ｄａｙ』だ。

名の通り、1日ただひたすら宿題に明け暮れるという単純極まりない日。

単純とはいえ、やってるほうにしてみれば地獄でしかないだろう。

「お姉ちゃんの鬼……」

「宿題溜めて最後に泣くよりマシだろ」

ちなみに俺は今、キッチンに立ってる。

「中学って宿題多すぎない？」

「そういうもんだ。
ただ解答はついてるだろ」

「そうだけど……解答ついてても書くのは自分だもんね」

「解答があるから時間短縮できんだろ？
感謝しろよ。
んで、これ食ってやる気だせ」

そう言って結衣の前に皿を置いた。

スイカのシャーベットだ。
結衣はスイカ大好物だからな。
「わぁっ！」
うん、喜んでる。
よかった。
「いただきます！」
「どうぞ。
……さて、俺も宿題するかな」
香達が教えてくれって言ってたし、数学だけはちゃっちゃと終わらせとくか。
「うーん、美味しい！」
「そうか。
よかったな。」
テキトーに返事をしつつ、宿題一覧表に目を通す。

数学……量はたいしたことないな。

ただ問題の質が高いから、時間は掛かる。

……めんどくさい。

「結衣、コーヒー持ってこい」

「はーい」

これはパシリじゃないぞ。

自然現象であって、断じてパシリではないから。

そこんとこ、よろしく。

「……結構時間掛かったけど、捗ったな」

なんだかんだで3時間くらいずっと宿題を続けてた。

これで結衣も溜め込まなくなるといいんだが。

「結衣、宿題溜めるなよ」

「絶対溜めない」

うん。

『宿題ｄａｙ』改めて『地獄の夏休み最終日再現』作戦はなかなか効いたらしい。

よかったよかった。

……おいこら。

ネーミングセンス悪いとか言った奴、誰だ。

傷つくだろバカ野郎。

文句は受け付けない。

ただ『作戦名長いわ！！』ってのは受け付ける。

なぜなら俺自身もそう思ってるからだ。

「お姉ちゃん、ちょっと理科教えて！」

「ああ、いいよ」

とりあえず、今日も平和でなによりだ。

退院（前書き）

読んでくださってありがとうございます。

時期は7月の最後の週くらいですよー。

退院

プルルルルッ

「電話か。
おい結衣、手空いてるなら出ろ」

母さんが入院してから2週間が経った。

とくに不自由はないし、それなりに楽しく毎日を過ごしてる。

ちなみに俺は皿洗いをしてる途中だ。

そう、断じて妹をパシリにしてるわけじゃない。

「はーい」

結衣が電話に出た。

「もしもし。
……あ、うん、……うん、大丈夫。
うん……へぇ、そうなんだ。
ふーん……え!?」

「……？」

口調からして知り合いだろうと思った。

つーか時期的に母さんかな。

「お姉ちゃん！
お母さんが帰ってくるって！」

「マジか。
いつ？」

随分と急だな。
明日にでも帰ってくるのか？

「違うよ！
もう帰ってきてるって！」

「……は？」

インターホンが鳴る。

「だれか開けてー」

「……」

なんでうちの母親は事前に教えてくれないんだろう。

「ただいま」

「突然おかえり。
つーか連絡してよ」

母さんの荷物を整理して、洗い物は洗濯機に放り込む。
やることがない今のうちに洗濯をしておこう。

「そういえば……」

洗濯機を回してふと思う。

「なぁ母さん、晩飯どうする？」

「うーん……あんまり食欲ない」

そりゃ退院したばっかじゃそうだろうな。
とはいえ、食わないわけにはいかないだろう。

「……あっさりしたものなら食えるよな」

俺は母さんの返事を待たずにキッチンに立った。

簡単な酢の物と味噌汁を作って、買ってきてたタイの刺身をサッとお湯にとおす。

できた料理はテーブルに並べていく。

「ん、刺身はポン酢でどーぞ」

とりあえず母さんの晩飯完成。

結衣の飯は何にしようか……。

「佳亜」

久しぶりに呼ばれた気がする自分の名前。

俺は母さんのほうに視線だけ向けた。

「お疲れ様」

「……そっちこそお疲れ様」

おかえり、母さん。

イタズラ電話

母さんが帰ってきてからも特に生活が変わることはなかった。

「ねぇ、明日卵が安い」

「わかった。
買ってくるよ」

相変わらず俺は家事をやってる。

料理も一人暮らししたって問題ないくらいになったし、ある意味いい経験だったのかもしれない。

とりあえず人間の飯より先に愛犬達へ飯をやろう。

「ほら。
飯、飯」

犬達を跨いで皿を取りに行く。

ついでにテンションが上がって飛びついてくる家康をかわす。

こんなデカイ犬に飛びつかれたら堪ったもんじゃない。

まず食べるのが遅い信長に飯をやる。

ちょっとジジィだからな、信長。

家康をかわしつつ皿に飯を入れて信長の前に。

すぐ家康にも出してやる。

なかなか疲れるぜ、この仕事。

一仕事終えて家に入った。

俺達も飯を食い終わって、皿洗いも済ませた。

洗濯物もないし、ゆっくりしよう。

（そういえば……今日から8月だったか）

今日からお泊まり会だったっけ。

あいつらどうしてるかな……。

（……よし。
イタ電しよう）

携帯から香のアドレスを出して電話を掛けた。

トゥルルルル……

『もしもし？』

「おぅ、もしもし？
俺、俺」

『オレオレ詐欺ですか？』

「おぅ、オレオレ。
今すぐこの口座に１００万の小遣いプリーズ」

『小遣い高いよー』

このやりとりはお決まりパターンだ。

「ところで、今お泊まり会中？」

『そうだよ。

今日はね、カラオケに行ってきたよ』

「へぇ、よかったな」

『でもね、3人じゃあんまり盛り上がらないよ』

「まぁ普段は4人でいるわけだから、比べればそうなるだろ」

それにしても、電話口がやけに静かだ。

本当に盛り上がってないのか？

「……今、隊長達は？」

『さっちゃんはお風呂、心は寝ちゃった』

「そうか。

……お前、楽しい？」

あえて率直に訊いてみた。

はっきりさせておかなきゃいけない。

『楽しいよ。

……でもあんまり楽しくない』

矛盾に俺は思わず苦笑した。

『みっきー、お母さんの体調どう？』

「ああ、もう退院したんだよ。
家事はまだ俺がやってるけど、まぁまぁ元気かな」

『そうなんだ、よかった。
あ、さっちゃんお風呂上がったみたい』

「そうか。
じゃ、電話切るからな」

『……うん。
バイバイ』

「おやすみ。
瀬田見習って早めに寝るよ？
じゃあな」

電話を切った。

うーん……せっかくのお泊まり会であの静かさは可哀想だよな。

香の寂しそうな声も耳に残る。

さて、どうしたものか。

「佳亜、行っていいよ」

「……え？」

考えてたら母さんに声を掛けられた。

「母さんと結衣は叔母さんの家に泊まりに行くから。
佳亜は香ちゃん達のところに行ってきていいよ」

「いや、でも……」

「せっかくの夏休みでしょ」

悩んだ。

考え込んでかなり悩んで、

「……うん、行ってくる。
ありがとう」

普段より人数が少なければ自然と盛り上がらない雰囲気になるもんだ。

俺が行って何か変わるとは思えないが、せめて静かな雰囲気くらいは打破できるかもしれないし。

よし、明日はいざお泊まり会へ。

俺は切ったばかりの電話を掛けなおした。

参加（前書き）

ここからしばらくお泊まり会の話が続きます。

そこそこ長くなる予感……。

すみません。

読んでくださってありがとうございます！

参加

「あっつ……」

今年は猛暑だな。

俺は昨日のうちに纏めた荷物を持つ。

バイクを出してヘルメットをハンドルに置いた。

今日は香主催のお泊まり会に参加するために、1時間掛けて香の婆ちゃん家に行く。

もちろん、昨日のうちに香に連絡をいれてある。

途中で休憩いれよう。

暑さで気力が保たねぇ。

2日分の荷物を詰めたバックは重いしデカイ。

当然バイクの荷物いれに入るはずもなく、荷台に置いて長い手提げを肩に掛けた。

ちなみに、母さん達はすでにおばちゃんの家に行った。

ヘルメットを被って、バイクのエンジンをかける。

（残りのガソリン少ないし、いれてから行こう）

そう思いつつ出発しようとした時。

「みっきー！」

……？

空耳か。

「みっきー！！」

「……ん？」

俺の目の前に止まった車。

その中から香が顔を出した。

「まさか迎えにきてくれるとは思わなかったよ」

「だってバイクじゃ移動大変でしょ？」

昨日お泊まり会参加の連絡をいれたあと、香がおじさんに話して迎えにきてくれたらしい。

ありがたい。

瀬田と隊長も一緒に車に乗ってる。

「すみません、わざわざこんなところまで迎えに来ていただいて。お世話になります」

「いやいや、構わないよ。みっきーさんだったかな？」

みっきーさんって……。

すごい名前で呼ばれてしまった。

「君が来ないってわかった時、香ちゃん落ち込んでたからね。来てくれてよかったよ」

「ちょっと！」

おじさんの言葉に香が抗議の声を上げる。

「あはは、そう言っていただけると気がラクです」

ちなみに俺、普段は無表情が多いけど愛想笑いは出来る人だ。

「とりあえず、家まで行ってみっきーの荷物おろすでしょ？その後どうする？」

香が訊いてきた。

「お前に任せるよ。出掛けるにしても、そっちの街とかあんまり詳しくないし」

「うーん……あ、じゃあ久しぶりにカラオケ行こっか」

「「いいね」」

この3人、カラオケ好きだよな。

まぁ俺も人並みには好きだけど。

「じゃあ、カラオケな。店とか任せるぜ」

「うん」

それから後も、車の中では雑談が絶えなかった。

カラオケ

「「「ひゃっほぅ、カラオケー！」」」

「テンション高いな」

俺達は一度香の婆ちゃんの家に行って俺の荷物を置いてから、カラオケに来た。

んで、この3人のテンションの高さよ。

俺にはついていけない。

「ねぇねぇ、なに歌う？」

「じゃあまず心が最初で！」

「なんでアタシが！？」

「そりゃあやっぱり、ねぇ？」

「ねぇ？」

「いっつもアタシが最初じゃん。
じゃあもう、とっとといきまーす！」

「「イェーイ！！」」

そのあいだ、俺はコーラを飲みながらひたすら傍観に徹する。

曲が流れ始めた。

「みっきー、音量調整よろしく！」

「はいはい」

なぜか俺は毎回音量調整係だ。

香曰く、俺が一番耳がいいからとか。

入った部屋に一番ベストな曲とマイクの音量に調整出来るらしい。

正直、誰にでも出来そうだ。

「～♪、♪♪～♪」

瀬田が歌い始めた。

その最中にも、隊長と香がどんどん曲を入れていく。

この中では隊長が一番上手いかな。

瀬田も上手いけどたまに音程がぶれるし。

香は……なんていうか、リズム感のいい音痴だ。

リズム感いいし声もいいんだけどな。

聞き心地の良い音痴だ。

本人も歌好きだし、音痴でも恥ずかしがらずに歌う奴が俺は好きだ。

とかなんとか言ってる間にも香達はどんどん歌っていく。

ちなみに、なんでさっきから俺が歌ってないのかというと……まぁ単純に俺はレパートリーが少ないんだ。

歌うっちゃ歌うけど、香達ほどじゃない。

「ねぇ、そろそろみっきーも曲入れてよ」

「……そうだな」

そろそろ1曲くらい入れよう。

（なににしようかな……。
バラードとかそんな気分じゃないし、初っぱなからアップテンポは疲れるし……）

とりあえず男性歌手の歌をテキトーに入れた。

「はい、みっきー。
マイク」

「ん、サンキュ」

曲が流れ始めて、マイク電源を入れた。

軽く咳払いして喉の調子を整える。

「～♪♪～♪、♪、♪～」

なんか歌うの久しぶりだな、とかぼんやり考える。

俺、歌ってる間はなぜかぼんやりしちまうんだ。

「おぉー、さすが上手い！」

「耳が幸せ……」

ぼんやり歌う俺には残念ながらお世辞すらも聞こえなかった。

ギリギリ歌い終わる頃、ぼんやりから戻ってきた俺。

曲が終わってマイクを切った。

「ねぇみっきー、一緒に歌おうよ」

「いいよ」

隊長が誘ってきた。

「あ、私も私も！
なにか一緒に歌おう？」

「いいよ」

今度は香。

好きだよな、デュエット。

まぁ、こんな感じでなかなか盛り上がったわけで気付いたら6時間

経ってた。

そろそろ香のおじさんが迎えに来てくれる時間だ。

夫婦

迎えに来てくれたおじさんの車に乗って、カラオケを出た。
ファミレスで飯を食べて、帰り道でスーパーに寄る。

するとなぜかおじさんは、俺に五千円札を握らせた。

「……？」

「なにかデザートでも買っておいで。
ジュースとかもね。
お金は君が管理してね」

「いえ、そんなお気遣いなく。
夕食もご馳走していただきましたし」

「いいのいいの。
香ちゃんはよく飲み物飲むしね。
夜も長いから夜食にお菓子でも買ってきなさい」

ここまで言われると、遠慮するのは逆に失礼だろう。

「ありがとうございます。
それじゃあ、お言葉に甘えさせていただきます」

おじさんは車に残って、俺達は４人でスーパーに入った。

つーかなんで俺にお金渡すんだ。
普通、香に渡すだろ。
とか考えてる間にもカゴには飲み物や菓子がどんどん入れられてる。
基本的に香が。
「みっきーコーラ飲むよね」
1．5リットルのコーラが3本、カゴに入った。
香の奴、なかなかわかってやがるぜ。
「コーラのおつまみどうしようか。
ぬれ煎餅とかエビ煎餅とかでいい？」
香の奴、随分とわかってやがるぜ。
そんな感じで買い物を済ませて、車に戻った。
「着いたー」

香の婆ちゃん家に着いた頃は、もう辺りは真っ暗。

「「「お邪魔します」」」

香の婆ちゃんの家は和室の綺麗な家だった。
とりあえず買ってきた物を冷蔵庫に。

ちなみに、香のおじさんは帰った。

「みっきーお風呂は？」

「あとで入ろうかな。
誰か先に入ってこいよ」

「私もあとででいいや。
心、行ってきたら？」

「うん、いってくる」

俺は居間の壁に背を預けて座った。

「みっきー、どうぞ」

香から差し出されたコップを受け取ると、コーラを注いでくれた。

「……なんか、夫婦みたいだよ」

隊長が遠い目をしながら言うが、気にしないことにする。

その後交代で風呂に入って、夜中まで寝ずにゲームとか喋ったりしてた。

俺が眠気で意識を飛ばした頃は、もう外が明るくなってきていた。

柔軟剤

「……ん」

起きた。

時計を見ると１０時。

寝返りをうつついでに、周りを見渡す。

隊長の掛け布団がずれてる。

掛け直してやろうと起き上がると、すぐ横で何かがモゾモゾ動く。

（香か。

そういやこいつ、昨日は『怖いから』とか言って一緒に寝たんだっけ……）

こんな真夏には暑苦しくてしょうがない。

俺は香を起こさないように布団から出て、隊長の掛け布団を掛け直してやる。

（昨日は結局、居間で寝ちゃったな……。
まぁ、それを考慮して事前に布団敷いてたけど）

ちなみに、瀬田はちゃんと寝室で寝てる。

あいつ、１２時を回るとすぐ寝るんだ。

残ってた昨日のコップや食器を音を立てないように片付けて、勝手ではあるが流し台を借りて洗う。

……なんだろう。
なんか母さんが入院してから家事の癖がついてしまった。

料理一つまともに出来なかったのに。

まぁ、いい人生経験だと思うことにした。

洗い物が片付いた。

洗面所借りよう。
着替えもしなきゃいけない。

着替えを持ってこっそり洗面所に行った。

着替えを済ませて顔も洗って戻ってくると、香達が起きてた。

「おはよー、みっきー」

「おはよ。
洗面所、借りたけど」

「いいよいいよ。
私も着替えてくる」

香と隊長もそれぞれ着替えて、瀬田も準備を終えて起きてきた。

朝飯は昨日のうちに買ってもらったパン。

「ねぇ、みっきー。
柔軟剤って洗剤と一緒に入れるの？」

「あ？」

ドアの方を見ると、香が洗濯物を抱えて洗濯洗剤持って立ってた。

「柔軟剤は最後。

つーか、洗濯すんの？」

「うん、せっかくだし」

とりあえず洗濯機見に行くか。

洗濯機は昔懐かしい二層式だった。

つっても、二層式で洗濯したことあるからやり方くらい普通にわかる。

「洗濯物は？」

「これ」

受け取って洗濯機に放り込む。

「……」

俺の目に止まった物。

それは鮮やかな赤いチェックのパジャマ。

「なぁ、これ誰の？」

「心のだよ。

どうしたの？」

「……お前、洗濯したことないだろ。
おーい、瀬田ー。
ちょっと来てくれー。」

瀬田を呼ぶ。

「なに？」

「これさ、普段お前の家でどうやって洗濯してるか知ってる？」

「えー……多分他の物と一緒に洗ってると思うけど」

多分か。
信用できねぇ。

「ちょっと濡らすぞ？」

洗面台で水につける。

あらやだ、透明な水が見事な赤い色水に変わって……、

「じゃねぇよ。
あっぶな、やっぱ色落ちすんじゃねぇか」

何回も洗濯してるなら話は別だが。

「あれ？

おかしいなー」

「お前実はこれ、あんまり着てないだろ」

いいや、もう。

瀬田のパジャマは手洗いするとして、他のを洗濯するか。

水溜めて、洗剤入れて、待つ。

しばらく経って香に呼ばれて様子を見に行く。

「うん、すすぎもオッケーかな。

で、柔軟剤あんの？」

「はい、これ」

受け取った柔軟剤をよく見る。

「おま、これ液体洗剤……」

思わず笑ってしまった。

「ええっ、どうしよう！」

「いや、柔軟剤なくても別にいいから」

柔軟剤と液体洗剤の間違いって割りとよくある。

みんなも気を付けよう。

そんなこんなで、なんとか洗濯も終了したわけだ。

聞いた話では、今日の予定ではボウリングに行くらしい。

ボウリング

ボウリングとか何年ぶりだろう。
最後にやったのは小学生の時だった気がする。

「みっきー、早く球選びに行こうよ」

「ああ」

俺達はボウリングに来ていた。
またおじさんが送ってくれて。
お世話になりっぱなしだな。

「さて、どれにしようか……」

いろいろなボウリング球を持ってみて、一番よさそうなのを選んだ。
重すぎず、軽すぎず。

つーか俺、家康散歩してるせいか腕力とか握力とか結構あるほうだよな。

バカ力とまではいかないが。

「順番どうする？」

「じゃあ無難にじゃんけんで」

決まった順番は、香→隊長→瀬田→俺。

「よーし！
いっきまーす！」

「がんばれー」

香に声援を送る。

「ほい！」

ボウリングの球は……見事真っ直ぐガーター。

隊長、瀬田も続けたが香同様ガーターに。

「ボウリングってこんなに難しかったっけ……？」

「何年もやってないからじゃないかな……？」

瀬田と香が呆然としてる。

まぁど素人だし、こんなもんだろ。

ふと思った。

「俺、もしかしたら得意かも」

「「ええっ！？」」

ぼつりと呟いた言葉は、２人にしっかり聞こえたらしい。

俺、あの有名な某リモコン型ゲーム機でやるボウリングのゲームが得意なんだよ。

とはいえゲームと本物じゃ違うだろうけど……距離感とかイメージとか、ね。

「みっきー、何年もボウリングやってないんだよね？」

「うん。

まぁ、とりあえずやってみる」

俺はボウリング球を持って投げた。

フォーム？
そんなもん知るか。
なんとなくだ。

球は思ったより真っ直ぐ滑っていった。

「……おお」

８ピン倒れた。

ど素人にしてはまずまずか。

次は、ゲーム感覚で緩くカーブをかけてみる。

意外とやれば出来るもんだ。
もう１ピン倒せた。

「やったぁ、ちゃんとしたボウリング！」

香がハイタッチしてくる。

ちゃんとした、って……。

まぁいいや。
これで感覚はつかめた。
そこそこいけるかも。

さて、結果は。

香…５８
隊長…６２
瀬田…５５
俺…１７０

「みっきーぱねぇ！」

「プロか！
いや、ゲームのプロか！」

感覚つかんでからは調子が良かった。
ストライクとかいくつか出たし。

ゲームもバカに出来ないな。

とりあえず……、

「疲れた」

結果…寝不足で運動（ボウリング）をしたら疲れる。

この結果が予想出来た人は、まぁ半分くらいいたらいいな。

「みっきー！
玉ねぎがみじん切りみたいになっちゃったよ！」

「あー、だからむやみに切ろうとするなって」

俺達は今晩飯を作ってる。

最初は菓子作りの上手い隊長と香に任せようと思ったが……どうもこの２人、菓子作り以外はダメらしい。

まぁ出来ないもんはしょうがない。

んで、母さんが入院してる間に料理出来るようになった俺が晩飯を作ることになったわけだが……。

手伝ってくれるらしい香のおかげで片付けが増える増える。

「……香、もう座って「みっきー！
にんじんって生だとお腹壊すよね！？」……おーけー香、ありがとう。
手伝いはいいから、風呂の準備してきてくれ」

あと、にんじんは生でも食えるから。

そんなこんなで、なんとか料理を作り終えて晩飯を食った。

「うまっ！
これ美味しいよ、みっきー！」

「そりゃどうも」

人の家に来て図々しいが、今日は最初に風呂に入らせてもらおう。

疲れた。

みんな風呂を済ませてゲームをしてたら１２時を過ぎた。

当然、瀬田はもう寝てる。

９時間は寝ないと足りないらしい。

１時を回ったくらいで隊長も寝た。

寝るつもりはなかったんだろうな。
布団を被ってない。

「香はどうする？」

隊長に布団を掛けながら訊いた。

「んー……もうちょっと」

「そうか」

「みっきーは？」

「寝ないよ。
お前まだ眠くないんだろ？」

「……なんでわかるの？」

俺も微妙に眠くなってきてたが、こいつに付き合ってやる。

「なんとなく」

「そっか……」

俺は知ってる。

こいつが少し不眠症気味だってこと。

直接訊いたわけじゃないけどな。

しばらくどうでもいいことを話しながら香がゲームするのを眺めてた。

時計を見ると2時。

「それでねー、……！？
なに！？」

「……」

突然、バツンッという音と共に家中の電気が全て消えた。

「ちょ、っと……なにこれ怖っ！！
なんで電気消えたの！？」

「落ち着け。
停電だろ」

近くにあるはずの携帯を手探りで取る。

手に取った携帯のランプを付けた。

「丑三つ時だからなの!?
みっきーどこ!?」

「だから落ち着けって、ここにいるから。
……道路の街灯は付いてる。
ブレーカーが落ちたんだろ。
香、この家のブレーカーどこだ?」

「え、っと……あっちの廊下」

香の案内でブレーカーを探す。

「これか」

「うん……」

「ちょっと離れろ。
ブレーカー弄るから」

「うー……」

しがみついてくる香の手を外した。

少し背伸びしてブレーカーに手を伸ばす。

ギリギリ手が届くか。

「丑三つ時だし真っ暗だし、怖いよ……。
幽霊とか……」

俺は人間のがよっぽど怖ぇよ。

もしこれが人間の仕業だったら、とか考えた。

無い話じゃないと思う。

今この家には女しかいないしな。

後ろには香がいるし、寝室と居間には瀬田と隊長が寝てる。

誰か入ってきた時は容赦なく殴ろうと決めた。

まぁ何事もなく、しばらくブレーカーを弄ったら電気は復活した。

単純に電気の使いすぎだろうな。

何もなくてよかったよかった。

「なんか目が覚めたな」

「そうだね……」

居間に戻って烏龍茶を飲みながら天井を見上げた。

電気って大事だな。

「お前のおじさんに話したら笑うかもな」

「うん……あの人、おじさんじゃないんだけどね」

香と目を合わせた。

「……どういう意味で？」

俺は訊く。

停電の後だからか、なんとなくそんな雰囲気だった。

多分、香がずっとしたかったんだろう。

真面目なトークタイムが始まる。

親友　－ｓｉｄｅ香－（前書き）

微シリアスですよー。
苦手な方はご注意を。

いつも読んでくださってありがとうございます！

親友　－ｓｉｄｅ香－

私は雰囲気に任せて話しを始めた。

「おじさんじゃなくてね、お父さんなの」

みっきーは驚かない。
予想できてたんだと思う。

「そうか。
それ、何で言わなかった？」

たしかに、今までにチャンスはあった。

心が私の父親について訊いたこともあったし。

あの時はまだよく知らなかったけど、今ならわかる。

みっきーは微妙な間とかでも敏感に察知する。

心から訊かれた時私はテキトーに誤魔化したけど、見破られてたんだと思う。

「お父さんがいないのは本当だし……ちょっと言いづらくてね」

「……歳？」

「……っ」

図星。

私とおじさんは並んで歩いてたら孫とじいちゃんに見られる。

見た目だけだとどうしても一般的にはそう見えるのはわかってるし、

それは仕方ないことだってわかってる。

けど……。

「……一緒に歩いてて、『あら～、お孫さんおいくつ？』ってよく訊かれるの」

「嫌か？」

「嫌っていうか……ちょっと、恥ずかしいかな。

親子なのに見た目はおじいちゃんと孫だもんね……」

みっきーが私を見る。

視線に耐えきれなかった私は下を向いた。

「……それはな、恥ずかしいことなんてないぞ」

烏龍茶を一口飲んで、みっきーが言った。

「見た目も少しはあるだろうけど、お前の場合可愛がられてるのが見てとれるから孫に見られるんだろ」

「……え？」

可愛がられてる？

私が？

「普通でも、子供にこんなによくしてくれる親はそんなにいねぇよ。しかも俺達までお世話になりっぱなしだし、娘の為に時間つくってくれるなんて良い父親だと思うけどな」

嬉しい。

そう思った。

「……そうかな？」

「ああ」

「……ありがとう」

みっきーに話して良かった。

それからしばらく、みっきーは黙って私の話しを聞いてくれた。

私の心の病気のこと、中学は入院してて行ってないこと、昔の友達関係の嫌な思い出。

改めて訊いてみると、やっぱりみっきーは病気のことと中学に行ってないことを気付いてたみたい。

私はずっとこういう話をしたかったんだと思う。

今まで親友とよべる友達も出来なくて、ほとんど高校から初めて入った人付き合いの輪。

私は自分の深い部分を話せる相手が欲しかったんだ。

その後もお互い色々話してわかったことがある。

みっきーと私は同じような状況が多い。

おばあちゃんが若いうちにガンで亡くなってたり、脳梗塞の親戚がいたり、父方と母方での親戚関係の違いとか。

私達自身のことでも、お互い長女でしかも妹が同い年だったり。

深いところから浅いところまで、似たようなことが多くて話しが合った。

話しを理解してくれる人がいるなんて思わなかった。

すごく親近感が湧いてくる。

お泊まり会、やってよかった。
みっきーが来てくれてよかった。

みっきーと、友達になれてよかった。

「みっきー、卒業してからも遊ぼうね」

「ああ、そうだな」

「絶対ね。
また泊まりにきてね」

「ああ。
じゃあ週1でくるわ」

「早っ！！」

「冗談だ」

（これからは、みっきーのこと親友って呼んでもいいかな）

私の初めての親友。

嫉妬　－ｓｉｄｅ隊長－

私は布団の中で起きてた。

２人の話を聞いてしまった。

悪いと思ったけど、目が覚めて眠れなかった。

香ちゃんはみっきーに信頼を寄せてる。

もちろん私や心ちゃんもそうだけど、香ちゃんには負ける気がした。

……モヤモヤする。

これは多分嫉妬だと思う。

いろんな人から信頼されるみっきーに嫉妬してる自分がいる。

私自身、みっきーを頼りにしてるのに。

（どうしよう……頑張って寝ようかな）

嫌な自分を振り払うように寝返りをうつ。

「みっきー、私ちょっとお手洗いに行ってくる」

「ああ」

香ちゃんが立ち上がって部屋を出た。

シーンとした中で、みっきーが携帯を弄る音が響く。

「……隊長、今なら起きてても不自然じゃないぜ？」

（……！）

私はゆっくり布団から起き上がった。

「気付いてたんだ……」

「まぁな」

あの雰囲気だったから声掛けられなかったけど、……と付け加えるみっきー。

「信頼されてるね、みっきー」

（うわ、なんか嫌な言い方……）

自分の言葉に嫌悪を感じる。

「……なんで香は、俺に話しをしたと思う？」

「え？」

みっきーは携帯を弄りながら言った。

「……香ちゃんがみっきーのことを信頼してるからでしょ？」

「じゃあなんで隊長と心がいない時に話したか、わかる？」

なんでって……。

そんなの、私達には話したくないからじゃないの？

「隊長が聞いた通りにな、あいつ中学は行ってなくて友達付き合いは俺達より乏しいわけよ」

「うん……」

「だからな、隊長達に嫌われるのが怖いんだと思うぜ。

あいつは」
怖い……？

「あいつが俺だけに話しをしたのはな、多分俺がいくつか気付いてるのがわかってたからだ。
父親のこととかな」

「……」

黙ってみっきーの話しを聞く。

「だから、それを話していいのか俺で試したんだと思うよ。
下手に隊長に話して気まずくなるのが嫌だったんだろ。
あいつ、隊長大好きだからな」

ふ、とみっきーが笑う。

「ああ、もちろん俺もな。
アイラブユー隊長」

みっきーは冗談で投げキッスを飛ばす。

思わず笑いが込み上げた。

（みっきーはやっぱりみっきーだな……）

たとえ嫉妬しても、この冗談の上手い友達を嫌いになれる日はこない。
絶対に。

「……私、どうすればいい？」
私は香ちゃんの話しを聞いてしまった。
香ちゃんにどう接すればいいのか、私にはわからない。
「いつも通りでいいんだよ。
それが一番だ」
「……そっか」

足音がして、香ちゃんが部屋のドアを開けた。

「あれ？
さっちゃん起きてたんだ」

「ああ、ついさっきな。
そうだ、香アイラブユー。
ついでに瀬田も」

「アイラブユー」

私達は香ちゃんと別室の心ちゃんに投げキッスを飛ばして笑い合った。

「ア、アイラブユー……？」

香ちゃんは首を傾げながら私達のマネをして投げキッスを飛ばす。

そういえば、明日はもう帰らなきゃいけないんだ……。

お泊まり会、またやりたいな。

帰宅（前書き）

後書きにて。

帰宅

結局、昨日も寝たのは朝方。
昨日というより今朝だ。

俺は眠気と戦いながら朝飯を作る。
時間的にはほとんど昼飯だな。

「みっきー！
お願いだから寝ながらご飯作らないで！
ヒヤヒヤするから！」

香……お前、なんでそんな元気なんだ。

「ん……卵焼きっぽい物、完成。
これ運んで」

「卵焼きっぽい物って何！？」

知らん。

形は卵焼きだけど何入れたか忘れた。

「んで、味噌汁的な物とおにぎりらしき物も運んで」

「みっきーしっかりして！
味噌汁的な物とかおにぎりらしき物とか何なの！？
何が入ってるの！？」

知らん。

とりあえずみんなで飯を食った。

「おいしい……けど、これ何？」

「卵焼き、かな？
なんか違う気がする……」

「味噌汁、なんだけど……なんだろう不思議な味」

「おにぎりだけど……なんか、具がわからない……？」

「なんていうか……卵焼きっぽい感じ」

「そう！
そんな感じ！」

「これは……味噌汁的なお味？」

「うんうん！」

「おにぎりらしき物、だね。
これは」

「確かに……」

「ていうか、作った本人寝てるし……」

俺は飯を食うのもそこそこに、またウトウトしてたらしい。

それからしばらくして、目が覚めた。

香達はゲームをしてた。

「あ、みっきー起きた？」

「ああ」

欠伸がでる。

「みっきー、寝ながらご飯作らないほうがいいよ？」

隊長が言う。

「なんで？」

「美味しいけど不思議な感じがするから」

「……？」

意味わからん。

「そういや、今日は帰らねぇとな」

ふと思い出した。

布団も敷きっぱなしだし、少し掃除しないと。

「よし、帰る前に片付けをしようか」

「「はーい」」

瀬田と隊長は自分の布団を畳み始める。

「そんなことしなくていいよ？」

「いやまぁ、最低限の礼としてな。

世話になったし」

布団を畳んで押し入れにしまって、シーツは洗う。

居間は軽く掃除機をかけて、テーブルの上も拭く。

部屋の空気の入れ替えをしつつ、洗い物も済ませた。

そんな感じでみんなで分担して掃除した。

「こんなもんかな」

「おおー……早かったね」

1時間で済ませたにしては、まぁまぁか。

さて、荷物を纏めよう。

「んじゃ、ありがとう。
またな」

「うん、またね」

俺達はおじさんの車に乗った。

香は留守番。

おじさんは俺達を送ってくれた後仕事だからな。

「……またお泊まり会やろうね？」

「ああ、迷惑じゃなかったらまたやりたいな。

その時は楽しみにしてる」

「迷惑なんて全然！

絶対やろうね」

「そうだな。

夏休み中、また電話するわ。

じゃあな」

「うん、バイバイ」

香に見送られて、車は走り出した。

手を振ってる香に手を振り返す。

お泊まり会、来れてよかったな。

なんか、学生らしい青春じゃん？

そんなことを思いながら夏のお泊まり会は終了した。

次やるんだったら冬休みがいいな。

俺、寒いのが好きなんだよ。

とりあえず決めた事。

家に帰ったら寝よう。

クソ眠い。

帰りの車の中。

俺はおじさんとの会話よりもなによりも、睡魔と戦うのに必死だった。

みんなも睡眠不足には注意しよう。

帰宅（後書き）

読んでくださってありがとうございました！

今回でお泊まり会終了です。

思いの外、長くなってしまった……。

次回から新キャラが出ます。

夏休みの間に2人新キャラ登場させようとしてるんですが……書き分けられるかな……？

頑張ります。

それでは、また次回。

失礼しました！

再会

お泊まり会から帰ってきて1週間。

別になにかが変わることもなく、俺は夏休みを満喫してた。

（……もう3時か）

やることもなく、ソファーに寝転んで暇を持て余してる俺。

（おー、髪長くなったな）

ふと目に止まった自分の髪。

切るのがめんどくさくて放置してたけど、これもうロングだな。

しかし切るのがめんどい。

なんとなく髪を弄ってると、母さんから買い物を頼まれた。

気が向いたから散歩がてら家康も一緒に連れてく。

信長は気分が乗らないらしいから留守番。

「あっついなー……。
なぁ、家康？」

家康も暑そうだ。

公園寄って水飲ませるか。

「あっ、お姉ちゃーん！」

公園に入ると小さい女の子が走ってきた。

「……ああ。
あの時の……」

家康が飛びかかった女の子だな。

また会うとは思わなかった。

「家康だー！
触ってもいい？」

「いいよ」

女の子が家康を撫でる。

本来、こいつはよっぽどのことでもない限り暴れないんだ。

注意したし、もう飛びかかったりしないだろう。

「おーい、千華！
急に走り出して何……」

「……？」

駆け寄ってきた足音に振り向くと俺と似たような歳の男。

手に持ってたプラスチックの小さなバケツをなぜか落とした。

まぁ、そんなことはどうでもよくて。
俺は男の顔に見覚えがあった。

「……龍？」

思い当たる名前を呼ぶと、男は顔を明るくさせた。

「せ……先輩っ！！」

本名、神谷龍斗（かみやりゅうと）。

こいつは同じ中学だった後輩だ。

再会　2

「まさかこんなところで会うとは思わなかった。
お前、この近くに住んでたんだな」

俺達2人はベンチに座って話す。

千華ちゃんは家康と遊んでる。

龍とは小学生の時から一緒に遊んだりしてた仲だ。

所謂、幼馴染みだな。

中学も同じだったし付き合いはそこそこ長い。

「はい。
結構近くに住んでるんですよ。
……あ、母から聞きました。
公園で千華に親切にしてくれた人が居たって。
さすがに三木先輩のことだとは思いませんでしたけど……」

「親切、か？
こっちに非があるわけだし……せめてお詫びはしなきゃな」

あの時、家康が飛び掛かった女の子の兄貴が龍だとは想像もしなかった。

つーか、出来るはずがねぇ。

それにしても、世間って狭いな。

「そういやお前、俺の1コ下だから高2だっけ。どこの高校行ってんの？」

「……やっぱり、知らないですよね……」

「ん？」

龍は少し落ち込んだような顔をする。

「僕、先輩と同じ高校です」

「……マジで？」

知らなかった。

ホントに知らなかった。

いや、逆に何で知らなかったんだって話だけど。

「マジです。

いえでも、僕から話し掛けてませんし……知らなくて当然ですよね」

「ご、ごめん」

素で反応したせいか、龍はさらに落ち込んでしまった。

しかし、話し掛けられてないとはいえ約1年間気付かないとは……。

自分の注意力の足りなさを反省する。

「ごめんな。
これからはまた前みたいに仲良くしてくれないか？」

「……！！」

龍は衝撃を受けたみたいな顔をして固まった。

少し待ったけど、返事が帰ってくる気配がない。

「……ダメ？」

龍の性格上ダメと言われるとは思ってないが、こうも無言が続くと不安になる。

「そ、んな全然！！
てゆーかこちらこそお願いします！」

「あ、ああ。
サンキュ」

少し立ち上がって返事された。

その勢いある返事と顔の急接近にびっくりして言葉に詰まってしまった俺。

急接近を自覚したらしい龍は、顔を真っ赤にして離れる。

「あ……すいません」

「いや、いいけど……相変わらずだな龍」

昔からこいつは何かと顔を真っ赤にすることが多い。

俺にはない表情の豊かさ。
見てて飽きない。

ふと目についた買い物袋で思い出した。

「あ、やべ。
俺買い物帰りだったんだ。

家康ー帰るぞー」

千華ちゃんと遊ぶ家康を呼び戻す。

「じゃ、また学校でな」

「は、はい！

……あの、送りましょうか？」

「いいよいいよ。

近くだから」

「そうですか……」

え、なぜに落ち込むんだ。

「……じゃあ、途中まで頼める？」

「はい！！」

あまりの落ち込みように、俺は妥協するしかなかった。

「わーい、お姉ちゃん手繋ご？」

「いいよ」

横にきた千華ちゃんと手を繋ぐ。

俺達は3人で喋りながら帰った。

再会　3　－ｓｉｄｅ龍斗－（前書き）

後書きにおまけ付きです。

再会　3　ー side 龍斗ー

家に着いてすぐ、僕は自分の部屋に飛び込んだ。

「お兄ちゃん、どうしたのー？」

妹の千華が心配そうに声を掛けてくる。

「……ありがとう千華」

千華は首を傾げる。

本当にありがとう。

まさか……まさかまた三木先輩と話せる機会があるとは思わなかった。

僕はベッドの上でバタバタ暴れてさっきのことを思い出す。

『これからは前みたいにまた仲良くしてくれないか？』

先輩の言葉。

それが僕にとってどれだけ嬉しいものか、先輩は知らないと思う。

暴れるのをやめて、寝転んで天井を見る。

「いつからだったかな……」

「なにが？」

「なにがって、そりゃ三木先輩を……！？
母さん！？」

自分以外の声に、うっかり応えそうになる。

見ると、母さんがニヤニヤしながら部屋を覗いてた。

「千華に聞いたわよ。
いいわねぇ、アンタにもそういう相手がいたのねぇ。
どおりで彼女の一つもつくらないと思ったら……」

「ちょ、違うって！
三木先輩はそんなんじゃ……」

「ふーん。
で、いつから？」

「いやだから……！

……え、と……。
はっきり自覚したのは、……中1」
反論出来ない空気に観念して答える。
今の僕は顔が真っ赤なはずだ。

「なるほどなるほどー。
ちゃっかり甘酸っぱい青春してたのねぇ。
中1からだから……もう5年？
アンタなかなか一途じゃない」

「別にそんなんじゃないって！」
もう泣きたくなってきた。
泣いていいかな……？

「へぇー。
バカねぇアンタ。
入学してさっさと佳亜ちゃんに話し掛ければよかったのに。
あの子礼儀正しいし、人を邪険にするような子じゃないでしょ？」

「そりゃ、そうだけど……」
あれから母さんに三木先輩について色々喋らされた。

もう泣いていいよね……。

「とにかく。
こっちの存在はわかってもらえたんだし、あとはアタックあるのみね」

「えぇ！？」

「心配しないで龍ちゃん。
お母さんも協力してあげるわ」

「や、だって、アタックなんて……」

そんな露骨に言われると恥ずかしい。
恥ずかしくてパンクしそうだ。

「龍ちゃん、あんな良い子なかなかいないわよ。
それにむこうだってきっとアンタに好感を持ってるはず。
頑張りなさい！」

「……うぅ」

限界。
パンクしました。

「いいわぁ～、こんなわくわく何年ぶりかしら」

母さん……楽しそうだね。

アタックか……。

ちょっと……頑張って、みようかな。

再会　3　－ｓｉｄｅ龍斗－（後書き）

おまけ（会話文のみ）

――――

「へっくし！」

「お姉ちゃん、もうちょっと女らしいくしゃみしなよ……」

「うるせぇよ。
なんだろ、風邪かな」

「誰かがウワサしてるんじゃない？」

「ウワサね……『あいつ実は○○じゃない？』とか？」

「そうなの！？」

「冗談だ」

「……本当かと思った」

「まぁ、どうでもいいや。
……へっくし！」

――――

○○はご想像におまかせします。

読んでくださってありがとうございました！

速打ち

『みっきーの秘密を教えて！』

「……は？」

ことの始まりは香からの電話。

風呂から上がって部屋に戻ると、携帯に香からの着信履歴が残ってた。

掛け直そうと思ったら、タイミングよく本人から電話が掛かってきた。

電話に出て挨拶の一つでも、と思ったら開口一番に切り出されたのがこの言葉。

で、今に至る。

「いや、意味わからん。
何なん？」

『だから、みっきーってタイピングの速打ち得意でょ？
その秘密を教えて！』

「いや、最初簡潔に話しすぎだろ」
んな、当たり前みたいに言われても。

「で、秘密っつーかやり方を知りたいわけ？」

『そう！』

「その１、キーボードを正確に且つ完璧に覚えること。
その２、打ち込みの１０分間は集中力を最大まで上げること。
その３、パソコンを信頼すること。
以上」

『１と２はわかるけど……なに、パソコンを信頼するって！？』

「そのままの意味だ」

『いや、わかんないって！！』

「だからー、打ち込みで漢字変換あるじゃん？
見本と違う漢字が出たらって心配していちいち見て確認する人いるけど、そんな必要なし。
パソコンだって前後の日本語に合った漢字に変換する努力してるからよっぽどでもない限り任せてよし。
『さまざま』か『様々』か、とか『いろいろ』か『色々』か、とか微妙な変換の違いを確認すればあとはパソコンを信頼していい」

『なんか……深いね』

「まぁな」

『うん、わかった。
パソコンを信頼して頑張るよ』

「おぅ、頑張れ。
じゃあな」

電話を切った。

つーか、

「やっぱ何事も練習だよね」

こんなオチかよ、と思ったがこんなオチだよ。

花火大会

夕方、ポストを見ると俺宛の手紙が。
送り主は不明。

内容はこうだ。

『本日夜6時、海辺の駐車場にて待つ。
PS．浴衣とか着ると尚良し』

「……花火大会、今日だったっけ？」

確認するまでもなく、送り主は香だ。

なぜなら、この手紙はこの時期毎年くる。

あいつ……暇なんだな。

浴衣を着るといい、みたいなことが書いてあるけど生憎俺は浴衣なんて持ってない。

持ってても着るつもりないけどな。
動きにくそうだし。

香はもちろん隊長や瀬田は浴衣で来るから毎年俺だけ妙に浮くが、あえて気にしない方向で。

とりあえず準備しよう。

駐車場についたのは6時過ぎだった。

「みっきー遅ーい！」

「さすが遅刻魔」

「悪ぃ」

俺はバイクを駐車場に停めつつ謝る。

「しかも浴衣じゃないし！」

香に文句を言われる。

予想通り見事に全員浴衣だった。

「だって持ってないし動きにくそうだろ」

「もう！

持ってないんだったら貸したのに！」

「そもそも俺似合わなさそうじゃん」

「そんなことないよ！
きっと和風美人になるよ！」

和風美人て……。

「とりあえず、会場まで行こうぜ」

花火は8時からだけど、どうせこいつら浴衣だから移動に時間が掛かるだろう。

さらに買い出しで時間が掛かる。

「そうだね。
早く行こう、香ちゃん」

隊長が上手くのってくれる。

さすが隊長だぜ。

「うーん……しょうがない。
みっきー、ボンボンとってね！」

「はいはい」

俺達は会場に向かって歩き始めた。

花火大会　2（前書き）

後書きにおまけ投下。

花火大会　2

「うわー、すごいね！」

「走るなよ」

さすがこの町の花火大会だ。

祭り自体の規模がデカイから出店も多い。

花火の打ち上げ数は県内でトップだったっけ。

「はしゃいでるなぁ……」

「夜出歩くのって少ないからね」

香と瀬田が騒ぎながら小走りで進んでいくのを眺めつつ、隊長と俺は並んで歩く。

「みっきー、妹ちゃんは？」

「友達と行ったみたいだ。
甚平着てな」

「みっきーも着ればいいのに。

甚平なら浴衣よりはラクでしょ？」

「洋服に比べたら負けるだろ。
……あれ、あいつらどこ行った？」

香と瀬田が見当たらない。

「はぐれちゃったかな？
電話してみる？」

「だな。
電話に気付けばいいけど……」

上着のポケットから携帯を取り出して電話を掛ける。

プルル『みっきー！
早く来て！』

出るの早っ。

てゆーか、なんかただならぬ雰囲気だ。

「どうした。
なにかあったか？」

『とにかく、早く来て！
イルカの風船がついたかき氷売ってる屋台のとこにいるから！』

「わかった」

電話を切る。

「なんかあったみたいだ。
隊長、急いで歩ける？」

「うん、大丈夫。
早く行こう」

俺達は香のいるところに急いだ。

花火大会　2（後書き）

おまけ（会話のみ）

――――

「龍ちゃん！
花火大会なんて夏の一大イベントよ！
なんで佳亜ちゃん誘わないの！？」

「無理だって花火大会は！
先輩、絶対友達と行くに決まってんでしょ！」

「そこを誘うのが男よ、龍ちゃん！
当たって砕けなさい！」

「砕けたら立ち直れないよ！」

――――

最後まで読んでくださってありがとうございました！

花火大会　3

「みっきー、ここだよ！」

イルカの風船がついた屋台を見つけて近くまで行くと、すぐ香と瀬田を見つけた。

2人は何ともないみたいだな。

ちょっとホッとした。

「なんだよ、なにがあった？」

「あれ！

あれ見て！」

香に引っ張られて屋台の裏にある道を覗くと、男が2人いた。

屋台に隠れつつ、じっくり観察する。

「ほら、もっとよく見て！」

男2人は誰かに話しをしてるらしい。

見た感じナンパだろうな。

浴衣を着た女の子が1人……ん？

「あれって……柳田さん、か？」

柳田さんはインパクトが強かったから顔も覚えた。
間違いない。

「どうしよう！
警察呼ぶ！？」

「いや、ただのナンパだろ。
警察呼ぶほどの騒ぎじゃないから」

つーか香、ちょっと落ち着け。

「うー……どうしよう！」

「……ちょっと待ってろ」

俺は男2人に歩み寄る。

「み、みっきー……」

「ちょっとすいません。
うちの連れになんか用っスか？」

「あ？」

2人が振り返る。

もちろん、連れだなんて嘘だ。

「なんだよお前」

「その子、連れなんスよ。
返してもらえません？」

1人が明らかに不機嫌そうな顔をする。

「はぁ？
ふざけんなよ。
この子は俺らと遊ぶんだよ」

「その子、高校生なんですよ。
今の時間はうちの学校の教員が見回ってるんですけど、わりと堅い学校でね」

「それがどうした？」

「うちの学校、夜の男女の外出が禁止で、補導対象になるんです。
お兄さん達、見た感じ専門学生でしょ？
大丈夫ですか？」

「……チッ」

2人は舌打ちして去って行った。

よかったよかった、殴られたらどうしようかと思った。

まぁ、その時は迷いなく殴り返すつもりだったけど。

「せ、先輩……！」

今まで固まってた柳田さんが声を上げた。

「大丈夫、柳田さん？
1人で怖かったな」

「は、はい……。
ありがとうございます！」

「いえいえ」

柳田が頭を下げる。

香達が駆け寄ってきた

「みっきー！
大丈夫だった!?」

「ああ、この通り」

あ、そういえば……。

「柳田さん、1人で来たの？
よかったら一緒に祭りまわらない？」

「えっ……でも、いいんですか？」

柳田さんは戸惑ったように訊いてくる。

「いいよな？」

香達に尋ねる。

「もちろん！」

「だってさ。
迷惑じゃなかったら一緒に行かないか？」

「は、はい……！
嬉しいです！！
ありがとうございます！」

また柳田さんがナンパされたら、と思うと心配だしな。

後輩と遊ぶのもたまにはいいだろう。

「じゃ、行こうか」

花火大会　4

「わぁ……！」

「おー、花火始まったな」

俺達は歩きながら花火を見る。

柳田さん以外、それぞれが出店で買った食べ物を持って。

「みっきー……たこ焼き美味しそうだね」

「食う？」

「うん！」

余ったつまようじを香に渡す。

「柳田さん、何か買う？」

「えっと……じゃあかき氷買います。
ちょっと待ってもらってもいいですか？」

「いいよ」

ちょうど外灯があったから、その下で柳田さんを待つ。

「お、三木か。
久しぶりだな」

「あ、久しぶりですね学校の先生A」

「俺はモブキャラ扱いか」

モブキャラもとい担任と会った。

「見回りですか？」

「ああ。
女子生徒の中に男が1人いるかと思って近付いてみたらお前だった」

「そりゃすいませんね」

まぁ、この服装じゃしょうがない。
男物ってラクなんだよ。

「まぁ気をつけろよ。
んで10時までには家に帰れよ」

「はーい。
先生なんか奢ってよ」

「なんでだ」

「あれがいいな、綿あめ。
自分で買うと損した気分になるから買わないし」

「それ俺はいっさい得しないぞ」

「じゃあ、奢ってくれたら体育祭頑張るから」

「……毎年適度にサボる奴が言ってくれるな」

「ねー奢ってー」

「……しかたないな」

「全員分ね」

「……」

先生に全員分の綿あめを奢ってもらった。
もちろん柳田さんの分も。

優しいね、先生。

財布を覗きながら何かブツブツ言ってるのは見ないふり。

「そろそろ花火も終わるし、帰るか」

「だねー」

ちなみに、香は隊長の家に泊まる。

俺はバイクを押しながら歩く。

「柳田さん、家はこの近く？」

「はい」

「じゃあ送るよ」

「あ、ありがとうございます！」

途中で香達とは別れた。

「あの、先輩……今日はありがとうございました」

「いえいえ」

「あ、助けてくれたこともですけど……一緒に行こうって誘ってもらえて、嬉しかったです」

「そう？
楽しんでくれたならよかったよ」

柳田さんは少し表情を暗くする。

「私、ちょっと友達とケンカしちゃって……それで今日は1人だったんです。
でも、三木先輩達見てたら友達ってやっぱりいいなって思いました。
明日謝ります」

「そうか。
大人だな」

「そ、そんな……」

照れたように笑う。
柳田さんはこうでなきゃ。

「あ、私の家ここです」

「着いたか。
じゃ、また学校でな」

「はい！
ありがとうございました！」

頭を下げる柳田さんに手を振ってから、俺はバイクを走らせた。

メール（前書き）

横書きおすすめします。

多分縦書きだとなにがなんだか…

メール

―――――
受信ＭＡＩＬ［１／５００］
Ｆｒｏｍ：龍
Ｄａｔｅ：８／２３　２０：１６
――――――――――
こんばんは。
あの……今時間大丈夫ですか？
―――――

龍からメールだ。

そういえばこの前会った時にアドレス交換したんだっけ。

―――――
返信ＭＡＩＬ［１／５００］
Ｄｅａｒ：龍
Ｄａｔｅ：８／２３　２０：２１
――――――――――
おぅ、大丈夫だぞ。
どうした？
―――――

よし、送信完了。

俺は冷蔵庫から麦茶を出して飲む。

少ししたら返信がきた。

――――

受信ＭＡＩＬ［１／５００］

Ｆｒｏｍ：龍

Ｄａｔｅ：８／２３　２０：２５

――――――――――

あの、いきなりすみません。

先輩明日予定とかありますか？

――――

明日……２４日か。

あ、午前中は風呂掃除しなきゃいけないんだった。

――――

返信ＭＡＩＬ［１／５００］

Ｄｅａｒ：龍

Ｄａｔｅ：８／２３　２０：２９

――――――――――

午後からならないぞ。

なんで？

――――

送信して、待ってる間に洗濯物を畳む。

……なんか、返信遅ぇな。

風呂入るか。

風呂から出るとメールがきてた。

――――

受信ＭＡＩＬ［１／５００］

Ｆｒｏｍ：龍

Ｄａｔｅ：８／２３　２１：１１

――――――――――――

返信遅くなってすみません……。

あの、よかったら明日僕の用事に付き合ってくれませんか？

妹の千華が誕生日近いんですけど、何をプレゼントすればいいかわからなくて……。

――――

千華ちゃんの誕生日プレゼントか。

あいつ、いい兄ちゃんやってんじゃん。

―――――
返信ＭＡＩＬ［１／５００］
Ｄｅａｒ：龍
Ｄａｔｅ：８／２３　２１：１５
――――――――――
悪い、風呂入ってた。

プレゼント選びか。
俺でよかったら協力するぞ。
―――――

今度はすぐ返信がきた。

―――――
受信ＭＡＩＬ［１／５００］
Ｆｒｏｍ：龍
Ｄａｔｅ：８／２３　２１：１６
――――――――――
ありがとうございます！

えっと、時間とか決めてもらってもいいですか？
―――――

時間か……どうしよう。

風呂掃除したあとは風呂入りたいし……２時からでいいかな。

―――
返信ＭＡＩＬ［１／５００］
Ｄｅａｒ：龍
Ｄａｔｅ：８／２３　２１：１８
――――――――――――
じゃあ、２時からでいい？
あの公園で待ち合わせな。
―――

―――
受信ＭＡＩＬ［１／５００］
Ｆｒｏｍ：龍
Ｄａｔｅ：８／２３　２１：２１
――――――――――――
わかりました。

それじゃあまた明日お願いします。
おやすみなさい。
―――

おやすみなさい、て……もう寝るのか。
早いな。

―――
返信ＭＡＩＬ［１／５００］
Ｄｅａｒ：龍
Ｄａｔｅ：８／２３　２１：２３

ーーーーーーーーーーーーーーー
ああ、また明日。
おやすみ
｜｜｜｜｜

つーか、メールなんて久しぶりだ。
俺は電話派だからな。

「お姉ちゃん、シャンプーの詰め替えどこ？」

「洗面所の棚。
……なぁ、小学生の女の子って何貰ったら嬉しいと思う？」

「えー……わかんないよ」

「うーん……」

考えてみたらプレゼント選びって結構責任重大じゃね？
しっかり考えよう。

プレゼント選び

今日は気をつけようと思ったのに、また遅刻しちゃったな。

急ごう。

小走りで公園に向かうと、やっぱり龍が待ってた。

あいつ、俺と違って時間は必ず守るんだ。

「ごめん、待たせて。

……はぁ」

立ち止まって息を整える。

「いえ、全然待ってないですよ！

大丈夫ですか？」

「……ああ、大丈夫。

悪いな。

行こうか」

「はい！」

俺達は街に向かって歩いた。

しばらく会話しながら店を眺める。

「で、先に訊いておきたいんだけど。
千華ちゃんの好きなモノとかわかる？」

「好きなモノ、好きなモノ……あ、クマが好きですよ。
クマのぬいぐるみとか持ち歩いてますし」

「なるほど、じゃあこれとかどう？」

「……えぇ！！？」

俺が指差したのは手乗りサイズの木彫りのゴツい熊。

「これは……さすがに……」

「冗談だ」

「……」

「ふ、相変わらず引っ掛かりやすいな」

悪いとは思いつつ、つい笑ってしまう。

小学生の頃からよくからかったものだ。

「……」

「なに？」

「っ、いえ……なにも」

「……？」

なんなんだ。

機嫌を悪くしたとかそんなんじゃなさそうだし……。

「そ、それより……あのお店に入ってみませんか？」

「ん、そうだな」

まぁ、気にしないことにする。

（話しをそらせてよかった……。

久しぶりに間近で見ると破壊力が……）

龍の思想なんて俺は知る由もない。

「そういや、予算ってどのくらいか訊いていい？」

「あ、はい。

一応、手持ちは5千円なんですけど……」

「わかった」

（学生の小遣い考えると、出来る限り低価格で抑えたほうがいいよな。
んで、クマを……。
小学生はおもちゃを欲しがる年頃かもしれないけど、値段を考えるとちょっとな）

俺は考えながら品物を見て回る。

「あ。
あれどうよ？」

俺が指差したのはクマの絵柄が描いてあるハンカチ。

値段も手頃だ。

「ハンカチなら毎日使うモノですし……いいですね！
でも、ちょっとだけ柄が大人っぽくないですか？」

「まぁ、それは千華ちゃんの成長を見越してのことだ。
女の子はすぐ大人になるんだよ」

色合いは明るいから小学生の子も喜びそうだし、柄が大人っぽければ少し成長しても使えるだろう。

「そうなんですか……。
ハンカチのサイズはどうしたらいいですか？」

「少し大きめにしとくといいよ」

「わかりました、買ってきます！」

龍はレジに向かっていった。

少し時間掛かったけど決まってよかった。

千華ちゃん、喜んでくれるといいな。

お邪魔（前書き）

後書きに龍登場時恒例のおまけ投下です。

「ありがとうございました！
おかげでいいプレゼントが買えました！」

「どういたしまして」

帰り道。
俺達は少しゆっくり歩く。

「あの、よかったらお礼がしたいので……ウチに来ませんか？」

「龍の家に？」

確認の意味で訊き直したら、なんか急に龍が慌て始める。

「あ、いえあの……変な意味じゃなくて！
えっとですね……うちの母親が三木先輩にお礼を言いたいそうです。
それにプレゼント選びに付き合ってくれたお礼もしたいですし……
迷惑じゃなければ」

「迷惑なんてとんでもない。
でも別に礼を言われるようなことしてないんだけど……」

家康の件はこっちの不注意だしな。

「僕は先輩にお返し出来るようなものないですし……お礼にはなりませんけど、おもてなしします」

「そうか？
じゃあ、ちょっとお邪魔しようかな」

せっかくの親切だ。
素直に受け取ろう。

「ただいま」

「お邪魔します」

龍の家に来た。
和風の家で綺麗だ。

「おかえりなさ……あらまぁ！
もしかして佳亜ちゃん！？」

「あ、……はい。
こんにちは」

若くて明るい雰囲気の人が出てきた。
龍と千華ちゃんのお母さんだ。

俺は思わず勢いにおされる。

「こんにちは。
この間はご親切にしていただいてありがとう。
千華も喜んでたわ。
まさか龍ちゃんと知り合いだとは思わなかったけど」

「か、母さん……」

龍が顔を赤くする。

人前での龍ちゃん呼びが恥ずかしいんだろうな。

「とにかく、あがってちょうだい。
紅茶でいいかしら？」

「はい。
お構い無く」

とりあえず靴を脱いで揃える。

「お姉ちゃーん！」

「あ、千華ちゃん。
こんにちは」

「こんにちはー。

お姉ちゃん、こっちだよ！」

「ありがと」

千華ちゃんに手を引かれて居間にお邪魔させてもらった。

お邪魔（後書き）

おまけ（会話文のみ）

――――

「よくやったわ龍ちゃん！
うまく連れてこられたわね」（小声）

「変な言い方しないでよ……。
お礼っていうか、感謝の気持ちで連れてきたんだから」

「わかってるわよ。
うふふ、楽しみねぇ」

「本当にわかってる……？」

――――

佳亜が連れてこられたのは他意もあったんだよ、っておまけ話でした。

読んでくださってありがとうございました！

龍斗の妹（前書き）

忘れられてるかもしれませんが、龍くんの本名は神谷龍斗です。

一応、改めて紹介（笑）

畳の香りが広がる部屋の真ん中にテーブルがあって座布団が置かれてた。

龍に勧められて、ありがたく座らせてもらった。

「はい、お姉ちゃん！」

「ありがとう」

千華ちゃんが運んできてくれた紅茶を受け取る。

「ごめんなさいね、佳亜ちゃん。
千華、お姉ちゃんはお兄ちゃんのお客様なのよ」

「はーい」

「あ、お気遣いなく」

龍のお母さんに軽く頭を下げておく。

「あのね、お姉ちゃん！
千華ね、もうすぐ誕生日なの！」

「へぇ、そうなんだ」

当然知ってるけど知らないふり。

「それでね、千華が大好きなお友達いーっぱい呼んでお誕生日パーティーするの！」

「そっか、楽しみだな」

無邪気な子だな。

俺にもこんな時期があったのか……いや、ないな。

記憶にはない。

あったらあったで怖ぇ。

「うん！

ねぇ、お姉ちゃんもパーティー来て！」

「へ？」

自分の幼い頃についてじっくり考えてると、千華ちゃんから突然のお誘い。

「千華ねー、お姉ちゃんだーい好き！

だからパーティーに来てほしいな！」

「んー……」

向かい側に座る龍にチラッと視線を送る。

「あの、もし都合がよければ来てもらえませんか？」

「いいの？」

「はい。

千華も喜びますし、僕も……あ、いえ、なんでもありません」

俺達は千華ちゃんに聞こえないように小声で会話する。

「ホントに来てもいいの？」

千華ちゃんに確認。

「うん！」

「じゃあ行こうかな」

「やったぁ！」

千華ちゃんが抱きついてきた。

可愛いなぁ……。

しばらくは千華ちゃんの相手をしてたけど、千華ちゃんは家に来た友達と遊びに出掛けていった。

「本当にごめんなさいね、佳亜ちゃん。
せっかく上がってもらったのに千華の相手をしてもらって」

「いえいえ」

「紅茶冷めてないかしら？
よかったどうぞ」

「はい」

……。

目の前に置いてある紅茶を一口飲む。

「せ、先輩……？
どうしたんですか？
なんか表情が堅く……」

龍が声を掛けてくるけど、返事する余裕なんてない。

「……あっ！
そういえば先輩、紅茶苦手……」

「えっ、そうなの！？」

ごめんなさい龍のお母さん。
返事する余裕がないんです。

そう。
俺は紅茶が苦手なんだ。

体質に合わない。

つーか、少量とはいえ紅茶を口に含んだはいいが、正直喉に入っていかない。

味がダイレクトに伝わってきて背筋に寒気が走る。

（とりあえず飲み込まなきゃ……あれ、どうやって飲み込むんだっけ）

なんかもう、喉が飲み込み方を忘れたらしい。

「……っ、」

飲み込んだ。

どうにか飲み込んだ。
全身鳥肌だけど。

「せ、先輩……大丈夫ですか？」

「……うん」

……最悪だ。

出されたものをいただけないとか失礼すぎる。
でも口の中に紅茶の風味が残ってる限り、この鳥肌は消えてくれないだろう。

あー……申し訳ない。

「すみません……」

「いいのよ。
ごめんなさいね、気付かずに。
それにしても……今どきの子は紅茶が好きだと思ってたけど案外違うのね」

「どうでしょうね？
友達はみんな紅茶好きみたいですけど」

大抵の人が香りがいいとか言うけど、俺には香りを楽しむ余裕すらない。

「それじゃあ……佳亜ちゃん、コーヒーは大丈夫かしら？」

「はい、大丈夫です。
すみません、気を遣っていただいて……」

「……」

「……？」

龍のお母さんが急に黙った。

「あの、なにか「可愛いっ！」

「……！？」

なにかあったのか訊こうとしたら、急に抱きしめられた。

てゆーか急に豹変した。

「んも～、可愛い可愛いっ！
こんな可愛い子がいていいのかしら！？」

「りゅ、龍っ……助け、うぷ」

抱きしめられて言葉がまともに言えない。

「か、母さん。
そのくらいにしたほうが……」

「はぁ……。
やっぱり女の子はいいわよねぇ。
可愛いし礼儀正しいし。
千華も佳亜ちゃんみたいに育ってくれるといいわ」

いや、あの無邪気な子が俺みたいに育っちゃダメな気がする。

龍のお母さんが俺に言う”可愛い”の意味合いは容姿じゃなくて態度みたいなもんだし。

「あはは、どうも」

とりあえず苦笑いしか出なかったけどしょうがないと思う。

苦手　2　－ｓｉｄｅ龍斗－（前書き）

今回は龍くんが決意表明してます（笑）

てか思ったより長くなってしまったな、この話……。

苦手　2　ー side 龍斗 ー

三木先輩は一言断ってお手洗いに行った。

「うっかりしてたな……」

先輩の苦手なもの。

わかってたはずなのにな……。

それだけ会ってなかったってことだと痛感する。

「そういえば……」

もう一つあったな、先輩の苦手なもの。

たしか……、

「やーーだーー！！！！」

いきなり遠くから叫び声が聞こえた。

「……先輩！？」

「なに！？

佳亜ちゃん!?」

あの先輩が叫ぶなんて……一体なにが!?

「……っ、先輩!
どうしました、大丈夫ですか!?」

走って居間を出てみると、トイレに通じる廊下の隅っこに先輩がいた。

ちょっと涙目だ。

「先輩、どうしたんですか!?」

「りゅ、龍……っ。
ゆっくり、出来るだけ物音立てないようにゆっくりこっち来て」

「ゆ、ゆっくり……ですか?」

言われた通り、ゆっくりと先輩の近くに寄る。

「ひぅ……。
龍、早く……」

妙に可愛い悲鳴を上げる先輩。

ちょっとガッツポーズをしたくなったけど心の中だけに留めておく。

「一体どうし……クモ？
ってデカっ！！」

先輩の方向から覗き込むと、柱の影には特大サイズのクモがいた。

なんていうか、全体的に特大サイズ。

先輩は僕の背中にしがみつく。

「ごめん龍……どうにかして。
なんか動悸がヤバい」

ごめんなさい、先輩。
僕も違う意味で動悸がヤバいです。

「はぁ……」

「大丈夫ですか、先輩？」

「……うん、ありがと」

なんとか特大クモを退治して居間に戻ってきた。
先輩はテーブルに突っ伏す。
「相変わらずなんですね……先輩の虫運」
「虫運？」
母さんが訊き返してきた。
「先輩は超がつくほどの虫嫌いなんだけど、異常なくらい虫との遭遇率が高いんだよ。
しかも大体が特大サイズ」
「へぇ……、ウチにあんなに大きなクモが出るなんて珍しいと思ったら……。
怖かったわね、佳亜ちゃん。
もう大丈夫よ」
母さんはよしよしって言いながら先輩の頭を撫でる。
先輩のことが可愛くてしょうがないって目をしてる。
「すみません、人様の家で騒いで……。
恥ずかしい……。
龍、ごめんな。

昔っから虫の始末させて」

「いえ、全然です！
先輩のためならたとえタランチュラでも退治してみせますよ！」

学校でも虫が出てくるから、学校単位で有名だった先輩の虫嫌い。
中学の時にもよく僕が退治してた。

理由は簡単。
さっきみたいに、虫と遭遇した時の先輩は可愛すぎるんだ。

ヤクザ相手にもビビらない先輩が、虫相手になるとあれだ。
女性特有の『きゃー』って叫び声は上げないけど、悲鳴が可愛すぎる。

なんていうか……庇護欲をそそられる。

そんな感じで先輩のギャップにハートを撃ち抜かれた奴らが結構な人数いたわけだ。
虫を目の前にして余裕がない先輩は気付いてないけど。

だから僕は悪い虫がつかないように先輩のそばで見張ってた。

そのせいか、先輩は男子の中では一番そばにいた僕を頼ってくれることが多い。

（先輩は知らないでしょうけどね、それは僕にとって嬉しくてしょうがないんですよ。
だからもっと頼って下さい）

……そんな風に言えたらどんなにいいか。

（いつか！
いつか絶対言えるように頑張ろう！！）

僕は改めて決意を固めた。

晩御飯

あー、恥ずかしい。

人の家に来て叫ぶとかマジないわ……。

本気で自分の虫嫌いを恨む。

実は俺、クモどころか蚊も潰せないんだよ……。

ホント情けない。

「ただいまーっ！」

「あら、千華が帰ってきたわね」

俺は時計を見る。

5時か……。

「あの、そろそろ帰ります」

「あら、帰るの？
よかったら晩御飯食べていかない？」

「いえ。

ご迷惑おかけしましたし、悪いですよ」

「あら、そんなことないわよ。
ねぇ、龍ちゃん？
むしろ……よね？」

「か、母さん！
あ……えっと、よかったら食べていってください。
で、でも都合が悪かったら、無理にとは……」

別に都合は悪くないな。

まぁ気にかかることといえば、風呂掃除した後換気で開けてきた窓が閉められたかどうかとかそれくらいだ。

つっても、誰かが風呂沸かす時に閉めるだろう。

「じゃあ……ありがたくごちそうになります。
お世話になります」

せっかくだからいただこう。

「よかったわね、龍ちゃん」（小声）

「か、母さん……」

龍はお母さんに呼ばれて準備の手伝いをしにいった。
俺も手伝おうかと思ったけど、断られたから大人しく座っとく。

「お姉ちゃん、ご飯一緒だねー」

「うん、一緒だね」

訂正。
大人しく千華ちゃんの相手をしとく。

「今日は何して遊んだの？」

「今日はねー、みんなでパーティーの練習したの！」

誕生日パーティーか。

「そっか。
楽しかった？」

「うん！
お姉ちゃん、絶対来てね！
みずようびだからね」

「みずようび……あ、水曜日か。

うん、絶対行くよ」

つーか2日後だな、水曜日。

プレゼント何にしよう……。

龍と同じくらいの値段にしないとな。

「ご飯よー。

千華、佳亜お姉ちゃんと一緒に手を洗ってらっしゃい」

「はーい！」

キッチンから龍のお母さんの声が響く。

俺は千華ちゃんに連れられて手を洗いに行った。

パソコン

「へぇー、佳亜ちゃん頭いいのねぇ……」

「そんなことないですよ」

「龍ちゃん、勉強教えてもらったら？
こんなにいい先生が近くにいるじゃない」

今は晩飯を食べながら談笑中だ。

龍のお母さんが出してくれたのは和食を中心にした料理だった。

美味い。
めちゃ美味い。

「そうだ、佳亜ちゃん。
情報処理、だっけ？
それは出来る？」

「ああ、はい。
一応検定とってます」

情報処理っつーのは商業科目のうちの一つだ。

詳しく知りたい人は……ウィ○ペディアで調べてくれ。

（あーでも、検定とったとはいえ情報処理とかもう数ヵ月やってないな……）

ちゃんと覚えてるかな？

「龍ちゃん！
これはもう教えてもらうしかないわ！
情報処理、苦手なんでしょう？」

「え……うん、まぁ。
でも先輩には迷惑なんじゃ……」

「んなことないよ。
逆にさっき迷惑かけたし……」

正直、もう忘れたいけども。

「夏休み明けにテストあるんでしょ？
教えてもらいなさい、せっかくだから」

まぁそんなこんなで、龍の部屋で勉強を教えることになった。

「お、パソコンあんじゃん。
いいなぁ」

俺もパソコン欲しいなぁ……。

「えっ、先輩持ってないんですか!?」

「なにそれ嫌味？」

「違います！
だって、ワープロ検定も1級もってるんですよね？
家で練習とかしてるんだと思ってて……」

「まぁな。
それは学校で練習したから」

家で練習出来ないから授業は集中してたな……。

つっても慣れたら余裕出てきたけど。

「とにかく、情報処理やってみようか。
ちょうどパソコンもあるし」

とりあえず俺はパソコンの電源をいれて龍が問題を解くところを見とく。

「あの、ここってＳＵＭＩＦですか？」

「あー……どっちでも出来るけどＣＯＵＮＴＩＦのがやりやすいかな」

意外と覚えてるな。
よかった。

「先輩、なんかここエラーになるんですけど……」

「ＡＢＥＲＡＧＥの中にＲＡＮＫいれた？構成式あってる？」

「あ、構成式が……」

まぁ、なかなか勉強は進んだと思う。

気持ち的にはな。

ごゆっくり（前書き）

ここ数日、多忙なため更新時間が遅めです。
言い訳ですね……がんばります。

とりあえず時間が遅くなっても更新は毎日あります、とお伝えさせていただきたく。

私情ですみません。
ご了承くださいませ。

ごゆっくり

「お疲れ様ー。
楽しんでる？」

龍のお母さんがりんごを持って部屋に入って来た。

「あら、お遊びタイムなのね。
よかったらコレ食べてね」

「はい。
とりあえず勉強は終わったんで。
りんごありがとうございます」

今はせっかくだからって龍に勧められたパソコンでネットしてる。

「佳亜ちゃん、今日はもう泊まっていっちゃいなさいよ」

「へ？」

「……！？」

ベッドに寝転んで黙って見てた龍が飛び起きた。

「もうこんな時間よ？
着替えはウチのを使えばいいし、それに千華も喜ぶわ」

「んー……どうしよ？」

とりあえず龍に訊いてみる。

「えっ、あっ、……！」

「なにテンパってんだよ」

ホント表情ころころ変わる奴だな。

「え、と……先輩の都合が悪くなければ、泊まっていってください」

どうしようかな……。

まぁ、これといって用もないし家には連絡いれとけばいいだろう。

「お姉ちゃん、今日お泊まりー？」

「ん、じゃあ泊まっちゃおうかな」

「わーい！」

抱きついてきた千華ちゃんを受け止める。

「それじゃあ本格的にお世話になります」

「はい。
ごゆっくり」

それから後もしばらくは龍の部屋でのんびりしてた。

ついでに家に連絡もいれた

「佳亜ちゃーん、お風呂どうぞー」

「あ、はーい。
てか、龍は？
風呂入んないのか？」

「あ、僕はあとで入ります。
お先にどうぞ」

「そっか、悪いな。
じゃ、お言葉に甘えて」

（あ、服……）

どうしようかと思ったけど、龍のお母さんが用意してくれるらしいからお任せしよう。

ゲーム（前書き）

最近の悩み。

龍くん宅のお泊まり話が終わってすぐ妹ちゃんの誕生日話いれるか、お泊まり話が終わって軽く別の話を挟むか。

すぐ誕生日話いれると龍斗率（↑笑）高くなりそうだし、閑話いれてもなんか無駄な感じが拭えない……。

さて、どうしよう。

と、多忙さが和らぐ兆しが見えてきました。
おそらく明日からは朝に更新できるんじゃないかな、と思います。

とりあえずご報告を。
前書きで長々と失礼いたしました。

ゲーム

「上がったぜー」

風呂から出て龍を呼びに行く。

「あ、はーい……」

「なんだよ？」

顔をこっちの向けるなり固まりやがった。

なんなんだ。

「あ、あの……その服、どこで……？」

「え？

ああ、これか。

龍のお母さんが貸してくれたんだけど？」

「か、母さん……」

俺が着てるのは普通のＴシャツに普通の短パン。

ただＴシャツはサイズがデカイ。

「もしかしてこれ龍の？」

「……はい、僕のです」

「マジか」

どうりでサイズがデカイわけだ。

「悪い。
嫌だったら脱ぐよ」

「脱……！？
いやいやいいです！
嫌じゃないですから！」

「そうか？」

龍のお母さんの着替えでも借りようかと思ったけど、いいならいいや。

「……僕、頭冷やし……じゃなくて、風呂入ってきます」

「俺、この部屋にいていい？」

「はい、どうぞ。
よかったらゲームでもしててください」

「マジ？
いいの？」

こいつの部屋、面白そうなゲームめちゃくちゃあって見てたんだ。

「はい。
好きなようにくつろいでください」

「やった、ありがと」

ちょっとウキウキしつつゲームを弄る。

せっかくだからゲームしよう。
どれにしよっかな……。

クリアできないとは思いつつ、俺はＲＰＧのホラーを手に取った。

あれだ、あのゾンビの有名ゲームだ。

ケースから中身を取り出して本体にいれてコントローラーを準備した。

チュートリアルを見てゲームを始める。

チュートリアルとばす人もいるけど、俺はしっかり見る派なんだよ。

よし、それじゃあとりあえず軽く操作に慣れよう。

龍の苦悩（前書き）

後書きにおまけ投下です。
龍くんの苦悩があります。

龍の苦悩

まだゲーム中。

つーか、行き詰まった。

なにこれ、どうすればいいの。

アイテム見つかんないし、通路見つかんないし、ゾンビは出るのに銃弾少なすぎるし。

弾がもったいないからナイフとかで戦ってるけどドアップのゾンビ怖ぇ。

「上がりましたー。
あれ、先輩髪乾かしてないんですか？」

「龍、ナイス。
これやって」

部屋のドアが開いて、風呂から龍が戻ってきた。

ちょうどよかった。
ゲーム進めてもらお。

「ああ、これですか。
ここ、僕も最初は出来なかったんですよ」

「へぇ」

とかなんとか喋りつつ、ゲームを進めてくれた。

「おおー、こんなとこに通路が。
さすが慣れてるな」

「ここまででいいですか？」

「うん、サンキュ」

龍からコントローラーを受け取っる。

「先輩、髪乾かさないと風邪ひきますよ？
髪長いんですし……」

「えー、めんどくさい」

「ダメですよ。
ドライヤー準備しますよ？
やっぱり乾かさないと」

そう言ってドライヤーを準備された。
お前はお母さんか。

でもゲームしたいしな……。

「んー……龍、今ヒマ？」

「え？
まぁ、ヒマですけど……」

「やってくんない？」

「え？」

「髪。
やってくんない？」

「でも……あの……。
じょ、女性の髪触るのって、ちょっとダメじゃないですか？」

「え、なんで？」

「なんでって……」

なにがダメなんだろう。

他の人に乾かしてもらうのってダメなん？

「ねぇ、お願い。
やってくんない？」

「……わかりました。
やらせていただきます」

こいつ、お願いって言うと絶対断らないんだ。

これは昔からたまに使う手段だ。

たまに、だよ。
ホントにたまに。

ホントだってば。

龍の苦悩（後書き）

おまけ（龍斗ｓｉｄｅ、思考のみ）

――――

普通、男に髪触られるのって嫌がるものじゃないのかな……。

でも、それならそれで信頼されてるってことだし……喜ぶべき？

ハッ、でももし根本的に僕のこと男として見てないんだったら……。

いや、さすがの先輩でもそこまでは……ない、と、思いたい。

それにしても、乾かすだけとはいえ髪触るのって緊張する……。

……先輩、ホントにわかってますか？

僕だって男なんですよ！

……はぁ。

しっかり乾かしてあげて風邪ひかないようにさせなくちゃ。

――――

龍くんの苦悩（笑）

佳亜はそういうのに鈍そうだなぁ、逆に龍くんは敏感そうだなぁ、と思った結果出来上がりました。

佳亜って意外と甘え上手なのかもしれない、とも思った今回。

この2人、今後どうなるのか見ものですね。
ちなみに作者もまだ決めてません。

なるようになれ！

長々と失礼しました。
ここまで読んでくださってありがとうございます！

夏の夜長（前書き）

今回会話文のみです。

ちなみに龍くん、ゲームめちゃめちゃ上手いです。
数持ってるだけあってテクニックはんぱないですね。

夏の夜長

「うわー、強い。
こいつすげぇ」

「強いって……格闘ゲームじゃないですよ？
ていうかゾンビですし」

「あちち」

「あっ、すいません！」

「いいよいいよ」

「先輩、そこの窓から出るとゾンビだらけです。
遠回りしたほうがいいですよ」

「マジか。
遠回りー……って、遠回りしてもいるなゾンビ。
多くはないけど」

「先輩って普段なにしてるんですか？」

「普段？
普段って……家で？」

「はい。
なんかずっとコーラ飲んでるイメージがあります」

「よくわかってるな」

「当たってるんですか……。
先輩、お酒強そうですね」

「ああ、それよく言われる。
なんでだろ？
炭酸＝酒のイメージがあるんかな」

「飲んだことないからそんなイメージになるんでしょうね。
あとアルコールとコーラで割る酒ありますし」

「ふーん。
で、そういうお前はなにしてんの？」

「そうですね……休みの日も部活とかありますし……部活なかったらゲームとかですね」
「お前部活してんの？
何部？」

「してますよ。
柔道部です」

「マジで？
なんか意外だな。
部活やってもサッカーとかやりそうなイメージなのに」

「よく言われます。
でも強くなりたいなぁと思ったんで」

「へぇ、すげぇな。
かっこいいじゃん柔道」

「そ、そうですか？
ありがとうございます」

「試合とか出んの？」

「はい。
大会があったり親善試合があったりしますから」

「どう？
勝ったりする？」

「まぁ、一応は……。
これでも副部長ですし」

「マジか、知らなかった！
お前すげぇな！」

「が、頑張りましたから……」

「いいな、柔道。
今度試合あったら呼んで？」

「は、はい！
ぜひ！」

「先輩、髪乾きましたよ」

「ん、ありがと。
……って、ちょっ、ムリムリ。
ゾンビ多っ。
龍やって」

「いいですよ」

「……おおー」

「は、拍手されるほどのことじゃないですよ……」

「いや、あまりにも手際よくて。
なぁ、ベッドに寄り掛かっていい？」

「はい、どうぞ」

「……」

「先輩？
もしかして眠いんですか？」

「ううん、別に」

「……先輩」

「……なに？」

「覚えてますか？
中学の時……」

「……」

「……先輩？」

「……スー、……スー、」

「寝ちゃいましたか……」

（ちょっと、アタックしてみようと思ったのに……失敗。
次っ！
次こそはきっと！！）

思い出　－ｓｉｄｅ龍斗－（前書き）

後書きにちょっとした挨拶的なものを投下しました。
そして一瞬龍くん登場。

読んでくださると嬉しいです。

思い出　－ｓｉｄｅ龍斗－

（どうしよう……このままじゃ身体痛くなっちゃうし……。
先輩、すいません。
ちょっと失礼します）

ベッドに寄り掛かって寝てる先輩。
せめてベッドで寝てもらわなきゃ……。

……僕のベッドだけど、大丈夫だよね。

先輩を起こさないようにゆっくりベッドに寝かせる。

……寝かせるため！
寝かせるためだけど……密着！

頑張れ僕の心臓！

てゆーか静かにして！
心臓の音で先輩が起きたら僕もう泣きたくなるから！！

どうにかこうにか先輩を起こさずに寝かせられた。

タオルケットを掛けて、完了。

つ、疲れた……。

……先輩、覚えてないのかな……？
中学の時のこと……。

『大丈夫か？』

『はい……』

この頃の僕はよく絡まれた。

先輩の近くにいるし、当然だとは思ったけど……そもそも見た目が弱そうだったし。

それでもイジメをされなかったのは、それもやっぱり先輩の近くにいたからだと思う。

先輩がよく助けてくれたし……。

『ところで、なんで絡まれてたんだよ？』

『え？
えっと、ですね……』

先輩のそばにいるから絡まれます、なんて言えるはずもなく。
しかも言ったら先輩のほうから避ける可能性が高いから言いたくない。

『まぁ、いろいろ、です』

『好きなタイプ、ねぇ……？』

『……！！？』

その日の帰り道、メールを受信して携帯を開いた先輩の呟き。

『好きなタイプ、って……ど、どうしたんですか？』

『ん、なんかメールで。
好きなタイプあんの？、ってさ』

『はぁ、なるほど……』

つまり男からのメールですね……。
いつのまにアドレスを……。

『あんの？、って失礼だな。

タイプくらいあるに決まってるだろ』

『あるんですか！！』

この時の驚きは今でも忘れない。

『いやだから当たり前だろ？
失礼な』

『す、すいません。
なんか意外で……。
好きになった人がタイプ、とかよくあるじゃないですか』

『あー、ああいうのは嘘だな。
結局は自分の好みに合った人を好きになるんだよ。
好きになった人がタイプなんて当たり前』

『な、なるほど……』

わかる気がする。

『……じゃあ、先輩のタイプってどんな人ですか？』

この時の僕はすごく勇気を振り絞った。

今思い出しても、５年分の勇気を全部注ぎ込んだくらいに感じる。

『タイプか……一言では表しにくいけど、強い男がいいかな。

いざって時に頼りになる人がいい』

『強い、って……内面ですか？』

『うーん……内面もそうだけど、力が強いのもいいな。俺が出来ない事とかいろいろ頼めるじゃん？』

『……』

……先輩、覚えてるのかな？

忘れてはないと思うけど……微妙。

（……柔道も副部長も、先輩のためにやってるんですよ。強い男になろうと頑張ってるんです。今は知らないでしょうけど、いつか必ず知ってもらいますからね）

……とはいっても、内面はまだ全然強くない僕には先輩と同じ部屋で寝る勇気なんてなくて。

先輩にタオルケットを掛け直して、部屋の電気を消してから静かに部屋を出た。

思い出　－ｓｉｄｅ龍斗－（後書き）

ある意味龍くんの苦悩（笑）
あらためて思いますがヘタレですね、龍くん。

リアル友人に聞かれましたが、佳亜と龍くんはどうなるか作者にもわかんないんですね。

龍くんへの応援メッセージ募集（笑）します。

龍「笑わないでください！
必死なんですよ僕は！」

はいはい、頑張ってくれよヘタレ王。

と、いつのまにやら今話で６０話目になったようです。

ちょうどいい節目の５０話目は気付かずスルーしちゃったので……。

いつもこんな駄文を読んでくださってありがとうございます。

連載開始から今まで毎日更新を続けてこれたのは今これを見ているあなたのおかげです。

作者共々、これからも『俺の日常はこんな感じ。』をよろしくお願いします。

「よろしくお願いします！
僕の応援も、お願いします！！」

長々と失礼いたしました。
ここまで読んでくださってありがとうございました！

ハプニング

……目が覚めた。

ここ、龍の部屋か……。

そういえばなんか話してるうちに寝ちゃったな。

つーか、寝返りのせいでTシャツから肩やら腹やらが出てる。

まぁ、もともとでかいTシャツだからしょうがねぇ。

誰にも見られてないことを祈ろう。

自分の家ならこのまま二度寝してもいいだろうけど、人の家じゃそうはいかない。

ってことで、さぁTシャツを直すぜ。

というとこで部屋のドアがガチャッと開いた。

「先輩、起きてま……」

「……わーお」

「……すっ、……すみませんっ！！」

龍は赤い顔を両手で隠しながら走り去っていった。

悲鳴でもあげそうな勢いだ。

俺、１人ぽかん。

……あれ、普通逆じゃね？

「悪いな、見苦しいもの見せて」

「いえ、そんなことは……」

「あとベッド。

使っちゃってごめん、ありがと」

「いえ、それは全然いいですよ」

朝飯をいただいて、皿の片付けを手伝ってる最中に謝っておいた。

「……その、先輩は大丈夫なんですか？

見られても……」

「まぁ別に。
大事なとこ隠れてりゃいいんだよ。
水着がいい例だな」

「……」

……こいつはいちいち顔赤くするよな。
実は意外と純情なのかもしれない。

「お前、彼女いたことないの？」

「……ないですよ」

「一度も？」

「……ないです」

「マジか。
ああ、そりゃ純情になるわ」

「すいません、聞き取れませんでした。
なにか言いました？」

「いや、こっちの話で」

女と違って男は女性と一度付き合ってみるべきだと思うんだよね。

世間一般的に難しいと言われる女性の扱いは経験してたほうがいい。

まぁ、んなことは今はどうでもいい話だけど。

「お世話になりました」

「はい。
また来てね」

「ばいばい、お姉ちゃん。
お誕生日パーティー絶対来てね！」

「ありがとうございました。
またね、千華ちゃん」

その誕生日パーティーのプレゼントを買いに行くために、少し早めに龍の家を出ることにした。

「近くまで送りましょうか？」

「いや、いいよ。
寄るとこあるから」

「そうですか……」

「あ、うん、また今度お願いするから。
その時はよろしく」

「はい！」

やめてくれ。
そうあからさまにシュンとされると悪いことしてる気分になる。

「楽しかったよ。
また来ていい？」

「はい、是非！」

「サンキュ。
それじゃ」

さて、千華ちゃんのプレゼント……なににしようかな。

性格　－ｓｉｄｅ香－

ふと思ったこと。

私ってどんな性格だろう？

嫉妬深いかな？
わがままかな？
めんどくさいかな？

（私は……どんな性格なんだろう？）

学校に来た。

いつも一緒の私達４人。

いつもの変わらない風景。

でも今日はいつもと違った。

学校には私達以外誰もいなかった。

私達は不安で胸がざわついた。

でも、ただ1人。

みっきーだけは、こんなときでもいつもと同じように冷静で。

だから私達はみっきーにどうしたらいいか訊いた。

みっきーはいつもより低い声で静かに言った。

「……逃げるぞ」

私達は走ってた。

私は走ってる感覚も忘れるくらい必死で走ってた。

私達の後ろからは、さらに人が走ってきてた。

それが誰かなんてわからなかったけど、いくつかわかることがあった。

その人は私達を追いかけてきてること。
その人に追い付かれるとヤバいこと。
その人の右手が血だらけなこと。
その人の手にはナイフの刃の部分が握られてたこと。
追い付かれたらどうなるか……そんなことはすぐにわかった。
だから必死で逃げた。

校内を、最初は4人で一緒に逃げてた。

でも別れ道に差し掛かって……。
私とみっきー、さっちゃんと心、2人ずつに別れた。

みっきーと一緒だったのに安心したのもつかの間、〝その人〟は私達のほうを追いかけてきた。

もう泣きたくなって立ち止まりそうになる私を、みっきーは走りながら私の手首を掴んで黙って引っ張った。

そのまま走って、何度か振りほどこうとしてもみっきーは私の手首をしっかり掴んで引っ張りながら走ってた。

そうこうしてるうちに、校舎の行き止まりが見えてきた。

すぐ横のガラス張りの扉を開けないと逃げられない。

みっきーが鍵を開けて扉に手をかけたところで、”その人”はすぐ近くまできてた。

「……先に逃げろ」

みっきーは扉を少し開けると、その隙間から私を押し出した。

それより少し前に、みっきーは”その人”に肩を掴まれていて。

ガラス越しに”その人”がみっきーにナイフを振り上げてるところが見えた。

ナイフを突き刺そうとする様子、みっきーを掴んでる手。

いろんなものが一気に見えて、”その人”に対して今まで生きてきた中で一番ってくらいの怒りが湧いてきた。

刺そうとするのもヤバいけど、何よりみっきーを掴んでる手をどうにか引き剥がしたくなった。

「……っ、さわるなっ！！！！」

私は思いっきり叫んで、すぐそばにあった竹箒で”その人”を力一杯殴った。

「……っていう夢をみたの」

『はぁ、そう……。
それでこんな深夜に電話してきたわけか』

「うん、ごめん。
なんか気になっちゃって」

夢の中で”その人”を力一杯殴ったあと、私はすぐに飛び起きた。

心臓がドクドク音を立ててうるさくて、息があがってて。

そのまますぐにみっきーに電話してしまった。

『午前4時って……なんて中途半端な』

「ごめんね」

『まぁいいけど』

みっきーがあくびする音が聞こえてくる。

「みっきー、私のこと見捨てないで引っ張ってくれてありがとう。先に逃がそうとしてくれてありがとう」

『いやそれお前の夢の中の話だろ』

そうなんだけど……でもみっきーって、本当にこんなことが起こったら夢の中と同じようにすると思うんだよね。

『つーか、お前こそ。俺のこと助けてくれてありがと』

「……えへへ」

なんであんな夢みたんだろ?

そういえば寝る前に自分の性格について考えたっけ……。
そのせい？

結局、自分の性格はわからないまま。

でも……いい気分で眠れそう。
おやすみなさい。

誕生日パーティー

「いらっしゃーい！」

「お邪魔します」

出迎えにきてくれた千華ちゃんに手を引かれて居間に入った。

「「こんにちはー」」

「こんにちは」

今日は千華ちゃんに誘われた誕生日パーティーに来た。

居間には千華ちゃんの友達らしい2人と龍がいた。

「よ。

この間はありがと」

「いえいえ。

あ、先輩ここに座ってください」

龍に勧められた椅子に座る。

「いらっしゃい、佳亜ちゃん。

来てくれてありがとう」

「いいえ、ちょうど暇でしたから。
千華ちゃんから誘ってもらえてよかったです」

龍のお母さんはテキパキと料理を並べていく。

「あ、食器並べときますよ」

「あらそう？
じゃあお願いするわ」

龍のお母さんから食器を受け取った。

「はい」

隣にいる龍には直渡し。

千華ちゃん達の分はテーブルに。

「お姉ちゃん！
あのね、千華のお友達の美嘉ちゃんと美奈ちゃん！
２人はね、双子なの」

たしかによく似てる。

「そっか。
仲良しでいいね」

「うん！」

「はーい、ケーキよ」

「わぁ！」

人数が人数だからか、結構でかいホールケーキが運ばれてきた。

ケーキには火がつけられたろうそくが飾ってある。

「「ハッピバースデートゥーユー♪
ハッピバースデートゥーユー♪
ハッピーバースデーディア千華ちゃーん♪
ハッピバースデートゥーユー♪」」

「すぅ……ふぅー！」

『おめでとうー！』

双子ちゃん達が歌を歌って千華ちゃんがろうそくを消したところでみんな拍手した。

「さーて、こんなに大きなケーキ……どう切りましょう？」

「全部同じくらいの量で切るの？」

「そうね。
大きいから1人あたりの量は少し多めかしら」

龍のお母さんはどう包丁をいれるべきか悩んでる。

「あ、よかったら任せてください」

「佳亜ちゃんが切ってくれるの？」

「はい。
目分量ですけど」

渡された包丁を受け取ってケーキを切り分けていく。

「あらぁ、どれもピッタリ同じ！」

「目分量ですから完全にピッタリではないですけど、そんなに差はないと思います」

俺、目分量なら多分誰よりも正確に近付けると思う。

こういうケーキとかなら、なんとなく切るべき線が見えるんだ。
目分量が得意な人なら理解できるかもしれない。

「チョコのプレートは千華ちゃんに、と……ここでいいかな？」
ケーキに立て掛けるようにして皿の端に置いた。

「うん、お姉ちゃんありがとう！」

「どういたしまして」

龍のお母さんが配ったクラッカーを全員が持つ
クラッカーの音と共に、誕生日パーティーが始まった。

誕生日パーティー　2（前書き）

今回で夏休み話は終了かな、と思ってます。

おそらく、次回からは2学期に入りますので。

よろしくお願いします！

誕生日パーティー　2

「はい、千華ちゃん！」
「プレゼント！」

クラッカーを片付けるとすぐ双子ちゃんがラッピングされた包みを出した。

「わぁ！
ありがとう！！」

千華ちゃんは嬉しそうに受け取る。

「これは兄ちゃんから」

「お母さんからもプレゼントよ」

「おめでとう千華ちゃん」

それぞれがプレゼントを渡した。

「わぁ……こんなにたくさん！」

たくさんのプレゼントに囲まれる。

幼い子にとってこれほど嬉しいもんはないだろう。

楽しそうに笑う千華ちゃんを眺めてると龍が小声で話し掛けてきた。

「先輩。
僕が渡すプレゼント選んでもらっちゃいましたけど……大丈夫でした？」

「何が？」

「先輩が渡す分のプレゼントですよ。
選ぶの大変だったんじゃないですか？」

「いや別に。
コップにしたよ」

「どうしてコップに？」

「もともとコップかお前がプレゼントしたハンカチか、どっちかが無難かなぁと思ってたからな。
コップもハンカチも柄の選択ミスさえしなければ毎日使ってくれるだろうし」

「なるほど……」

「ほら龍、頑張れ！」

「お兄ちゃんファイト！」

「わかってますよー！！」

特別やることもないから、みんなでゲームを始めた。

ピンチになったら龍にパス。

「先輩、ちょっと回数多くないですか！？」

「気のせい気のせい」

まぁ、それから後もなんやかんやしてたらすぐに時間は過ぎた。

「あら、もう5時だわ。

美奈ちゃん達、そろそろ帰らないとお家の人が心配するわね」

「えー！？

もっと遊びたい……」

「千華、また今度にしましょう？

お兄ちゃんと一緒に美奈ちゃん達を送っていってらっしゃい」

「はーい」

俺もそろそろ帰ろう。

部屋を軽く片付ける。
食器をテーブルの端に寄せて、ゲーム機はコードを束ねて置いとく。

「あらあら、いいのよ佳亜ちゃん」

「いえ、ほんの少しですから。
そろそろ帰ります。
ありがとうございました」

「こちらこそ。
来てくれてありがとう」

お互いにちょっとだけ頭を下げた。

「先輩、送りますよ。
2人を送ったあとでもいいですか?」

「うん、ありがと」

本当なら途中までで いい、と言うべきとこだがあえて言わない。

こいつ、へこみそうだし。

素直に送ってもらおう。

「お姉ちゃん、来てくれてありがとう！
また来てね！」

「ん、また来るからお出迎えよろしくね」

「うん！」

ちょっと早めに挨拶を済ませておく。

全員が帰る準備を終えて外に出た。

さすが夏。

まだ外はだいぶ明るい。

俺達はそれぞれ話しながら帰路についた。

2学期（前書き）

夏休みの課題……佳亜は多分残り2日くらいで一気に終わらせちゃうんだろうなぁ、と思いました。

2学期

「おはよ」

「みっきー！
久しぶりー！」

「ん、久しぶり」

今日から2学期だ。
夏休みが終わってもまだまだ暑い。

「みっきー、宿題やった？」

「まぁ。
解答あったし」

「解答丸写しか！」

「おいおい、なめてもらっちゃ困るぜ香さん。
丸写しなんてのはバカのやることだ」

「なんだ、そうだよね。
みっきーならちゃんと自力で」

「ああ。
自力でちょこちょこ解答方法変えて写したぜ」

「をい！」

丸写しなんて『解答見てやりました』って言ってるようなもんだ。
ちゃんと頭使わなきゃな。

「みっきー、頭の使い方間違ってると思う……」

「お前ちゃんと自力でやったんだ？
うわ、真面目ー。
えらいな」

「そりゃ、夏休みだし……」

「解答なんてのはな、写すためにあるんだよ。
どうせ夏休みに勉強してもテストまでに忘れるんだし」

そう、どうせ忘れるんだ。

そもそも俺みたいな短期集中型に長い日数での勉強は向かない。

「ほら、あれ見ろ」

「あれ？」

俺が指差したのは男子生徒。

今まさに宿題を提出しようとしてる。

「表情から察するに、あいつも解答写した雰囲気だ。
でも多分丸写しじゃないはず。
で、それを踏まえたうえで見てろよ？」

「うん……」

俺達は男子生徒と先生の会話も含めて観察する。

「先生、提出します」

「ああ。
……」

先生は中身を確認中だ。

「……お前、写したなぁ！？」

「えええ！？」

「中身が出来すぎなんだよ！」

なぜ先生にバレたのか。

答えは簡単。

「たとえ丸写しじゃなくても個人の能力に見合っただけの中身じゃないとダメだ。
正解が多すぎたりとかな。
その辺の調整が上手くなきゃ、ああなる」

「なるほど……」

「香ちゃん、そこ感心するとこじゃないと思うな……」

時間に余裕があるなら自力でやるほうがいいに決まってる。

でも夏休み終了5日前とかになっても『ズルはダメ』なんて言ってる良い子ちゃんはバカだ。

良い子でいたいならコツコツやりゃいいだけの話。

解答は写すためにあるんだよ。

もう一度。
解答は、写すために、あるんだよ。
大事なことだから二回言いました。

みんなも宿題は上手に写そう。

打ち合わせ（前書き）

今日は投稿する時間がなさそう……。

ということで、今のうちに今日の分の投稿しときます。

打ち合わせ

どうもこんにちは。

始業式終わりーの、テスト終わりーの。

２学期が始まって１週間が経ちました。

まぁ、こんな前フリはどうでもいい。

忘れられてるかもしれないけど、２学期が始まって少しすると体育祭がある。

さらに忘れられてると思うから改めて説明しよう。

うちの体育祭は球技大会混じり。

学年ごとの組分けで３年は赤組だ。

１学期の時点で俺と香はバスケ、瀬田は８００メートル走、隊長はバレーを選択してあった。

まぁ、出場種目はそれだけじゃないんだけど。

今はバスケ出場メンバーで集まって打ち合わせ中だ。

「おい、女子組のリーダーは三木に任せるぞ」

「いや、なんでやねん」

頭の中で説明してるうちになんか決まってた。

声を掛けてきたのは男子バスケ部部長だ。

「お前頭いいじゃん」

「それ成績での話だろ。
つーか、だからなんだ。
バスケと関係ないじゃん」

「策士みたいな？
バスケ部いるし、好きに動かして」

普通バスケ部がリーダーだろ……。

「まぁいいや。
リーダーとエースは別物だし。

エースよろしく」

「はーい」

バスケ部の女子（バスケメンバーの中のバスケ部では1番上手いと噂）にエースを任せる。

リーダーなんて名前だけだ。

ただなんとなーく問題らしいことが起こった時だけ指示だせばいい。

気楽にやろう。

「みっきー、頑張ってね！」

「ああ。
気楽に頑張るよ
」

そうそう。

俺達の出場種目、今のうちに言っておこうかな。

とりあえず全員参加の１００メートル走。

あと、隊長が応援団だ。

それだけ。

体育祭はなかなかにめんどくさい。

適度に参加して適度にサボるのが一番だ。

合同

「あー、疲れた」

もう体育祭まで1週間もない。

整列とかの練習も切り詰められる。

「みっきー、飲み物少しちょうだい？」

「いいよ」

「ありがとー」

俺達は休憩時間を木陰で過ごす。

「ふぅ、涼しい……ん？」

「……あ」

風に吹かれてると誰かと目が合った。

あれは……龍じゃん。

「よ。
どした？
こっちくれば？」

「あ、えっと……」

龍は少しこっちに近づく。

「みっきー、誰？」

「中学同じだった後輩。
ここの2年生だよ」

「へぇー。
初めて知った」

「あいつがここの生徒だってこと、俺もつい最近まで知らなかったんだ」

香達に紹介するか。

「龍、軽ーく自己紹介」

「あ、はい。
えっと、神谷　龍斗です」

「ん。

で、こっちは俺の友達」

それぞれ自己紹介を終える。

「で、なにか用だった？」

「はい、ちょっと。

あの……もし、よかったら、……2・3年生の合同種目に……一緒に出てもらえませんか？」

「合同種目？」

そういやそんなのあったな。

親交を深めるために、とかで。

「内容は当日発表だっけ？」

「はい。

……あ、あの、忙しかったら……」

「いいぜ、出るよ」

「え……」

「可愛い後輩の頼みだ。

出てやんよ」

「こ、後輩……」

「でも俺運動神経よくないから。そこんとこよろしく」

「は、はい！」

とりあえず。

俺の出場種目が増えました。

応援

「隊長、お疲れ」

「あ、みんな」

今は昼休み。

中庭で応援団の練習をする隊長を応援にきた。

「どう？
もう完成した？」

「うん、ほとんどね。
太鼓と合わせての振り付けだからタイミングが大変だけど」

もともと隊長は応援団をやりたいわけじゃなかった。

ウチのクラスから選出する応援団員が足りなかったから、単純にじゃんけんで決めたら隊長が負けたんだ。

「衣装とかあんの？」

「うん。

当日に着るんだけど、柄入りの袴みたいなハッピみたいな感じのでね。
ちょっとかっこいい衣装だよ」

「へぇ。
楽しみにしてるよ」

高校って結構行事も自由だ。

体育祭でも文化祭でも化粧してる人いるし、服もコスプレしてる人がいたりする。

ウチの学校は被り物でリレーに出場する人が多い。

馬の頭部だけの被り物に体操服とか、ガチャ〇ンの顔に上半身裸とか、リレーで見かけると不気味だ。

面白いけど。

「みっきー、バスケのリーダーでしょ？
頑張ってね」

「ああ。
必ず1勝はする」

「1勝？」

「みっきーがね、先生と約束したの。『必ず1勝するからそのときはジュース奢って』って」

「なるほど……」

俺の代わりに香が説明する。

「まぁそういうこと。隊長の分も奢ってって頼んだから必ず1勝はするよ。2勝目は保証しないけど」

「みっきーらしいね……」

神に誓って約束しよう。

必ず1勝する。

そのあとは知らん。

設営

「そっち、テント組み立ててー！」

「あっ、そこダメ！
飲み物販売用に場所あけてて！」

いよいよ明日は体育祭。

だから掃除したり設営したりやってるわけだが、どこかみんな楽しそうだ。

まぁ、俺達はというと……

「ポンポン作り、座っててていいし簡単だし意外とラクだね。
みっきー、いい仕事見つけたね」

「だろ」

仕事しながらサボってるわけだ。

「あ、ねぇ、みんなは明日親来る？」

香が訊いてきた。

「ウチは来るよ」

「私のウチも」

「アタシんちは来ないかな」

「俺のとこも来ない」

隊長と香のとこは来るのか。

マメだな。

「親は来るけど、ご飯はみんなで食べたいなーと思うんだけど……どうかな？」

「そりゃ俺と瀬田はいいけど……大丈夫なのかそれ？」

せっかく親来てんのに。

「いいのいいの」

「ウチも大丈夫だよ」

「そっか。

じゃ、そんな感じで」

まぁ大丈夫ならいいか。

「さて、充分サボったし設営手伝うか」

「真面目なのか不真面目なのかわかんない発言だ……」

「なに言ってんだ香さん？
俺が不真面目だったことなんて今まであるかい？」

「ついさっきまで堂々とサボってたじゃないすか」

「わかってるよ。
冗談だ」

そんな冗談はさておき、さっさと手伝って帰ろう。

早く帰ってゆっくりしたい。

どうせ明日は疲れるんだから。

あー、暑い。

シャワー浴びたい。

体育祭（前書き）

いよいよ体育祭話に入りますね。
なんか結構長くなる予感……。

読んでくださってありがとうございます！

体育祭

待ちに待った体育祭。

正直、そんなに待ってないけども。

見事に快晴で体育祭日和ってとこか。

あー、くそ暑いぜ。

めんどくさい開会式は右から左へぬけていった。

「いきなり１００メートル走だね。
うへぇ、やだなぁ」

香が日焼け止めを塗りながら言う。

「嫌なもんはさっさと終わったほうがいいだろ」

「そうだけどさ……はぁ」

「さて、あれ選ぶか」

「みっきー、またやるんだね……」

「もちろん」

あれとは何か。

ウチの学校の体育祭の名物だ。

「被り物使う人ー」

「はーい」

あれとはこれだ。

俺は毎回これつけて走るんだよ。

「うわー、なんかシュール……」

「そうか」

今年俺が選んだ被り物はゴジラの頭部だ。

別に深い意味はない。

ただ被ってみたくなっただけだ。

ちなみに首から下は普通に体操服。
そりゃ周りから見たらシュールだろうよ。

「ねぇ、それちゃんと見えてるの？」

「そこそこ」

そこそこ見えてりゃ普通に走れる。
多分大丈夫だ。

「女子ー！
整列しろー！」

『はーい』

指定された場所にぞろぞろ人が集まり始める。

「さ、行こうか」

「うん。
でもなんかさも普通みたいに言われると……」

「目標は『子供が怖がらないゴジラ』だ」

「それ難しいよ！」

「……よし、どお？
ちょっと楽しそうにしてみたんだけど」

「わからない！
顔が見えないから全然わからないよ！
むしろなんか念じてるみたいで逆に怖いよ！」

「……まぁ、なるようになるさ」

今年はゴジラでいく。

これはもう決めたし、すでに被ってるし。

しかしこのゴジラ、頭がやたらと重い。

１００メートル走

「位置について！
よーい……」

パンッとスターターピストルが鳴る。

第１走者が走り始めた。

「うわ、ヤバい。
緊張してきた……」

香が呟く。

「香、俺の顔を見ろ」

「え？
……」

俺は香にピースを送る。

もちろん顔はゴジラだ。

「……ありがとう、ちょっとだけ緊張ほぐれた」

「そうか。

よかったな」

被り物もなかなかバカに出来ないぜ。

「っと、俺の列の番じゃん。
お先」

「うん。
頑張ってね！」

「ああ」

とは言ったものの、こういうのは足に自信がある人以外が本気になっちゃいけない。

普通ぐらいの奴は頑張っても普通なんだ。

1列あたり6人走者。

無難に3位か4位くらいでゴールするのがちょうどいい。

俺は無難に走って、無難に4位でゴールした。

まぁ顔がゴジラだからそこは無難にとはいかないけど。

ゴジラで体育座りしてると、周りから見ればさぞかしシュールだろう。

だからあえて体育座りするわけだ。

（お、香が走る番だな。
頑張れ）

心の中で応援しつつ、眺めていよう。

1位と2位がトップ争いしてる。

あ、こけた。

香は3位になったな。

おー、いいぞいいぞ。

そのまま逃げきれば3位でゴール出来る。

……よっしゃ、ゴール。
3位だ。

ゴールから3位の列に並ぶ香にピースを送ってやる。

香も気付いて息を切らしながらピースを返した。

うん、いいドヤ顔だな。

ちなみに１００メートル走はＡとＢで2回に分けてある。

人数多いからな。

俺と香がＡ、瀬田と隊長がＢ。

瀬田は長距離のほうが得意らしい。

逆に隊長は長距離は全然ダメでも、短距離は得意らしい。

距離によって分野が違うのがよくわかる。

とりあえず、２人とも頑張れ。

バスケ

どうやら今回のタイトルはバスケらしい。
が、別に俺達は運動神経がいいわけでもない。

だからバスケの描写っていらないと思うんだよね。

結論から言うと、1勝はしました。
しかし2勝はしませんでした。

以上。

1回戦目は普通に勝てたよ。

ちょっと積極的にシュートとか決めてみちゃったりして。

んで、2回戦。
あれは反則だと思うんだ。

なんたってメンバー全員がバスケ部なんだもの。

ああ、こりゃガチだな……みたいな。

だからウチのメンバーのバスケ部に任せて、あとは端っこに突っ立ってました、まる。

まぁ約束通り1勝したからジュース奢ってもらお。

そうそう、隊長と瀬田の１００メートル走だけどな。

瀬田は４位。

隊長1位だったよ。
すげぇな隊長。

隊長がゴールテープ切った時はちょっと感動した。

「ん？
あれは……」

柳田さんじゃん。

これから８００メートル走か。
頑張れ。

（柳田さん速いなぁ……）

俺は柳田さんが走る姿をぼんやりと眺めてた。

香と隊長はトイレに行ってて、瀬田は柳田さんと同じく８００メートル走に出るからいない。

「あっ……」

俺はうっかり声を漏らす。

柳田さん、こけた……。

大丈夫かな……。

飲み物

「柳田さん」

８００メートル走を終えて生徒用のテントに戻ってきた柳田さんに声を掛ける。

「あっ、先輩……あはは、見られちゃいましたよね……」

「ああ、見てたよ。
頑張ったな、お疲れ」

「……えへへ。
ありがとうございます」

柳田さんは一瞬だけ真顔になった後、照れるように笑った。

「足、見せて」

「え……でも……」

「救急箱借りてきたから」

どれどれ、足の具合は……と。

出血は少ないけど擦りきれてるな。

しっかり消毒して薬塗ってガーゼ当てればとりあえず大丈夫かな。

「……ん、こんなもんかな。
不恰好でごめんね」

「そんなことないです！
ありがとうございます！！」

「どういたしまして。
ありがとうついでにこれあげるよ」

「え？」

スポーツドリンクの入ったペットボトルを柳田さんに渡した。

まだ未開封。

当然だ。

さっき救急箱借りに行った時に先生見つけて、約束通り飲み物奢ってもらったからな。

「でも、これ先輩のなんじゃ……？」

「いいのいいの。
それタダでもらったやつだから。
遠慮しないで飲んじゃって」

俺は気の利いた労いの言葉を掛けられるほどボキャブラリーは豊富じゃない。

だからスポーツドリンクよ、労い代わりに柳田さんの水分になってくれ。

「ただいま、みっきー」

「ああ、おかえり」

「さっきね、先生にジュース奢ってもらったよ。
みっきー、もう奢ってもらったってね。
何の飲み物にしたの？」

「んー、お茶。
もう水筒に入れちゃった」

「……えへへ」

柳田さんはスポーツドリンクをしっかり抱えて笑ってたらしい。

それを、香達と話してる俺が知るはずはない。

午後

『これから昼食時間に入ります。
生徒の皆さんは1時間後には戻ってくるように。
それでは解散』

アナウンスが流れる。
やっと午後になったか。

あー、疲れた疲れた。
たいして競技出てないけど。

「みっきー、お昼どこで食べる？
体育館も中庭も結構混んでるよ？」

「大丈夫だ。
穴場がある」

「おぉー」

「なかなか悪くないだろ」

俺達が来たのは体育館と校舎の間。

普段は移動教室の通路として使う生徒もいるし、おそらく置き忘れだと思わるけどベンチがある。

さらに、日陰で風通しが最高。

夏にはもってこいの場所だ。

「ここ、いいね！

誰もいないし」

「前から目をつけてたんだ。

一般客にはわかんない場所だしな」

「だね！

お弁当食べよー」

ベンチに座ってそれぞれ弁当を広げる。

ちなみに俺はパンだ。

「そういえばみっきー、合同種目って何時？」

「あー、何時だったかな……。

結構終わりの方だったと思うけど」

つーかもしガチなリレーみたいなのがあったらヤバいな。

まぁせっかくの2・3年生合同種目だ。

そんなつまんないマネはしないだろう。

いざというときは龍がいるし大丈夫か。

そう結論付けて、俺はさっさとパンを食った。

誤算

「みっきー！！
これみて！」

「ん？
……」

これは……。

「ヤバい。
俺行ってくる」

「いってらっしゃい！
頑張ってね！！」

俺は走ってグラウンドに向かった。

終わりのほうだと思ってた合同種目。

香が見つけた、たまたま落ちてたプログラムを見るとそれは昼食時間の2種目後にあった。

「……っ、龍！」

「せ、先輩……」

ちょうど合同種目の整列が始まったとこだった。

「はぁ、ギリギリセーフか……遅くなってごめん」

「いえ……来てくないかと思いました。
ありがとうございます！」

「いやいや約束しといてドタキャンはないだろ」

さすがにそんな酷いことはしない。

遅刻はしちゃうけども。

「競技内容の発表は？」

「まだです。
本当に直前で発表するみたいですね」

「足ひっぱったらごめん」

「ぼ、僕がフォローしますから！
安心してください！」

「ああ、任せる。
頼りにしてるぜ」

頑張ってくれ。

『選手、入場』

アナウンスが流れる。

「よし、行くか」

「はい！」

説明

『まずは、ペアでバラバラになってください。
体力に自信がある人は赤の旗に集まったほうが有利ですよ』

アナウンスを聞きつつ周りを見る。

グラウンドのスタート地点は2つ。

ちょうど半周になるその場所にそれぞれ赤い旗と青い旗を持った人がいる。

「じゃあ俺、体力に自信ないから青い旗のほう行くわ」

「はい。
頑張りましょうね！」

「ああ」

体力がある奴が有利……ねぇ？

つまりもう片方は体力以外に自信があったら有利ってことか。

（体力以外っつったら頭だよな……。

うへぇ、勉強関連の問題みたいの出されたらアウトだ）

俺の勉強時間は短期集中型。
言ってしまえば一夜漬けだ。

そんなんで勉強内容が長期間頭に残ってるはずもなく。

ホント、入試には使えねぇな俺。

はぁ……。

とりあえず並ぼう。

……最悪。

青い旗のほうの内容説明を受けた。

予想通り、こっちは頭脳系らしい。

脳トレ系からクイズ系、勉強系までである問題。

それを２００メートルの間で分けて設置されてるくじ引きの箱から

選んで解いていくらしい。

全部で６問。

……ヤバい。

脳トレやクイズならまだしも、勉強の問題はちょっと……。

まぁ解けない人のためになにかしらの措置はあるだろうし、なんとかなるか。

あとは龍に頑張ってもらおう。

『それぞれ、競技内容の説明は受けましたね。
それではペアの人と最後の相談をどうぞ。
自分が得意な競技を選んで充分に能力を発揮してくださいね』

最後の最後に選ばせてくれるんだ。

はじめから両方の説明聞かせてくれりゃいいのに。

まぁいいや。
決まったようなもんだし。

さっさと龍と話してこよう。

開始

「なるほど……そっちは知能重視ですか。
それなら尚更先輩に任せたほうがよさそうですね」

俺のほうの説明を話して、龍のほうの説明も聞いた。

龍のほうはとことん体力重視らしい。

こっちと同じく、くじ引きでやることを決めるらしい。

逆立ちとか腕立て伏せとかかな。

「あのな、俺脳トレなら得意だけど勉強系とか結構ダメなんだよ……。
その分そっちが不利になったらごめんな」

そのせいでどんなハンデがあるかわからない。

先に謝っておく。

「そういえば先輩、実は暗算とか苦手でしたね……。
大丈夫です、任せて下さい！」

「ああ、助かる」

そう、俺暗算が出来ない人なんだ。

さすがに1桁は出来るけど、2桁以上になるとすぐ答えられない。

計算力ないんだよね。

だからやっぱ頭はよくないんだよ、俺。

いいのは記憶力だけ。

まぁそんな話、今はどうでもよくて。

とにかく、頑張ろう。

それから龍と軽く話して、青い旗のほうに戻ってきた。

もともと体力に自信ない俺が赤い旗のほうに行く勇気ねぇよな。

（それにしても……なんかガリ勉っぽい人そこそこいるな）

さらにヤバいかも?

いや、ガリ勉の人は脳トレとかに弱かったりするんだよな。
むしろ、そうであってくれ。

『さぁ、もう決まりましたね。
まずは赤い旗にいる人、位置について下さい。
青い旗にいる人はそのまま待機ですよ。
競技の流れを説明します』

アナウンスによると、まずは赤旗組がスタートするらしい。
校庭を半周したら、今度は青旗にいるペアと一緒に二人三脚でスタート。
２人で進んでいって、途中に置かれたくじ引き箱から紙を選んで、紙に書かれた問題に答えたら先に進む。
くじ引き箱は赤旗用と青旗用が２つ。
両方共クリアしないと進めない。
青旗組が問題に答えられなかったら２０秒その場に停止。
その間、赤旗組のペアはクリアしても続けてなきゃいけない。
全部の問題をクリアしたらゴール、と。
うーん……。

ああは言ったけど、なるべく龍に負担が掛かりすぎないようにしなくちゃ。

出来る限り頑張ろう。

スタート

『それでは、位置について……よーい、スタート！』

赤旗組がスタートした。

「おお、龍早ぇ」

他の人より一足先に俺のとこに着いた。

「行きましょう、先輩！」

「ん」

互いの足を紐で結んで、二人三脚で進む。

「なかなか悪くないんじゃね？」

「ですね！」

結構テンポがいい。

龍が合わせてくれるからバランスも崩れないし。

とか言ってるうちに最初のくじ引き箱に辿り着いた。

『さぁ、くじを引いたら何の問題が書いてあるか読み上げてください』

アナウンスが問題を読むらしい。

「えーと、Ｂの１１」

「僕はＴの２です」

『はい、Ｔの２は『腹筋５０回』です。
どうぞ始めてください。
Ｂの１１の問題はこちら』

なんか絵が出てきた。

世界地図が描いてある。

『現在のＴＰＰ加盟国はどこでしょう。
全てお答えください。
加盟交渉中は含みませんよ』

いきなりそんなハイレベルな……！

と思ったが、よく考えるとこの間授業でレポートまとめたっけ。

たしか……

「ブルネイ、チリ、ニュージーランド、シンガポール」

『ピンポンピンポン、正解でーす！』

「よっしゃ」

これ、パソコンでレポートまとめしたんだよ。

パソコンで打つと結構文章とか覚える。

ラッキーだったな。

「４８、４９、５０！

終わりました！」

『２人共クリアしましたね、どうぞ先に進んでください』

紐を結び直して、二人三脚を始める。

意外と他のチームは手間取ってるな。

ガリ勉っぽい人達もいるけど、そんなに早くない。

これ、なかなかいい線いくんじゃね？

『神谷くん三木さんのペアは順調ですね。
次のくじ引きに1着です。
それではくじの番号を言ってください』

「俺はDの8」

「僕はSの1です」

『Sの1はペアの人が問題に答えるまで逆立ちです。
はじめてください。
それではDの8、いきます』

ひらがなが1文字ずつ書かれたプレートがたくさん出てきた。

『そのプレートを並べ替えると芸能人の名前になります。
全部で文字、そのうち1文字はダミーです。
3人の芸能人の名前を答えてください。
制限時間は1分です。
はじめてください』

よし、こういうの得意。

「えーと……アントニオ〇木、石田〇一、坂東英〇」

『大正解!』

「先輩早っ!」

「まぁな」

作者の都合により伏せ字を使います。

ホントはちゃんと答えてるよ。

『さすがですねー。
それでは先に進んでください』

よしよし、順調。

頼むからこのまま順調に進んでくれ……。

スタート　２　－ｓｉｄｅ龍斗－

勉強系の問題が苦手だ、と言いながらも結構順調に正解していく先輩。

てゆーかＴＰＰってなんだ……！！

先輩すげぇ！

芸能人名並べ替えとか一瞬で答えた！？

先輩すげぇ！

ＴＰＰとか言葉の意味すらわからない僕にはまったく理解できなかった。

先輩が勉強系の問題が苦手なのは昔から知ってる。

でもそれを補うだけの瞬間的な記憶力を持ってるから今まで勉強に困らなかったんだろう。

ふと気が付くと、他のチームと差がひらいてる。

ほとんどのチームがまだ２問目の途中だ。

さすが学年1位……。
頭の回転速度はだてじゃない。

その後の1問も順調に正解した。

残りは3問！

次の問題は、僕は先輩が正解するまで60キロの俵担ぎ。

先輩は……

『問題です。
次の英文を訳してください。
Ｏｕｒ　ｔｅａｃｈｅｒ　ｔｏｌｄ　ｕｓ　ｎｏｔ　ｔｏ　ｒｅａｄ　ｔｈｅ　ｂｏｏｋ.』

先輩は『しまった』という顔をする。

そうだ……英語は先輩の1番苦手な教科。

まぁ英文は簡単……あれ？

本を読むな、って意味？
読めと言ってない、って意味？
ど、どっちだ……。
日本語なら似たような意味になるけど、英文は違うだろうし……。
これは不正解でもしょうがない。
僕は俵をしっかり担ぎ直した。

30秒

『問題です。
次の英文を訳してください。
Ｏｕｒ　ｔｅａｃｈｅｒ　ｔｏｌｄ　ｕｓ　ｎｏｔ　ｔｏ　ｒｅａｄ　ｔｈｅ　ｂｏｏｋ.』

……しまった。

これはヤバい。
まさか英語の問題まであるとは。

えーと……。

『Ｏｕｒ　ｔｅａｃｈｅｒ』で『私達は先生に』、とかかな。

んで『ｔｏｌｄ』だから『言った』、か。

『ｔｏｌｄ　ｕｓ　ｎｏｔ　ｔｏ　ｒｅａｄ　ｔｈｅ　ｂｏｏｋ.』
で……な、何を言ったんだ。

『ｎｏｔ』だし、『本を読むな』かな?

いや、もしかしたら『本を読めって言ってない』、かも?

『ｎｏｔ』って何を否定してんだ……。

『ｕｓ』とか『ｔｏ』で何に対しての否定なのかわかりそうだけど、俺はその意味をよく知らない。

『先生は私達に本を読むなと言いました』
『先生は私達に本を読めと言ってない』

うーん……わからん。

先生が本を読むなとか言うか？
言わないよな、普通。

しょうがない、早く答えなきゃ。

龍、ごめん。

『残念！！
不正解！』

結局、俺は『先生は私達に本を読めと言ってない』と答えた。

「うわ……最悪。
龍、ごめん。
しかもこんなきついお題で……」

俺が不正解だったから龍は６０キロの俵を３０秒ずっと担いでなきゃならない。

「大丈夫ですよ！
今まで先輩が頑張ってくれてたので、お役に立てて嬉しいです！」

とりあえず、がんばれがんばれと真横で応援する。

それくらいしか出来ない。

しかも３０秒は意外と長い。

他のチームが俺達に追いついた。

『５、４、３、２、１、０！
どうぞ進んでください』

「行きましょう、先輩！」

「ん、ちょっとがんばる」

残り2問。

タイムロスした分、取り返さなきゃ。

ラストスパート

『問題です。
サボる、の語源は？』

「えーと、たしか……あ、サボタージュだっけ」

『正解です！』

これ、なんか前にテレビのクイズ番組でみた気がする。

テレビって偉大だ。

「よし、次でラストだ」

「このまま進めばいけますよ先輩！」

他のチームはまだ問題に手間取ってる。

順調に行けば俺達が1位でゴールできそうだな。

勝ち負けにこだわるつもりはないけど、結構頑張ってるしせっかくなら1位になりたいよね。

俺だけじゃなくて龍も一緒の競技だしな。
どうせなら勝たせてやりたい。

さてと、さっさと次の問題に。
俺達はくじ引きの箱に手を突っ込む。

俺はNの1、龍はFの21だ。

アナウンスが流れる。

『まずFの21ですが、ペアの人を担いでください。
そしてペアの人が問題に答えたら、担いだままゴールまで走ってくださいね。
歩いてもいいですよ』

「「え……」」

俺達は2人して顔を見合わせる。

ちょ、俺重いし……。

つっても男だから運べないことはないんだろうけど……担いだままとか、それ龍にめちゃめちゃ負担かかるじゃん。

最後の最後でこれか……。

まぁ迷ってる暇はない。

ぐずぐずしてると他のチームに追いつかれる。

龍、悪いけど頑張ってくれ。

ラストスパート　２　－ｓｉｄｅ龍－

『まずＦの２１ですが、ペアの人を担いでください。
そしてペアの人が問題に答えたら、担いだままゴールまで走ってくださいね。
歩いてもいいですよ』

「「え……」」

僕と先輩は顔を見合わせる。

（担ぐ……担ぐって、そのままの意味だよな。
担ぐ、担ぐ、……え、僕が？
先輩を？
僕としては役得……でも先輩は嫌なんじゃ……？
え、と、担ぐ、担ぐ、）

アナウンスの言葉が頭の中でループしてきて、なんだかよくわからなくなってきた。

てゆーか、担ぐって具体的にどうすれば……。

『担ぎ方はお好きなようにどうぞ。
お姫様抱っこでも俵担ぎでもおんぶでも。

男女ペアならお姫様抱っこをオススメします』

アナウンスぅぅぅ！！

ちょっと黙ってぇぇぇ！！

「姫抱っこはちょっと……。
おんぶしてくれる？」

「あ、は、はい！」

先輩に腕を引かれて慌てて返事をした。

おんぶ……。

密着率でいえばお姫様抱っこや俵担ぎより高いと思う。

ちょっとヤバいかもしれない。

主に僕の心臓が。

……僕、明日から無事に学校で過ごせるかな？

しばらくは恨みの籠もった視線を浴びることになりそうだ。

「よ、いしょ、っと。
ごめん、重くない？」

「い、いえ……」

むしろ全然。

というか僕にとっては重さとかそんなのより、背中に当たる女性特有の膨らみが気になった。

自分の顔に熱が集まるのがわかる。

「おい、龍？
大丈夫？」

「え、あ……はい。
そ、それより問題を！」

『それではいきます。
最後の問題です。
ペアの２人の誕生日、この学校の創立記念日、生徒数、全てを足してください。
その数字からひらがな３文字の言葉を導き出してください』

……誕生日は、わかるとして。

創立記念日と生徒数って、正確な数字だよね。

生徒数はだいたい７００人くらい。

正確には……わ、わからない……。

しかも数字をひらがな3文字に、って……どうやったら答えが？

……先輩、頑張ってください！

ゴール

『それではいきます。
最後の問題です。
ペアの２人の誕生日、この学校の創立記念日、生徒数、全てを足してください。
その数字からひらがな3文字の言葉を導き出してください』

なんか、難易度上がったっつーかめんどくさい問題に当たっちゃったな……。

さっさと数字を出さなきゃ。

えーと、俺と龍の誕生日を足して……５９か。

んで……多分、創立記念日が2月7日だったから足して9。
それを５９と足して６８。

生徒数が……この間チラッと見たな。
たしか、７４６人だったかな。

足して……８１４。

ちょっと時間が掛かったけどなんとか数字を出せた。

暗算、やっぱり苦手だな……。

えっと、数字からひらがな出さなきゃいけないんだよな。

五十音順じゃ当てはまらない。

８１４をアルファベットの順番に直したら……ｈａｄ？

うーん……あ、英語か？

ｈａｄを日本語に直したら……ｈａｖｅの過去形だから……

「……『持った』、かな」

『大正解！！』

おお、よかった。

『さぁ、どうぞ進んでください。
ゴールは目の前ですよ』

「ごめん。
結構時間くっちゃった」

「大丈夫です！

それじゃあ行きますよ！」

他のチームも何組か同じ位置にいたけど、最後はどれも時間の掛かる問題になってるらしい。

俺達は一足先にゴールに向かった。

『ゴール！！
1位は神谷くん・三木さんペア！』

「やったな。
悪い、重かっただろ」

「いえ、全然です！
やりましたね！」

結果、なかなか苦戦したけど1位でゴールした俺達。

「「やったぁ、みっきー！！」」

後ろから聞こえた声援に振り向くと、テントから大きく手を振る香達が。

デカイ声を出すのは無理だから手だけを振り返した。

「先輩、実はこれ1位には景品が出るんですよ。
受け取ったら後から渡します」

「へぇ。
楽しみにしてる」

景品か……。
まぁ学校だし図書券とか商品券とかかな。

俺あんまり本読まないし、図書券以外がいいな。

「ありがとうございました、先輩。
おかげで1位になれました」

「いや、こっちこそ。
楽しめたよ」

うん、なかなかおもしろかった。

高校生最後の体育祭でそれらしいこと出来てよかったな。

「すごかったね、みっきー！」

「さんきゅ」

俺は生徒用テントに戻ってきた。

水筒のお茶が美味い。

「あとは出場する種目もないし、ゆっくり見学できるね」

「そうだな。
つーか隊長は？」

俺が戻ってきたときにはもう隊長はいなかった。

「さっちゃんは応援団の最終打ち合わせ。
今やってる種目の３つ後には応援団だよ」

「おお、楽しみだな」

頑張れ隊長。

せっかくだから写真でも撮っとくかな。

「あっ！
あれさっちゃん達じゃない？」

「ん？」

校庭の端っこで輪になって会話してるのはウチの組の応援団。
隊長の姿も見える。

「……なんか、様子が変じゃねぇ？」

「え？」

「これから応援合戦だってのに、妙におとなしくて活気がないし。
なんか表情も浮かない感じ？」

こっちから見てもわかる程度に様子がおかしい。
何かあったか？

「……行ってみる？」

「行ってみようか」

俺と香は隊長達のところに向かった。

アクシデント

「隊長ー」

「あ、みっきー……」

呼び掛けると隊長は振り向いた。

「浮かない顔して、どうかした？」

「うん。
ちょっとアクシデントがあって……」

「アクシデント？」

「実はね、」

隊長が言うには、ウチの応援団は生の太鼓の音に合わせて応援演技するらしい。

まぁ練習風景を何度か見てたからそれは知ってる。

で、今まで練習でもやってた太鼓の役割の人が熱中症でぶっ倒れたらしい。

太鼓の係がいなくなってどうやって応援演技するんだ……って話し合いをしてたんだとか。

「太鼓のテンポに合わせて、それを合図に踊るところもあるから……どうしよう、ってね」

「なるほどな。
録音テープとかは無いの？」

「オリジナルのリズムだからね。
原曲もないし、練習に必死で録音する暇なかったから……」

「そっか」

うーん……。

あんまり目立ちたくないけど、この際しょうがないか。

「あのー、団長さん」

「うん？」

「よかったら俺が太鼓やりましょうか？」

「……え？」

団員全員が顔を向けた。

まぁこんな発言、唐突すぎてびっくりするわな。

「えっと、友達が団員だから何度か見学させてもらってたり太鼓の音が教室に聴こえてきたりしてリズム覚えてるんで」

とりあえず、軽ーく説明的なことをやってみる。

「かなりヘボい感じになるかもしれないけど間の取り方とかテンポはばっちり覚えてるから、よかった俺を使って？」

「え、あのリズム、覚えてるのか？」

「ん、まぁ」

音は覚えやすい。

「……団長、そろそろ時間が」

「……三木、頼む」

「ん、がんばる」

時間もないし、俺がやることになった。

「……みっきー、いいの？
結構目立つよ？」

「いいよ。
隊長のためなら」

友達のためなら、まぁ構わない。

応援団の足引っ張らないように頑張ろ。

盲点

「きゃー！
みっきー！！」

「みっきーこっち向いてー！」

「……」

盲点。

つーか香と隊長、写真を撮るな。

「まさか俺まで着替えなきゃいけないとは……」

自分の姿を見下ろす。

あれだよ、学ランですよ学ラン。

んで赤色の長ーいハチマキ。

応援団の衣装らしいけど、俺まで着用しなきゃいけないとは思わなかった。

……それにしても暑い。

黒だし厚着だから当然か。

「がんばってね、みっきー！」

「ん。

あとその写真あとで消させろ」

応援団でもないの衣装着てるとか俺がコスプレ好きみたいじゃねぇか。

「……やりきった。

やりきったよ、パ〇ラッシュ」

「誰がパ〇ラッシュだ」

瀬田の肩に腕を回して呟く。

やったよ、頑張ったよ。

応援団すごいね。

一番近くで見られてちょっと満足。

「みっきー！
ばっちり写真撮ったからね！
さっちゃんもね！」

「そのカメラ、いますぐ地面に叩きつけたい」

それをしないのはなぜか。

当然、隊長が写ってるからだ。

香の野郎、確信犯だな。

「三木、ありがとうな！
まさか本当に完璧に覚えてるとは……」

「ああ、団長。
お疲れ」

そういえば言い忘れたが、この団長はクラスメートだ。

「あのさ、体育祭終わった後に応援団で打ち上げやるんだけど、よかったら来ねぇか？

みんなで来ていいから」

「んー……」

打ち上げか。

みんなでってことは、香と瀬田もってことだよな。

隊長は最初から行くことになってるだろうし。

「ちなみに、お前は助っ人だから打ち上げ代の徴収無しな」

「ん、行く」

みんなで行ってよくてお代無しなら、まぁ行くべきだろう。

せっかくの好意だ。

素直に受け取るぜ。

閉会式

やっと終わったぜ体育祭。

今は閉会式の最中だ。

『それでは、得点を発表します』

周りがざわつく。

実は、今までウチの学年は勝ったことがない。

もうなんか呪いでもかかってんじゃないかってくらいボロ負け。

ちなみにウチは赤組。

はてさて、今年の結果は？

『白組、５８６点！
青組、７６９点！』

ふむふむ。

んでウチは？

『赤組……１０８６点！』

周りが思いきり歓声を上げる。

……え？

なにこれ、ちょっと圧倒的すぎない？

すげぇな赤組。

『そして応援団得点！！
白組は３８点！
青組は４６点！』

応援団にも得点あったんだ。

５０点満点かな。
青組やべぇ。

『赤組は……なんと９２点！』

「わぁぁ！
やったぁー！！」

さらに歓声があがる。

えぇぇ。
なにこれ圧倒的……。
５０点満点じゃなかったんだ。

泣き出す人までいる。

多分、応援団員だな。

よかったね。

「三木！
打ち上げ、駅前のカラオケだからな！
絶対来いよ！」

「んー」

応援団めちゃめちゃテンション高い。

打ち上げも楽しそうだな。

「みっきー、行く？」

「制服に着替えたら行くか」

「よーし、楽しむぞー！
なんかこういうの青春っぽいね！」

「だな」

さっさと着替えるか。

打ち上げ

「おっ、来た来た！」

カラオケの一室ではすでに曲が流れて盛り上がってた。

「三木、なに飲む？」

「コーラ」

定番だよね。

「三木、本当にありがとうな！
太鼓がなかったら９２点なんて無理だったよ」

「三木さん、完璧だったよ！
私の代わりありがとう！」

団長と、俺が代わった太鼓係だった人だ。

「こっちとしては応援団間近で見られたからラッキーだったよ。
足手まといにならなくてよかったよ」

「とにかく、今日は楽しんでいってくれよな！」

「さんきゅ」

「せっかくのカラオケだからな。
どんどん曲いれるぜ！」

団長を筆頭に予約曲が増えていく。

「私も歌っちゃおー」

「アタシもー」

香達もいれたか。

「みっきーもいれなよ。
コーラばっかり飲んでないでさ」

「てか早っ！
もう3杯目！？」

瀬田よ、俺を甘くみちゃいけねぇ。

せっかくだし曲いれるか。

「うーん……何にしよう」

無難にＪ－ＰＯＰ？

アニメの曲とか？

誰もが知ってる名曲？

最新曲？

「まぁ、ここは無難に……」

テキトーにＪ－ＰＯＰで。

ちょっと高音の男性歌手の曲でいいか。

古すぎず、新しすぎず。

それでいてそこそこ知られてる曲。

ああ、俺大人数のカラオケって向いてねぇんだな。

有名曲あんまり知らないし。

香達３人だけなら初音ミ〇とか歌うんだけど、さすがに自重。

ボ〇ロいいよね。
むしろそれしか歌わない気がする。

打ち上げ　２　－ｓｉｄｅ香－

あ、みっきーが歌う番だ。

曲が流れ始めてみっきーにマイクが回ってくる。

みっきーは電源をたしかめてから歌い始めた。

今まで会話してた人達もハッとして画面に目を向ける。

ふふん、ちょっと自慢。

実はみっきー、めちゃめちゃ歌が上手い。

加えて普段から低めの声だから男性っぽい声も出せるし、それとは１８０度違う高い女性声も出せる。

こういうのなんていうんだっけ？

両性声？

多性声？

「うま……」

思わず呟く人もいる。

ただ、普段はもっと上手い。

なんでかと言うと、みっきーは周りが静かだと恥ずかしがるから。

だからみっきーのマックスの上手さを聴きたいなら、周りは喋ったほうがいい。

それからみっきーを直視したり歓声を上げたりとかあんまりしちゃいけない。

恥ずかしがるから。

まぁそんなの私達くらいしか知らないからしょうがないんだけどね。

うーん、いつも程じゃないけど……さすが上手いなぁ。

人前に出るべき上手さなのに、みっきー積極的じゃないからなぁ。

もったいない。

あー、でも歌の途中で咳したりとか歌い始めでミスったりとかよくある。

親戚の結婚式で歌ったことあるみたいだけど、『舞台向きじゃない喉』って自分で言ってたなぁ……もったいない。

曲が終わった。

「三木、お前上手いな！！」

クラスメートの団長が拍手しながら声を掛ける。

「ん……どうかな」

普段もみっきーは答えにくいこと、微妙なこと、には『どうかな』で切り返す。

「いいねぇ、盛り上がってきた！
歌うぜー！」

応援団員の男子が歌い始めた。

「三木、お前俺とバンドやんねぇ？」

「あー、面白そうだな」

……みっきー、本気に受け取ってないな。

団長さん、多分本気だろうに。

とりあえず、打ち上げは終始大盛り上がりだった。

楽しかったなぁ。

たまにはこういうのもいいかも。

進路（前書き）

やっと終わりました体育祭。
文化祭もあるなぁ、どうしようかなぁ。

今回は閑話的な話です。
正直、読まなくても支障はないはず？

タイトル通り進路の話です。

リアルタイムでは最近寒くなってまいりました。
風邪には十分にお気をつけくださいね。

長々と失礼しました。
読んでくださってありがとうございます。

進路

『えー、体育祭は終わったものの、まだ気の緩みが抜けないだろうが今日からは引き締めて、』

教頭の話しを右から左に流しつつ、俺は隠さず欠伸をする。

「みっきー、飽きたんだね……。
もうちょっと我慢だよ」

「んー」

小声で話しかけてきた香に返事をしつつ、制服のポケットの中に入った携帯をなんとなく撫でる。

全校朝会はダルい。

話しを聞くだけなら校内放送で流してくれりゃいいのに。

まぁ、そんなもん誰も聞かないだろうが。

「みっきー、テスト勉強してる?」

「まだ」

俺に飽きたのかと言いつつ話し掛けてくるとこをみるに、香も飽きてんだろうな。

「みっきーは成績いいもんねー」

「いや、つーかまだテスト範囲出てないだろ」

「……出てるよ？」

「マジか」

そりゃ知らなかった。

「あとで教えて」

「うん、いいけどね。
みっきー、普段家で勉強しないで何やってるの？」

「何って……まぁ、いろいろ？
つーか、勉強してるから」

「してるって言ってもテスト前日でしょ」

まぁそうなんだけどさ。

普段ねぇ……何ってこともしてないけど。

「とりあえず、幸せに暮らしましたとさ」

「童話じゃないすか」

いいんだよ。

実際、わりと幸せに暮らしてるから。

全校朝会も終わり、俺達は教室に戻ってきた。

「おぅ、三木」

「なんですか先生」

担任だ。

なんか用らしい。

「お前、進路どうする？」

「就職します」

キッパリ言い切る俺に、先生は苦笑いをする。

もともと俺は高校に入る前から高卒の就職希望だった。

なぜかって、そりゃ進学して勉強したくないからね。

「お前の成績ならラクラク推薦とれるんだがなぁ……」

「でも進学してまでやりたいことないんですよね」

「やりたいことを見つけるために大学行く奴もいるんだぞ？」

「金にそんな余裕はねぇですよ。
奨学金にしたって費用は馬鹿にならない。
もう勉強したくないですし」

「言うほど勉強してないだろお前」

なぜ知っている。
いや、俺だってそこそこちゃんとやってるぞ。

「就職って、具体的に職種は決めてあるのか？
前は製造業で希望してた企業あったけど、他の生徒に譲っただろ」

「あー、製造業の現実が見えちゃったんでね。
まぁ仕事はどれも大変なんでしょうけど」

いろいろ考えてみたが、俺には製造業は不向きだ。

あんまり集中力が高くないし、飽きっぽいし。

「他に考えてるとこあるは？」

「一応事務系がいいなぁ、とは思ってるんですけどね」

「ああ、まぁお前にはかなり合ってるだろうが……今の時代、学校にくる求人で高卒の事務職はないかもしれないぞ」

「それは承知の上ですよ。
ただそれは学校にくる求人の場合であって、ハローワークなら高卒の事務職は結構あります」

「ハローワークは一般社会人向けだろ？」

「だから一般社会人になってからでいいじゃないですか」

「……ははぁ、なるほど。
つまり高校では就職せず、卒業してからそっちを受験するってわけか」

「ご名答」

高校を卒業してから就職する。
これが俺の進路計画だ。

つまりは高校卒業して少しプーさんになるわけだが、ハローワークなら申請して一週間くらいで面接を受けられる。

ハローワークでいい事務職あったんだ。
しかも地元で給料なかなか。

「じゃあ自分で進めていくわけだな？」

「まぁそうですね。
面接練習の相手はしていただきますけど」

「ああ」

進路の話しも終わった。

目指せ、プーさんから事務職。

文化委員（前書き）

文化祭の話自体はもう少しあとになります。

今回は関連話ですがちょっと重要かも？

関連話の間でなにかが起こります。

読んでくださってありがとうございます！

文化委員

「今年の文化祭のテーマを決めることになった。
ついでに看板も作成する係だからな」

「で、なんで俺達がやるんすか」

「お前ら文化委員のくせに仕事ないだろ。
せっかくだから働け。
これも青春の１ページだ」

「勝手に委員決めたの先生じゃないすか」

俺達４人は職員室に呼ばれた。

なにかと思えば、用事はこれ。

文化祭まであと１ヵ月。
看板やらなにやらを作らなきゃならない極めてめんどくさい仕事を
押し付けられた。

しかもたった４人で文化委員だなんて。
なんて過酷な青春だろうか。

「クラスの奴らに協力してもらってもいいぞ。

いい看板を作ってくれ」

「へーい」

それでもやっちゃうのが俺達だ。

誰かに手伝ってもらおう。

「というわけで、手伝ってくれる人募集。
ちなみに飾り付けにセンスがある人と色決めのセンスがある人、特に募集。
てゆーか希望」

「手伝いに選り好みするなよ」

クラスメートが突っ込むが気にしない方向で。

「テーマとかどうすんの？」

「何でもいいよ。
『絆』とか、『きずな』とか、『キズナ』とか」

「もう絆でいいじゃねぇか」

「いや、これは例えだから」

さっきから俺に華麗なツッコミを入れるのはあの団長だ。
ツッコミ上手だな。

「とりあえず、そんな感じで。
あと俺は長々と作成に時間掛けるのは好きじゃないから、5日で仕上げるつもりでよろしく」

「とことんマイペースだな」

なんだかんだで結構手伝ってくれる人が集まった。
みんないいやつだな。

俺は絵も描けないし、配色も上手くない。
それは他の人がカバーしてくれるだろう。

まぁ、がんばってさっさと終わらせよう。
んで、なるべく良さげなものを作ろう。

看板作り（前書き）

そういえば今日はポッキー・プリッツの日ですね。

トッポも入るのかな？

後書きにおまけ投下します。

題して、

『ポッキー渡したついでに好きなお菓子訊いてみた』

長い。

看板作り

「あ、それはそっちに……」

「ねぇ、墨汁まだあるー？」

看板作り。

なかなかに盛り上がってる。

なんだかんだでクラスメート全員が手伝ってくれることになった。

「三木に任せたら途中で面倒になってテキトーにシンプルで済ませそうだからな」

「行事の看板が飾りも無しでただ『文化祭』って書かれただけじゃ寂しいからね」

みんなよくわかってるぜ。

「三木さん、こっちの文字と絵の間隔とって」

「ん」

俺の仕事は目分量で間隔を測ること。
あと、言われたとこのペイント。
目分量の仕事がほとんどだ。
「うーむ……」
全長3メートルはあるだろう紙を見渡す。
紙に対して斜めに『文化祭』の文字をいれて、空いたとこに絵描いたり飾り付けたりするんだって。
薄紙の花とか細かい飾りもいろいろ作ってある。
「こんなもん、かな」
何度か全体で見て微調整ながら鉛筆で薄く丸を書く。
この丸の中に文字を書いてもらうわけだ。
「ん、OK。
書道部お願ーい」
「はーい、まかせて」

クラスメートの書道部員に声を掛ける。

真っ白な紙にはすらすらと『文化祭』の文字が入っていく。

さすが書道部。

綺麗な字だ。

文字を入れ終わったら今度は絵だ。

「おい、三木。

今のうちに飾り付けもしとくか？」

「あー、まだ絵のペイント終わってないしせっかくの綺麗な飾りが型崩れするだろ。

絵の具も乾かさないといけないから飾り付けは1日あとにやろうぜ」

しかもペイント中にうっかり踏みそう。

特に香とかが。

絵のセンスは一切ない俺。

せいぜいノートの端っこに書く落書き程度の画力だ。

絵は隊長が上手いんだよ。

隊長をはじめとした絵が上手い人達にまかせる。

「三木、ここにこんな感じで絵入れたいから間隔とって」

「ん」

こういうの、目分量はなかなか使えるらしい。

看板作り（後書き）

おまけ投下。
『ポッキー渡したついでに好きなお菓子訊いてみた』

――――

【佳亜】
「ポッキー？
くれるの？
ん、さんきゅ。
好きな菓子？
そうだな……割りといろいろ好きだけど、和菓子が好きかな。
てゆーか作者、最近老けた？」

【香】
「わー、ありがとう！
え？
好きなお菓子は……うーん……クッキーとか好きだなぁ。
チョコのお菓子はみんな好き。
ところで作者さん、歳いくつ？」

【瀬田】
「あー、ありがとー。
好きなお菓子は飴とかガムかな。
いつも持ち歩いてるし。
作者、いつのまにか歳とった？」

【隊長】

「ありがとう。
お菓子はなんでも好きだけど、グミとかはよく食べるよ。
あと貰った手作りお菓子も好き。
作者さん、疲れた顔してるよ？」

【龍】
「ありがとうございます。
好きなお菓子は……ゴニョゴニョ（訳：先輩がくれたお菓子は全部大好きです）。
ちょ、勝手に訳さないでくださいよ！？
それにしても……なんだか老けましたね作者さん」

酷いっ！
みんなして遠回しに老けた老けた言ってっ！

若干2名ほどストレートに老けたって言われたっ！

最近寝不足な作者でした。
寝不足で老けるなんてヤダ……。

「あ、いたいた作者」

なんだい佳亜さん。

「はいこれ、ポッキーのお返しに」

これは……作者の安眠アイテム、ちょっと高めの枕じゃないか。

「寝ろし」

なんてストレートな命令だ。

「じゃ、ばいばい」

あ、うん、ばいばい。
ありがとう。

――――

長々と失礼しました。

読んでくださってありがとうございました！

白は黒に

看板作り3日目。

なんか今日中に終わりそう。

「絵、もうすぐ終わるよー。
飾りは？」

「箱に入れてある。
ここに置いとくぞー」

絵すげぇ。
なんか女の子と学校がほぼ写実で描いてある。

めっちゃリアル。
さすが隊長達だ。

「思ったより早く終わりそうだね、みっきー！」

「ああ、みんなのおかげだな」

俺は相変わらず間隔とる仕事ばっか。

ペイントも下手であんまりやることないから飾り作りを手伝ってた。

あ、墨汁のキャップ空いてる。

「おーい誰か、それ閉め」

「随分楽しそうね。
騒がしくて耳が痛いわ」

教室の入口から聞こえた声に、誰が来たのかすぐ気付いた。

「七村さん、なんか久しぶりだね」

「久しぶりなのは登場だけよ！！」

たしかに会ってはいる。
相変わらず嫌味っぽいことを言ってくるだけだけど。

いつ以来の登場だろう。

七村さんを忘れちゃった人は『敵対視』をみてね。

と、宣伝を終えたとこで話しを戻すか。

「文化祭の看板、アナタがリーダーらしいじゃない。
どんなもんか見に来たけど……たいしたことないわね。

地味だわ」

おいおい、せっかく盛り上がってるのに空気悪くしないでくれよ。

「そう？
なかなかの出来だと思うけどな。
そういうなら七村さんも描いてみる？」

「はぁ？
なんで私がそんな裏方の仕事やらなくちゃならないのよ。
冗談じゃないわ」

「ふーん。
裏方あってこその表だと思うんだけどな」

「居るか居ないかわからないくらい目立たないアナタには裏方はお似合いよね。
ただ表の私の足引っ張らないでくれる？
迷惑だわ」

「お前……っ」

俺が七村さんを相手してる間も作業を止めなかったクラスメート達。

そのまま進めててくれるとよかったんだけど、クラスメートの団長が声を荒げようとした。

七村さんには見えないように、人差し指を立ててシーと団長に示すと大人しくしてくれた。

よかったよかった。

それにしても……。

「……」

「なによ。
何か文句ある？」

「……なんか七村さん、機嫌悪い、ね？」

「……っ！？」

いつもより４割増くらいで機嫌が悪いように思える。

「誰のせいだと……っ！」

七村さんが近づいてくる。

おお、やべぇ。
殴られる？

止めようと焦った表情の団長や香達の顔が目の端に映りつつ、そう思った時。

――ガシャ、ン。

勢いよく歩いてくる七村さんの足元にあったらしい墨汁の入った容器。

前だけをみてる七村さんが気付くはずもなく、容器は並々入れられてた墨汁を撒き散らしながら思いっきり吹っ飛んだ。

咄嗟で近くにあった飾り入りの箱は教室の隅に蹴っ飛ばした。

その後の結果はみえたも同然だからな。

「……あっ！！」

「うわ……」

「っ、ひど……」

白い紙は黒に染まった。

真っ黒（前書き）

気付けばもうこれを書きはじめてから3ヵ月が経ちました。

なにげに毎日更新できてます。

それもこれも読んでくださる方がいらっしゃるからです。

本当にありがとうございます。

これからもよろしくお願いします！

真っ黒

「……っ」

七村さんもまさか足元に墨汁があるとは予想外だろう。

驚いて言葉を失う。

「……ちょっ、おい！
どうすんだこれ！？」

「どうするって……。
これもうダメでしょ……」

「あー、もうちょっとで出来上がりだったのに」

空気も妙に悪くなる。

ヤバいね。

「まぁまぁ。
制服汚れた人いない？
早く洗わないと落ちなくなっちゃうよ」

「……制服は、別に汚れてないな」

それならよかった。
床は汚れてるけど拭けばいい。

「てゆーか……七村、謝れよ」

一気に視線が七村さんに集まる。
視線に非難が混ざってるのがわかる。

「……な、なによ。
もとはといえばこんなところに墨汁を置いたリーダーさんが悪いんじゃなくて？」

「別に三木さんが置いたわけじゃないよ」

「管理不足だって言ってるのよ。
だからリーダーにふさわしくないって言ったでしょ。
私のせいにされるなんて迷惑でしょうがないわ」

俺は頬を掻きつつ、状況を眺める。

うーん……空気は悪くなる一方、か。

七村さんとクラスメート達の間に火花さえ見えそうな雰囲気だ。

この空気を色で表すなら、染まった看板と同じ黒だな。
真っ黒。

せめて七村さんが教室を出て行ってくれたら、とりあえず場は収まるんだけどな……。

とか思ってたら、七村さんからキッと睨まれた。

「だいたいっ、アナタが悪いのよ！」

うお、急にキレた。

なんだ、情緒不安定か？

「全部っ！
アナタがいなければ……っ！」

「え、ちょ……」

イスぶん投げられたんだが……。

俺に向かってまっすぐ飛んでくるイスがスローモーションで見える。

どうしよう。

避けなきゃ……。

あ、でも俺の後ろって窓じゃん。

……避けてもヤバいな。

たとえば俺が男だったら受け止めるとかできたかもしれないけど、生憎俺は女だ。

相手が同じ女とはいえ、力一杯投げられたイスを受け止めるのは無理。

幸い、窓の近くにいるのは俺だけだし……みんなが怪我しなきゃいいか。

さぁ、そうと決まったら持ち前のそこそこな反射神経で避けるぜ。

窓は犠牲になったのだ。

風通し

「いてっ……」

イスはしゃがんで避けた。

が、予想通り窓はバリーンと。

飛び散った窓ガラスがしゃがんでる俺に降ってくる。

いてて。

でも頭は手で抱えて守ったぜ。

「みっきー！」

「おい、七村！！」

「……っ、うるさい！！」

七村さんはそう叫ぶと教室を飛び出していった。

「みっきー、大丈夫！？」

「お前、腕切れてるぞ……。

顔も……」

「マジ？」

香達と団長が心配してくれる。

作業しやすいように袖を捲ってたのが悪かったな。

頭は守ったつもりだったけど、顔は切れたか。

まぁ別に構わない。

傷もたいしたことない。

「俺、七村さんのとこ行ってみる」

「ええっ！？
なんで！？」

香が声を上げる。

「なんでって……まぁ、気になるし」

「みっきー、怪我の治療もしなきゃいけないんだよ？
それに……七村さんのことは、気にしなくていいと思う」

うん、たしかにそうなんだけどさ。
気遣いはありがたい。
……が、
「傷は深くないし、あとでいい。
七村さんは、気にしなくていいかもしれないけど……ほっといたらダメなことってある気がする」
「……」
「行ってくるよ。
悪いな、今日はもう帰っていいからさ。
掃除はあとでやっとくから」
ちょっと小走りで教室を出ようとしたとこで、
「おお？」
「うわ。
って、なんだ先生か」
「なんだとはなんだ。
つーかなんで窓割れてんだ？」
「風通しをよくするためです」

「いや、普通に窓開けろよ」

「先生知ってます？
ガラスって共鳴しすぎたら勝手に割れるらしいですよ。
じゃ、そういうことで」

「いや、どういうことだよ。
おい三木、お前そんな顔でどこに……」

俺はクラスメート達と先生を残してさっさと教室を出た。

なるべく早く話しを終えて教室の掃除しなきゃいけない。

さて、七村さんはどこに行ったかな。

逆恨み

少し探したら、渡り廊下で佇む七村さんをみつけた。

「……」

「……」

俺の存在に気付いたらしい七村さんは、俺に背を向ける。

「……なによ。
言っておくけど私、悪いことしてないと思ってるから」

「いや、それは別に。
ただちょっと気になって」

「……なにが」

「七村さんが、いつもより機嫌悪そうだから」

今日はやたらと刺々しい。

いつも嫌味は言ってもこれほどじゃない。

「……あなたのせいよ」

俺は無言で首を傾げる。

俺、七村さんになにかしたかな？

言い合いらしきものはしたけど……わりといつものことだから、それでいつも以上に機嫌が悪くなるとは思えない。

うーん……。

「……私の家はね、一般より良い家柄なのよ」

「……？

うん、まぁ、知ってるけど」

七村さんの家はお金持ちらしい。

七村さんはお嬢様ってわけだ。

登下校は高級車っぽい車で送り迎えされてるから、この学校の人はみんな知ってる。

「良い家柄はね、普通よりずっと厳しいのよ。

全てにおいて」

「……」

俺は黙って話しを聞く。

「父が立派なのはわかってるわ。
立派だからこそ世間体がある。
だから父の評価はその子供の私にもかかってるのよ。
だから習い事だっていくつもやってるし、勉強も頑張ってる」

「……」

なんかドラマみたいな話だな。

一般人の俺にはまるで別世界だ。

「……なのに！
どうして1位はアナタなのよっ！！
アナタ、そんなに勉強してないんでしょ！？
私は頑張ってるのよ！！
努力は報われるんじゃないの！？
なんで頑張ってないアナタが私より上なのよ……！！」

……なるほど、読めたぜ。

世間体を気にする家柄に生まれた七村さんは、今まで常に1番を求められたわけだ。

んで、七村さんはずっとその期待に応えてきた。

だが高校に入ってからは俺が1位をとった、と。
それについて両親から責められた七村さんは頑張って勉強を続けたわけだが状況は変わらず。

今日、一段と刺々しかったのは多分テストの順位発表が昨日あったからだろう。
テストの結果について昨日両親に責められたわけだ。

「ムカつくのよ！！
なんでアナタは努力しないの！？
せめてアナタがガリ勉だったらまだよかったわ！
私は習い事もしてる！
勉強時間ではどうしても劣るから、って思えた！
でもアナタは、なんにも努力してないじゃない！！
挙げ句の果てにはアナタ、就職希望ですって！？
ふざけんじゃないわよ！
なんで大学進学でもない人に私が負けなきゃならないのよ！！
アナタが東大にでも行くなら認められたのに！」

……正直、半分くらいは逆恨みじゃないかとも思ってしまった。
けど期待をかけられるプレッシャーは結構な重圧だろう。
現に俺は七村さんの言う通り、あんまり努力をしてない人間だ。

人の事をどうこう言えるほど偉くもない。

でも、まぁ。

「俺は……」

とりあえず、俺の言い分を伝えてみようかな。

高校に入ってから2年以上経って、今更かもしれないけど……七村さんとはちゃんと話すべきなんだろう。

多分、チャンスは今しかない。

多分、このチャンスは二度と来ない。

真逆の似た者

「俺は……たしかに七村さんの言う通り、努力してない。
そもそも俺は努力に向かない性質らしい」

「……どういうことよ？」

「これは中学の時の話しで、その頃の成績は今とそんなに変わらないくらいだったんだけど、」

数値的にはほとんど変わらないくらいだった。

勉強も一夜漬け。

そんな中、俺は思いつきでテスト勉強を1週間がっつりやってみた。

やってはみたものの、妙に頭の中がごちゃごちゃして勉強すればするほどわけがわからなくなった。

んで迎えたテストの日。

その結果、５０位くらい順位が落ちた。

これはマズイ、と思って俺は勉強時間を増やしてみた。

その結果、さらに２０位順位が落ちた。

酷くなる一方の成績に、俺はいろいろ考えた。

思い当たった原因は、勉強時間の変動しかない。

俺は、前のように一夜漬けで勉強した。

結果は、成績が落ちる前と同じくらいの順位まで回復して落ち着いた。

「……それって……」

「んで、もう1つ」

小学校の頃にあった学芸会。

先生が一生懸命に劇を成功させようと頑張ってたから、クラスメート全員が頑張った。

練習時間も他のクラスよりずっと多かったと思う。

当然、俺も頑張った。

わりとセリフが多くて小学生にしては内容の難しい劇だったけど、

みんな頑張ってた。

で、学芸会の当日。

俺はとくに緊張もなかった。

気持ちには余裕があって、頭の中でセリフ合わせをしてみた。

セリフは、頭の中でごちゃごちゃになってた。

「ごちゃごちゃって……ずっと覚えてたんでしょう？」

「小学生の学芸会って台本みながらが多いからね。
でも当日は台本なんてないし」

「……そのあと、どうしたのよ？」

「周りのセリフ合わせしてる音を聞いた。
『ここは第2幕のー』とかいう会話も聞き逃すことなく、音を全部聞いて覚えた」

ごちゃごちゃになったセリフはパズルみたいに頭の中で組み立て直した。

でもセリフのパズルはピースが足りなかった。

「足りないピースは、俺の言うセリフってわけ」

「……。

どうなったのよ」

「前後のセリフ、俺の役の立場と合うように紙に自分のセリフを書き出した。

台本通りとはいかないけど、多分だいたい合ってたと思う。

で、それで劇にでた。

結果、劇は失敗」

「失敗！？」

「実質的にはね」

台本と違うセリフを言った俺。

それに周りは戸惑ってしまった。

戸惑ってセリフを忘れたり、棒読みになったり。

妙に締まりのない感じで劇は終わった。

「なによそれ。

セリフが違っただけで慌てるなんて」

「まぁ、みんな小学生だからね。

ペースを乱した俺のせいとはいえ、俺自身もその展開は予想外。
あちゃー、と思った。
んで何がダメだったのか考えた。
答えが出たのは中学生になってからだったけど」

「……その答えは？」

「俺は、努力すればするほど、一生懸命になればなるほど結果が悪くなるらしい。
ありえない話しだよね」

通知表にもよく『努力をしましょう』と書かれたもんだ。
努力したから結果がよくなかったのにな。

「……なんだか私達、真逆なのに似てるわね」

「思った？」

「ええ。
『努力しても報われない人』と『努力したら報われない人』だわ。
ますますムカつくわね」

そう言いながらも表情は苦笑だ。

俺も苦笑で返す。

「アナタ、今の話しだと好きなことでも一生懸命できないんでしょう？」

「まぁ、やるとダメになるからほどほどにね」

「ストレス溜まらないわけ？
少なくとも私は好きなことは思いっきりしてるわ」

「ストレス、は別に……ストレス溜まる要因もないし」

「ムカつく」

互いに表情は軽い。

「七村さんは家でのこと考えるとストレス溜まりそうじゃん。
好きなことして発散させなきゃやってられないでしょ」

「まぁね。
面白そうなことは何だってやるわ。
だからアナタ、私のストレスを発散させなさい」

「へ？」

なんだ唐突に。

どういうことだ。

「なに、殴らせろとでも？」

「そんなこと言ってないでしょ！
アナタ、思ってたよりなかなか面白いわ。
私を楽しませてストレス発散させなさい」

俺が面白いとは、なんか評価がガラリと変わったな。
お嬢様の考えることはわかんねぇわ。

てゆーか、

「七村さん実は俺のこと結構好きでしょ」

「はぁ！？
何言ってるのよ！
勝手な妄想しないでくれる！？」

なるほどわかった、この人ちょっとツンデレなんだ。

それからしばらくギャーギャー言い合いは続いた。

なんか、いつもとあんまり変わんないな。

真逆の似た者　２　－ｓｉｄｅ七村－（前書き）

なんだか気付けば１００話間近です。

急遽、

なんかきりがいいので番外編っぽい感じで記念話書こうかな、と思いつきました。

数えてみたら関連話もちょうど９９話で終わるようです。

なるほど、これは書くっきゃないぜ。

記念の挨拶はまた後日いたします。

前書きで長々と失礼しました。

読んでくださってありがとうございます。

真逆の似た者　２　－ｓｉｄｅ七村－

私には友達と呼べる人はいない。

そんなもの、いらなかった。

高校に入ってからもそれは変わらない。

私の生活は変わらない。

そう思ってた。

実際、違った。

ただ１つ、変わったものがあった。

私が１番じゃなくなった。

最初は偶然だと思った。

たまには２番でもしょうがないと思った。

でも、私が２番じゃなくなることはなかった。

両親からも責められた。

私は1番を恨むようになった。

ちょっと探したらその1番はすぐにみつかった。

1番を観察してみた。

1番は自由だった。

自由に生きてて、それが羨ましくて恨めしかった。

私は1番に接触した。

1番にイライラをぶつけた。

1番は黙って聞いてた。

私は好きなだけイライラをぶつけて、すっきりした。

私はそれを続けた。

1番はいつも一言二言返すだけで、とくに何もしなかった。

今日はいつも以上にイライラして、それを思いっきり1番にぶつけた。

さすがに少しやりすぎたと思った。

1番は私のところにやってきた。

雰囲気に流されるまま話しをした。

イライラもぶつけた。

それから1番の話しを聞いた。

聞きながら考えた。

今まで私が、1番の話しを聞いたことがあったか。

今まで1番が、私の話しを聞かなかったことがあったか。

全て答えはノーだった。

私は、1番である三木佳亜と話しをした。

今じゃなきゃ話しができないと思った。

話してみると、三木佳亜は私と似ていた。

三木佳亜は『努力したら報われない人』だった。

似てるけど真逆だった。

面白かった。

私は、ストレスの発散方法を間違えたと思った。

三木佳亜は私を許さないだろうか。

長い間、イライラをぶつけられて。

私を許してはくれないだろうか。

そんな考えは杞憂だった。

三木佳亜はそんなつまらない人間じゃなかった。

聞こえるか聞こえないか。
ボソッと謝ってみた。

三木佳亜は「別に」と言った。
そもそも私を怒っていないと言った。

私はまだやり直せる。
そう思った。

「ちょっと、どこ行くのよ」

「どこって、教室だけど？」

「あなたバカじゃないの！？
それより先に保健室でしょ！」

「血は止まってるんだけど」

「それは血が止まっただけ、って言うのよ！
バカじゃないの！？」

「ああ、すいませんね。

ツンデレお嬢様」

「誰がツンデレよ！」

ムカつく。

「七村さんホント俺のこと好きだよね」

「……バカじゃないの！？」

私は、まだやり直せる。

「あ、みっきー！
……え！？」

「あれ、みんなまだ帰ってなかったんだ」

保健室に寄ってから教室に戻ってきた。

教室にはまだみんな残ってて、汚れた床や割れたガラスが片付けられてた。

「み、みっきー……？」

「なに？
教室片付けてくれたんだな。
ありがと」

「うん、それはいいんだけど……。
……あの、なんで……？
」

「ああ、うん。
遠慮しないで入ったら？」

「……」

なんで、とは教室の入口にいる七村さんのことだ。
なんで俺と七村さんが一緒に戻ってきてんだ、と言いたいんだろう。

七村さんはおずおずと教室に入ってきた。

「……看板、ダメにして悪かったわ。
ガラスも。
……許してちょうだい」

『……！？』

クラス全体がざわつく。

俺？

俺は、ごめん笑ってる。

「……ちょっと！
なに笑ってるのよ！」

「ご、ごめん……」

笑いは収まらない。

せめて笑い声は抑えようと頑張ってるけど肩が震える。

「アナタ喧嘩売ってる？」

「いやいや、滅相もない」

クラスの空気とか七村さんのオドオドした感じとか、なんかいろいろツボに入ってしまった。

「と、とにかく！
……その、ダメにしといてなんだけど、看板作り手伝うわ。
ちゃんと真面目にやるから」

七村さんの言葉に、クラスメート達は顔を見合わせる。

「……三木は、納得してんのかよ？」

「うん」

もちろん納得済み。

あとはクラスメート達に判断を任せる。

「……まぁ、三木が納得してんなら、いいんじゃねぇ？

リーダーだし」

「そうだね」

「いいと思うよ」

決まったな。

「じゃ、七村さん。
よろしく」

「ええ」

「おおー、手際いいね」

俺がいない間に黒に染まった看板は白になっていた。

木枠から紙を剥がして、新しい紙を張り付けたんだ。

「みっきー、飾りは無事だよ！
みっきーが蹴り飛ばしてたからね」

「そうか」

せめて飾りだけは守っておきたいと思って飾りの入った箱、教室の

隅まで蹴ったんだったな。

「三木さん、構図とかどうする？
前のと同じ？」

「うーん……」

前のと同じってのもちょっとな。

みんなのモチベーションも上がらないだろうし。

「……やっぱりシンプルでいくか」

「ま、まさかマジで文化祭の文字だけとか！？」

「まさか。
シンプルなのは作業のほうだよ」

「作業？」

「そうそう。
人数が増えれば自然と作業は少なくなるだろ」

「……どういうことよ？」

「作業を全校生徒に協力してもらう」

『えぇ！？』

なんだよ、みんなして大声出して。

「とりあえず、文化祭の文字入れしよう。中抜き文字でよろしく」

「色塗らないの？」

「そこを全校生徒に協力してもらうわけ」

「……おおー」

「これはなかなか……」

あれからさらに5日つかって看板出来ました。

中抜きした文化祭の字の中に、全校生徒に好きな色で手形を入れてもらった。

こっちで用意した色は暖色系。

手形を入れたら重ね塗りみたいな感じになって暖かみが増す。

全校生徒のみんなは快く協力してくれた。

もちろん俺達も手形を入れた。

文化祭の文字を塗り終わったら、今度は飾り付け。

全体的に暖色系の色の飾りを選んだ。

それから折り紙のちぎり絵でウチの学校を入れた。

なかなかいいものが出来たと思う。

「写真撮ろう、写真！」

「ほら、並んで並んで！」

看板を壁に掛けて記念撮影が始まった。

「おい三木、なに端っこいってんだよ！
お前は真ん中だろ」

「えー」

俺、真ん中に写るタイプじゃないんだけどな……。

「七村さん、なに外れてんの。
入ってよ」

「私は別に……」

七村さんめちゃめちゃ真面目にやってくれた。
遠慮することないのに。

「七村、早く入れよ！」

「ほら、早く早く」

クラスメートに急かされて、七村さんも並ぶ。

よかったね。

「はい、タイマー押したよ！
みんなポーズ！」

『イェーイ！』

――パシャッ

うん、なかなかいい1枚だ。

こういう写真が卒業式で使われたりするんだな。

「……ありがとう」

ボソッと聞こえた呟き。

聞こえなかったことにしようか迷ったが、

「……いえいえ、ツンデレお嬢様」

「誰がツンデレよ！」

ボソッと呟いただけだけど、聞こえたらしい。

【１００話記念】診断メーカー（前書き）

今回記念話は会話形式ということで、

笑いに『ｗｗ』
反応に『（・ω・）顔文字』

などを使用してます。

そういうのが苦手な方はすみません。

少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

それから後書きにて挨拶をば。

【１００話記念】診断メーカー

佳「はい。
ということで、１００話おめでとー」

香、瀬、隊「「「おめでとー！」」」

佳「いつも『俺の日常はこんな感じ。』を読んでくださってありがとうございます。
読者様あっての１００話です。
本当に感謝しています」

香「めでたいねー」

瀬「だねー」

隊「本当にありがとうございます」

香「ところでみんな、これ知ってる？」

瀬「診断メーカー？」

隊「ツイッターとかにも繋げる診断のやつだね」

香「そうそう。
これおもしろいんだよー」

佳「１００話記念だってのにやることないし、やってみるか」

香「じゃあね……あ、手始めにこれてかどう？」

《あなたの成績予想してみったー》

瀬「いいんじゃない？」

隊「全部、名前入れるだけで診断出来るんだよね」

香「そうだよ。
じゃ、さっそく……三木佳亜、っと」

佳「いきなり俺かよ」

《三木佳亜の成績は【国語】９、【数学】９、【理科】１０、【社会】８、【英語】３、です》

香「え　い　ごｗｗｗｗ」

瀬「他はめちゃくちゃいいのに英語が……ｗ」

佳「英語はわりと事実だ」

香、瀬「「普通に認めた！」」

隊「結構当たってるのかも？」

佳「次、香だ」

《木元香の成績は【国語】１、【数学】７、【理科】５、【社会】２、【英語】０、です》

瀬「え　い　ごｗｗｗｗ」

佳「人のこと言えねぇな」

香「こ、国語はこんなに悪くないもん！」

佳「社会は否定しないのか」

隊「じゃあ次は心ちゃんだね」

《瀬田心の成績は【国語】３【数学】６【理科】５【社会】０【英語】９です》

佳「え　い　ごｗｗｗｗ」

瀬「アタシ英語こんなにできないよ！社会のほうができる！」

佳「それもどうかと」

香「次はさっちゃんだね」

隊「私、数学が苦手だけど……当たるかな？」

《如月沙智の成績は【国語】１０【数学】／（＾ｏ＾）／【理科】３【社会】６【英語】８です》

香「ｗｗｗｗ」

瀬「ｗｗｗｗ」

佳「隊長どんだけ数学苦手なんだ」

隊「こ、こんなに苦手じゃないよ！」

香「診断メーカー、結構当たるかもね」

瀬「当たるかどうかはあれだけど……。でも面白いよ」

佳「他のもやってみようか」

香「じゃあ、これ！」

《悪人ランキング調べたったー》

隊「上位になればなるほど悪人ってことだね」

瀬「三木佳亜、っと」

佳「また俺からか。
次から順番変えるぞ」

《三木佳亜は、悪人ランキング【23位】です！》

瀬「めっちゃ上位だｗｗ」

香「みっきー、極悪人だね」

佳「誰が極悪人だ。
次、次」

《木元香は、悪人ランキング【27位】です！》

佳「俺とたいしてかわんねぇじゃねぇか。
極悪人」

香「そんなことないよ！

みっきーより４位も下だもんね！」

佳「だから僅差だよ」

隊「次いくよー」

《瀬田心は、悪人ランキング【超善人】です！（参考順位１００００万位以下）》

佳、香「「こいつウゼェ！」」

心「事実だ！」

隊「ｗｗｗ」

《如月沙智は、悪人ランキング【３位】です！》

隊「３位……」

香「さらに上がいた！」

瀬「さすがさっちゃん」

佳「あれか、ラスボス的な」

香「次、どれやる？」

佳「これがいいな」

《あなたの『やる気』が見つかったー》

香「みっきー、めんどくさがりだもんね」

佳「はたして、俺のやる気はどこにあるのか。
あ、順番変えるんだった。
まず瀬田からな」

《ずっと行方不明だった瀬田心のやる気。実は、キャバクラで豪遊中です。なんというか、もうダメな感じです》

佳「もうダメらしいぞ」

香「すごい遊んでるね、心のやる気」

瀬「アタシのやる気帰ってきて！」

隊「次は香ちゃんね」

《ずっと行方不明だった木元香のやる気。実は、デート商法にひっ

かかっています。帰ってくるときには、美顔器を持参している可能性が高いです》

香「わ、私のやる気がピンチ！」

佳「よかったな、帰ってくるんだってよ」

瀬「美顔器と一緒に」

隊「美顔器って１０万くらいするのあるよね」

香「帰ってこないで私のやる気！
あ、いや、やる気だけ帰ってきて！」

佳「“だけ”を強調したな」

瀬「次ー」

《ずっと行方不明だった如月沙智のやる気。実は、平成２３年８月末日をもちまして営業を終了いたしました。本当にありがとうございました。》

佳「終わってたｗｗ」

瀬「営業を終了いたしました」

香「本当にありがとうございました」

佳「ファミレスのメニューみたいだな」

隊「……」

《ずっと行方不明だった三木佳亜のやる気。実は依然、行方不明のままです。既に太陽系を飛び出してしまったのかもしれません》

瀬「なるほどｗｗ」

香「納得できるｗｗ」

佳「……（。д。）」

隊「みっきー、顔がｗｗ」

瀬「次どれにしようか」

香「心が選んだら？」

瀬「じゃあ……これにしよ」

《あなたがリアルに言いそうっだー》

香「一番、いきまーす」

《木元香がリアルに言いそうなセリフ「おい、ちょ、待てよ」》

佳「キム○クか」

香「おい、ちょ、待てよ」

隊「いきなり使い所あったね」

瀬「次、さっちゃんで」

《如月沙智がリアルに言いそうなセリフ「ロリコンを恥じたことなど一度もない」》

香「さっちゃん、ロリコンなんだね」

瀬「人は見かけによらないんだよね」

佳「それも個性だ。
恥じる必要なんてない」

隊「違うよ！？
ロリコンじゃないよ！」

《三木佳亜がリアルに言いそうなセリフ「大事なことなので二回言いました（裏声）」》

香「らしいよ」

瀬「裏声だって。出せる？」

佳「あー（裏声）」

香、瀬「「あっさり出した」」

佳「そりゃ俺だって女だから」

隊「次ね」

《瀬田心がリアルに言いそうなセリフ「信じてよ。お願いだから、信じてよ」》

佳「瀬田は何を疑われてんだ」

隊「なんか必死だね」

瀬「いや、別にアタシが言ったわけじゃないからね」

香「またまたー」

瀬「なんでそこ疑う！？
信じてよ、お願いだから信じてよ」

佳「言ったぜ。
今まさに」

隊「次は？」

香「じゃあこれで」

《あなたは誰だっけー》

佳亜「よし、隊長からいくぜ」

《「如月沙智って誰だっけ？」「あのロリコンだよ」「ああ！あのロリコンか！」「そうそう凄くロリコン」》

香「さっちゃんｗｗｗｗ」

瀬「どんだけロリコンｗｗ」

隊「違うよ！？
本当に違うってば！」

佳「照れ隠しですね、わかります」

隊「違うよ！？」

《「三木佳亜って誰だっけ？」「あの悪魔だよ」「ああ！あの悪魔か！」「そうそう凄く悪魔」》

佳「誰が悪魔だ」

香「小悪魔とか？」

瀬「いや、きっとそんな生易しいもんじゃないよ。多分悪魔の頂点だよ」

佳「そんなことないよ。そんなことないよ」

隊「なんで２回……ｗ」

佳「大事なことなので二回言いました（裏声）」

香、瀬「「今言った！！」」

《「木元香って誰だっけ？」「あの変態だよ」「ああ！あの変態か！」「そうそう凄く変態」》

隊「変態ｗ」

瀬「ｗｗｗｗ」

香「私、変態じゃないもん！」

佳「はいはい、ワロスワロス」

≪「瀬田心って誰だっけ？」「あのド変態だよ」「ああ！あのド変態か！」「そうそう凄くド変態」≫

佳「なんなんだよお前らｗｗ」

隊「ｗｗｗｗ」

香「ほら！
私、心より変態じゃないもんね！」

瀬「変態は変態だよ！
てゆーかアタシ変態じゃないから！」

佳「はいはい、ワロスワロス」

隊「次どうしようか？」

佳「あ、次でラストな」

瀬、香「「マジで！？」」

佳「そろそろ文字数足んねぇんだよ」

隊「大人の事情ってやつだね」

香「じゃあラストはこれ！」

《主人公適性度測ったー》

隊「主人公はみっきーでしょ？」

香「でもほら、みっきーってちょっと主人公っぽくないとこあるから」

佳「失礼な」

瀬「いくよー」

《三木佳亜の適性度は【測定不能】です》

香「ちょｗｗ」

瀬「測定不能って良い意味？

悪い意味？ｗ」

隊「多分、悪い意味ｗｗ」

佳「失礼な」

《木元香の適性度は【４５％】です》

佳、瀬、隊「「「微妙」」」」

香「？（´д｀；）」

佳「みんなの心が一つに」

隊「顔がｗｗ」

・瀬田心の適性度は【測定不能】です。

隊「また出た、測定不能ｗｗ」

香「これは正しい判断ｗｗ」

瀬「失礼な」

佳「あれだよ。
瀬田、影うすいから」

瀬「失礼な」

《如月沙智の適性度は【あんたが主人公】です》

隊「！？（´д`）」

瀬「新主人公誕生」

佳「なんということでしょう」

香「次回からは新主人公、さっちゃんが活躍しまーす」

佳、瀬「「イェーイ（拍手）」」

隊「主人公はみっきーでしょ！」

佳「なんだかんだで俺って自分が主人公だって忘れる時があるんだ」

隊「忘れないで！」

香「とりあえず終わったね。
面白かったー」

瀬「だね」

佳「あ、作者から通達。
残り２０００文字しかないって」

瀬、香「「マジか！」」

隊「挨拶しなきゃ」

佳「えっと、１００話記念とはいえやったことは俺達の普段の会話だったわけですが、少しでも楽しめていただけたら嬉しいです。
作者共々、俺達もこれから頑張っていきたいと思います。
ここまで読んでくださってありがとうございました」

香、瀬、隊「「「ありがとうございました！！」」」

佳「今後とも『俺の日常はこんな感じ。』をよろしくお願いします」

香、瀬、隊「「「よろしくお願いします！」」」

佳「さ、帰るぞ」

香「お腹すいたー」

隊「どこか寄って帰ろうか」

瀬「サラダバーあるとこがいいな」

佳「うるさいぞド変態」↑トマト嫌い

瀬「ド変態じゃない！」

佳「はいはい、ワロスワロス」

隊「ｗｗｗｗ」

香「診断メーカーの結果って日替わりらしいよ」

佳「じゃあ、『今日はド変態』だな」

瀬「でも生きる！！」

香「早く行こうよｗｗ」

佳「ん」

隊「なんか最後までグダグダｗｗ」

佳「俺達だからな。
しょうがない」

香「しょうがないしょうがない」

佳「大事なことなので二回言いました（裏声）」

隊「ｗｗｗｗ」

【１００話記念】診断メーカー（後書き）

長ぇ、クソ長ぇ。
長いの嫌いな方すみません。

なんだかあの４人がいろいろやってくれたようです。

佳「作者、作者」

なんだい佳亜ちゃん。

佳「ん」

≪「〇〇（作者名）って誰だっけ？」「あの人見知りだよ」「ああ！あの人見知りか！」「そうそう凄く人見知り」≫

……そ、そんなことないもん！↑

最後までグダグダすみませんでした。

作者のクソ挨拶まで読んでくれてありがとうございます。

まだまだ未熟ですがこれからも頑張ります！
目指せ２００話記念！

今後もよろしくお願いします！
本当にありがとうございました。

むちゃぶり（前書き）

今回から文化祭の準備に入っていきますよー。

多分、文化祭の話より準備の話のほうが長いと予想。
あくまでも予想ですが。

実際の行事も本番より練習のほうがやたらと長いものですね。

文化祭の話と準備の話が同じくらいの話数になるのが理想的です。
頑張ります。

読んでくださってありがとうございます。
前書きで長々と失礼しました。

むちゃぶり

今日の教室は騒がしい。

文化祭が近いせいかな。

『連絡します。
文化祭にて個人で舞台に出演を希望する方は、出演届を生徒会室に持参してください』

放送が流れる。

個人舞台はなかなか面白い。

ダンスとかもいいけど、バンドが面白いかな。

ごちゃごちゃしてるより少人数がいいよ。

ちゃんとみられるし。

「おーい、今の放送聞いたな?」

あ、担任だ。

「クラスの舞台の出演届は明日までの提出だ。
なにをやるか文化委員を中心に決めとけ。
俺は出張だから行くからな」

『はーい』

担任は用件を告げると教室を出ていった。

「というわけで、文化祭でやることを決めるぞ」

ちなみに文化委員はあの団長だ。

そういえば団長って呼んでばっかで名前は言ってなかったな。

団長の名前は眞辺（まなべ）だ。

みんなナベって呼ぶ。

「ナベ面白いことやれよー」

「ナベが主人公の舞台とかどう？」

クラスメートが野次を飛ばす。

ナベは教卓に肘をつきながら片手を振る。

「ふっふっふ、今年はいくつか候補を考えてある」

『おおー』

「候補っていっても『劇』とか『ダンス』とか大まかだから、内容はあとで決めるぞ。
公平に投票で大まかなこと決めよう。
紙配るぞ」

流れ的にわかると思うけど、ナベはクラスのリーダー的存在だ。

それにしても今年はやけに手際いいな。

文化委員3年目の慣れか？

黒板には候補が書かれていく。

紙も全員に配られた。

どれどれ、候補は……。

？劇

？ダンス

？歌（三木）＋なにか（ダンスとか）

「……。
ちょ、ナベ」

手招きでナベを呼ぶ。

「なんだよ」

「なんだよじゃねぇよ。
？ってなんだよ。
なにするんだ」

「お前が歌うんだよ。
ああ、別にお前だけが歌うんじゃないからな。
ただお前のソロパートが多い」

「え、なにそれ、やだ」

なんで舞台で歌わなきゃならん。

ムリムリ。

「まぁまぁ、とりあえず投票だから」

「……」

なんだか納得いかない。

「もうみんな書いたな？
紙は回収してすぐ開票するぞ」

「やだ、ムリムリ！」

結果。

？３票
？６票
？３１票

「決まりだな」

「ダメだってホント！」

「なんでだよ。
お前上手いじゃん。
こうなるのは必然だったんだ」

「てゆーか俺、そもそもあの選択肢に同意した覚えないんだけど」

「ああ、前のカラオケの時に俺が考えたんだ」

ムリだってマジで。

俺、歌ってる途中でも普通に咳とかするもん。

つーかこれ、みんなあれだろ。
悪ふざけ入ってるだろ。

「なぁ、みんな？がいいよな？」

ナベの問いかけにクラスメート達が頷く。

「なんでやねん」

『面白そうだし』

「……うわーん」

「すげぇ棒読みだぞ」

泣き真似でもしてみる。

効果がないのは知ってるが。

なんかクラス全体が盛り上がってきた。
歌の他にはなにをやるかとか、なんの曲がいいかとか。

「……ナベ、俺ホントにできないよ」

「なんでだよ。
上手いんだから自信もてよ」

「お世辞は受け取るが、むちゃぶりは受け取りにくいぜ」

人前に出るの向かないんだよ。
劇でも裏方に回るつもりだったし。

「お前ならきっとできるよ。
盛り上がるぜ？」

「……だって、恥ずかしいじゃん」

組んだ腕を机にのせて、少し顔を埋める。
顔も見ずに話すのは失礼だと思い、視線だけナベに向けた。

俺は知らない。
これが相手からみたら上目遣いだということを。

「……っ、あ、まぁ、別に、歌ばっかやるわけじゃないから、さ。
その、頑張ってくれないか？」

「……決まっちゃったし、うん。
頑張るけど……。
つーかなんで急に挙動不審になってんの？
大丈夫？」

「ああ、うん、大丈夫……」

なんなんだ。

とりあえず、決まったもんはしょうがない。
頑張ろう。

やるのは歌だけじゃないしな。

うーん、せいぜい3分くらいかな。

いろいろ考えてると視線を感じる。

「……なに？」

「え、いや、……」

「お前ホントに大丈夫？」

ナベは体調が悪いのか？

ダンスより劇

「とりあえずやることは決まった。
今度は内容をしっかり決めてくぞ」

引き続きナベが仕切って文化祭の話し合いをする。

「歌以外になにをやるかだけど、提案ある奴いる？」

発言する人はいない。
そりゃそうか。

「ただの舞台じゃつまんないし、劇は？」

テキトーに言ってみる。

実際、俺はダンスより劇のほうがみてて楽しい。

「みっきー、主役やってよ」

「絶対やだ」

香が茶々を入れてくる。

俺は裏方がやりたいんだ。

「まぁ、やることは限られてくるし。
劇でいいか？」

『イェーイ』

あれ、決まっちゃった。
いいのかそれで。

「で、どんな劇にするかだけど……文芸部、台本作り任せた。
内容も決めてくれ」

「はーい」

ウチのクラスに文芸部員は3人。

頑張って。

「じゃあ詳しくは台本できてから決めるってことで。
今日は話し合い終了な。
あ、三木、こっち来い」

「ん？」

なんだなんだ。

「歌だけどな、生演奏にしようかと思うんだよ」

「生演奏って……誰がやんの？」

「俺。
あと他に2人」

「へぇ、演奏できるんだ。
すごいな」

「言っただろ？
俺、バンド組んでるんだって」

そういえばそんな話し聞いた気がする。

「でも生演奏難しくない？
タイミングとか。
そもそも俺ド素人なんだけど」

「まぁ練習すれば大丈夫だろ。
それにお前バンド経験者より上手いって」

「……そう何回もお世辞言われると照れるんだけど」

こうみえて俺は恥ずかしがりなんだ。

上がり症ではないから見た感じではわからないらしいけど。

正直、歌で盛り上がるとは思えない。

あ、でもナベが生演奏するなら盛り上がるかな？

せっかく盛り上がっても俺が台無しにしたら最悪だな。

おもしろい劇だといいな。

盛り上がらなくてもカバーできる感じの。

俺、照明係やりたい。

あれ超かっこいいよね。

台本（前書き）

なんだか最近、佳亜がリア充になってきた。
羨ましいぜちくしょうめ。

読んでくださってありがとうございます。

台本

「台本できたよー」

早。

あれから2日しか経ってないんだけど。

「おー！」

「どれどれ？」

クラスメート達が集まる。

俺も覗いてみた。

台本の内容はこうだ。

対人恐怖症の母親にお使いを頼まれた赤ずきん。

母親の変わりにおばあちゃんの家に行く赤ずきんは森に入る。

その森には3匹の狼が住んでいた。

1匹目は引っ込み思案な毒舌。
2匹目は女好きなナルシスト。
3匹目は苦労性なまとめ役。

そんな狼達に声を掛けられた赤ずきんは、無事におばあちゃんの家へ辿り着けるのか。

……なんかすごいなこれ。

でもおもしろそう。

「台本ができた！
早速、配役決めるぞ」

ナベが仕切る。

配役は、赤ずきん、対人恐怖症の母、おばあちゃん、狼1、狼2、狼3、猟師。

あとは裏方。

俺、照明やりたい。

「三木、お前の役決まってるからな」

「……え？」

は、ちょっと待って。

俺歌やるだけじゃないの？

役もやるの？

えー、えー、えー……。

「まぁ、役から歌に入るためだからな。必然的にそうなるんだけど……って、お前急にしょぼくれてどうした！？」

「ん……俺、照明やりたかった」

「照明か……。お前の役は狼1だから、前半だけでいいなら照明やってみたら？」

「……いいの？」

「お前の役割とか勝手に決めてるしな。

それくらい全然いいよ」

わーい、やったね。

「ありがと。
頑張る」

「……お、おぅ」

「……？」

ナベは目を反らしてこっちを向かない。

覗き込んでもチラッと視線が合っただけで反らされた。

「なんだよ」

「ち、ちょっと今くしゃみ出そうだから……こっちみんなって」

「ふーん……大変だな？」

「ま、まぁな」

なにが大変なのか俺もわかんないけどとりあえず言っておいた。

「太陽みるとくしゃみ出やすくなるんだってよ」

「そ、そうか」
（……鈍感め）
ナベの心の声は、当然ナベにしか聞こえない。

配役

「で、俺の役はなんだっけ？」

「引っ込み思案な毒舌狼」

「セリフあんの？」

「あるけどセリフは作ってない」

「なにそれ？」

「役が自然になるように、セリフはみんなアドリブでいく」

「マジか」

どおりで台本が早く出来るわけだ。

どうしよう、できるかな。

「ナベはなにすんの？」

「俺は苦労性なまとめ役狼」

「ああ、うん。

似合う似合う」

普段からまとめ役だしな。

ちなみに、他の配役も決まった。

赤ずきん、クラスの女子
対人恐怖症の母親、香
おばあちゃん、クラスの女子
狼1、俺
狼2、ナベの友達
狼3、ナベ
猟師、ナベの友達

こんな感じだ。

香は俺が引き込んだ。

母親のセリフ多くないしな。

「さて、時間もないし役者は劇の練習！
他は背景や衣装の準備を頼む！」

衣装あるんだ。

狼……どんな風になるかな。

「役者組はまず赤ずきんと母親の会話場面から。スタート！」

頑張れ香。

衣装（前書き）

今回終わって、次回からは文化祭かなーと思ってます。

劇の全貌は本番で明らかに。

とかいって、まだ全然考えてないのです。

早く続き書かなきゃ。

前書きで失礼しました。

読んでくださってありがとうございます。

衣装

「おおー……」

あれから少し日が経って、文化祭ももう間近だ。

今日は衣装の確認。

「……良い」

「良いよな」

「みんなすごく良いよ！」

クラスメート達が褒めてくれる。

役者メンバーは全員が衣装に着替えた。

サイズぴったり。

俺も狼役の衣装を着てる。

元は猫耳だったものを狼の耳に作り替えたカチューシャと、茶色や黒色が多めに使われたデザインの服。

同じ狼役でも衣装はバラバラだ。

役の性格に合わせた雰囲気がある服にしてあるらしい。

俺は引っ込み思案な毒舌狼役ってことで、茶色より黒が多め。

ダボったくないからちょっと身体が小さく見える。

「みっきー、似合ってるよ！」

「写真撮らせて！」

「やだ」

隊長、写真好きだな……。

ちなみに、ナベは苦労性なまとめ役狼だから大人っぽい感じ。

女好きなナルシスト狼の役はチャラい感じの服だ。

香は対人恐怖症の母親役……とはいえ対人恐怖症は服で表現できないから、暗い色合いの婦人服。

「似合ってるぞ、ナベ」

「そういうお前も似合ってるぞ」

ナベはもともとこういう服が似合うんだろうな。

私服って言ってもおかしくない。

「ナベが体格でかくてよかった。
隠れやすい」

「そ、そうか」

引っ込み思案を表すために俺は常にナベの後ろに隠れる。

練習して毒舌にも慣れてきた……かな？

毒舌にはあんまり期待しないでほしい。

隠れるならもう1人の狼でもいいんだけど……ナルシスト役の後ろはちょっとやだな、と思った。

別にその人がナルシストってわけじゃないんだけどね。

「さぁ、練習も大詰めだぞ！
頑張ろう！」

『おー！』

「おー」

あ、俺だけ遅れた。

開催

『ただいまより、文化祭を開催します』

生徒会長っぽい人が挨拶をすませて、文化祭は始まった。

午前はクラスの舞台演技。

午後からは個人の舞台演技と校内外に店ができるから、どっちも好きなようにみてまわれる。

「ウチのクラスは……午前の部の最後じゃん」

トリじゃん。

すごいね。

偶然だろうけどね。

どうしよう、結局セリフはアドリブなんだけど。

みんな緊張してわけわかんないこと言いかねない。

覚悟しとこう。

『1番、吹奏楽部演奏会です』

最初の演目が始まった。

残念ながらウチの学校は吹奏楽部員が少ない。

技術もそんなに高くはない。

言ってしまえばちょっと暇なんだ。

この時間はこれから始まる他の演目を楽しむために、しっかり休ませてもらおう。

「みっきー、神谷くんがみてるよ」

「ん？」

ホントだ。

龍と目が合った。

なんだろ？

「行ってみる」

「行ってらっしゃーい」

文化祭は体育館で座る場所が自由だ。

列をつくらなくてもいいから、のびのびできる。

だから移動もラク。

「よ。

どうかした？」

俺は四つん這いになってほふく前進で龍のとこまで来た。

「せ、先輩！」

「しー」

今は吹奏楽部が演奏中。

小声で話さなきゃ。

「す、すみません……」

「まぁいいけどさ。
で、こっちみてたみたいだけど？」

「あ、え、えっと……」

いつまでも四つん這いでいるのは邪魔だ。
龍の横に座る。

「せ、先輩……劇に出るんですよね？」

「ああ。
よく知ってるな」

「はい。
それで、あの……僕も劇に出るんです」

「へぇ」

「その……よかったら劇の衣装で一緒に写真撮ってもらえませんか？」

「写真？」

うーん……俺、写真苦手なんだよね。
嫌いじゃないけどさ。

「……だめ、ですか？」

「んー、たこ焼き奢ってくれたらいいよ」

思い出だしな。

たまには写真もいいや。

「あ、ありがとうございます！」

「しー」

「す、すみません……」

あはは。

飲食禁止

「あ、みっきーおかえり」

「ただいま」

行きと同じように四つん這いでほふく前進して戻った。

「みっきー、衣装着替える時にメイクする？」

「しない」

「えー」

「落とすの大変そうじゃん」

化粧は大人になってから。

とは思うけど……めんどくさそう。

でも化粧って社会人のマナーだよな。

社会にでたら化粧するよ。

あ、劇始まった。

タイトルは……『ロミオとジュリエット』だってさ。

誰もが1度はやるよね。

俺も中学の時にやった。

当然、裏方だけど。

さてと、しらばくはゆっくりしよう。

ウチの劇は準備に時間が掛かる。

1時間もしたら教室に戻って準備を始めなきゃならない。

それまでは他クラスの舞台を楽しもう。

「みっきー、飴いる？」

「うん。

ちょーだい」

ちなみに言っとくと、体育館内は飲食禁止だ。

うん、飴美味いね。

待ち人

「おい、そろそろ戻って準備始めるぞ」

ナベが小声で話し掛けてきた。

「ん、もうちょっと。
すぐ行く」

今は龍のクラスが劇やってんだ。

これまでみてから準備始めても遅くはないだろう。

龍のクラスは『あなたの隣にメロス』ってタイトルの劇だ。

『走れメロス』のメロスが現代にやってきました、みたいな話。

最初は現代慣れしてなくてイタイ人なメロスが、わりと活躍して主人公の手助けとかしちゃうらしい。

なかなかおもしろい。

龍はメロスの友達役。

名前は忘れたけど、『走れメロス』でメロスの代わりに城に残った人だ。

いろいろあって最後にはこの人も助かる。

劇中では天の声みたいでメロスに助言する役だった。

龍のクラスの劇終わった。

おもしろかった。

早く教室に行って準備しなきゃね。

ん？

体育館の出入口に人影が。

「……あ」

「……ふん」

誰かと思ったら七村さん。

「……」

「……」

「……どうかした？」

何か用があるんだと思ったけど、話し出す気配がない。

こっちから切り出した。

「……アナタのクラス、赤ずきんの劇やるんでしょ？」

「うん、まぁ」

「アナタは何の役やるのよ」

「狼役」

『引っ込み思案な毒舌』というのはあえて省いた。

「特別にみてあげるわ」

「はぁ、そりゃどうも」

「だから……これ、買いに来なさいよ」

「これ？」

渡されたのはドーナツの食券が2枚。

「七村さんのクラス、出店するんだ」

「そうよ。
お金を出さなくてもその食券で引き換えできるわ」

「へぇ、ありがと」

せっかくくれたんだ。
もらっておく。

「……絶対来なさいよ！」

「うん、行く行く」

七村さんは体育館に入っていった。

食券渡すために待っててくれたのかな。

ドーナツ、楽しみ。

準備中

「小道具、確認して！」

「おい、衣装の飾りどこいった！？」

教室に戻ると、みんな準備におわれてバタバタしてた。

「みっきー！
みっきーも早く着替えなきゃ！」

「うん。
やって」

香に髪とか弄ってもらう。

狼の耳つけてもらったりとか。

「さっきみてきたんだけどね、おもしろそうな出店とかいっぱいあったよ。
射的とかあってね。
午後からまわろうね！」

「ん」

喋りながらも手を止めない香。
俺はなるべく頭を動かさないようにして衣装に着替える。

「はい、できた！」

「ありがと」

俺の準備が早めに終わるのはわかりきってた。
だって化粧しないから。

「三木、お前は化粧しないんだな」

ナベが話し掛けてきた。

ナベも着替えが終わったらしい。

「うん、落とすのめんどくさいから」

「せっかくの文化祭なのに？」

「んー、別に。

社会人になったら嫌でも化粧しなきゃいけないしな」

「ふーん……なぁ、今暇だろ？」

「ん、まぁ」

「写真撮ろうぜ」

写真か。

どうせ龍と撮るんだし、今日ぐらいはいいかな。

「いいよ」

「んじゃ、デジカメで……。
ほら、もっと寄れよ」

ナベは片手でカメラを持って俺達に2人にレンズを向ける。

よく片手で撮れるよな。

俺がやったら絶対上手くいかない。

「はい、チーズ」

「うわ、ミスった。
目閉じちゃった」

「じゃ、もう1枚。
はい、チーズ」

「ん、さんきゅ」

写真撮られ慣れてないからフラッシュは苦手だ。

「劇、頑張ろうな」

「ん、頑張ろう」

開幕

こんにちは。

俺は今、舞台裏にいます。

「おい、早く背景！」

「配置は！？」

「ちょっと、この小道具こっちじゃないって！」

かろうじてみんな小声だけど、バタバタです。

今回の劇は第六幕までである。

時間はだいたい３０分。

なかなか長い。

俺がでるのは第二、第五、第六幕。

第三、第四幕のあたりは照明をやらせてもらう。

「おい、第二幕の背景も準備しとけ！」

「木の配置違うよ！」

なんかもう本当にバッタバタだな。

裏方のみんなお疲れさま。

「さぁ、いよいよ開幕だ。
セリフ全部がアドリブとはいえ、きっとなんとかなる。
自然な感じが出せるようにな。
そのためのアドリブなんだから」

正直、不安だ。

だって全部アドリブだもんよ。

第二幕までは絶対みんなテンパるよね。

後半は多分大丈夫だと思うけど。

まぁ、なにかあったら誰かしらフォローするんじゃないかな。

「それじゃ、頑張ろう！」

『おー！』

よし、いよいよだ。

楽しい劇になったらいいな。

第一幕　－ｓｉｄｅ龍斗－

いよいよ始まった……先輩のクラスの劇。
タイトルは『ツッコミたくなる赤ずきん』

幕が上がる。

舞台の右端には小屋の背景があって、床には草らしき物が置いてある。

小屋の外が第一幕の場面らしい。

舞台の真ん中には草に囲まれて1人の女の子。

赤いずきんをしてる。
この人が赤いずきんだと一目でわかる。

「あー、だりぃ。
いい天気すぎてむしろ暑いんですけど」

……！？

な、なんだか口調が童話っぽくない赤ずきんだ。

背景の小屋の扉の絵が開いた。
あれ開くんだ……作り込んであるなぁ。

「……あ、赤ずきん、赤ずきん。
こっちに来てちょうだい、早く」

「お母さん、出てきなよ。
今誰もいないよ」

「今はいなくても誰か来るかもしれないでしょ！？
お母さん、人の目が怖いんだから！」

ええええ、なんかお母さん対人恐怖症！？

「で、なにか用？」

「赤ずきん、おばあちゃんの家に行ってきてちょうだい」

「え、めんどくさい」

「お母さんはおばあちゃんの目が見られないの！
人と1時間話してるだけで発狂しちゃうんだから！」

ええええ、このお母さん結構重度の対人恐怖症だ！

「目が見られないって、自分の親でしょ！？
今までどうやって生きてきたの！？」

「長年こんなだとね、足元さえ見てれば難なく生活できるようになるのよ」

「なんか嫌な能力……」

「それより、おばあちゃんにこれを持っていってちょうだい。」

「なにこれ？」

「おばあちゃんが欲しいって言ったのよ」

「いや、だからなにこれ」

「携帯電話」

「携帯電話！？
アタシも持ってないのに！」

携帯電話！？
なんてもの欲しがるんだ、おばあちゃん……。

「だから行ってきてちょうだい。
おばあちゃん待ってるわよ」

「わかったよ。
行ってきます」

あ、お母さん赤ずきんに荷物渡すために一瞬でてきた。
対人恐怖症だからすぐ引っ込んだけど。

赤ずきんはめんどくさそうに舞台そでに歩いていった。

幕が降りる。

これで第一幕終了か。

……なんだろう、心の中でだけどツッコミせずにはいられない。
多分この体育館にいる全員がそうなんだろうな……。

でも結構おもしろい。

続きが楽しみだ。

第二幕　－ｓｉｄｅ香－（前書き）

リアルではもう１２月ですね。
小説内では多分１１月初頭くらいですかね。

これからさらに寒さが増すでしょう。
風邪をひかないようお気をつけください。

そして、最近少々忙しいので内容がペラッとしてます。
もうちょっとしっかり書きたいなぁ、と思う今日この頃。

長々と失礼しました。

読んでくださってありがとうございます。

第二幕　ー side 香ー

はー、緊張した。

対人恐怖症っぽくなったかな……？

自分の役を終えた私。

あとは普通に劇を楽しめる。

次は第二幕。

みっきーが登場する場面。

あ、写真撮らなきゃ！

私はカメラを持って体育館の裏口から外に出た。

外から回って正面入口から体育館に入って、客席からみえないように後ろのほうでカメラを構える。

幕が上がった。

舞台には3匹の狼。

そのうちの1人はみっきーだ。

「はぁ……」

「なんだよ、ため息なんかついて」

狼役の3人が演技をはじめる。

「いや、鏡に映る自分にみとれて……」

「死ねばいいのに」

そうだった、みっきー毒舌な狼役だった。
頑張れみっきー！

「ひどいなぁ。
大丈夫、君の顔も美しいよ！
僕の次にね！」

「苦しんで死ねばいいのに」

「まぁまぁ」

これ全部アドリブなんだから結構すごいよね。

「ん？
おい、誰かが森に入ったみたいだぞ」

「わかった。
俺、留守番しとく」

「お前も行くんだよ。
弱肉強食の中で引っ込み思案じゃ生きてけないだろ」

「……」

「ほら行くぞ」

「……行きたくなーい」

「普段は毒舌のくせに……」

みっきーはズルズルと引きずられるように歩く。

「僕は絶対行かなきゃね！
森に入った人が迷わないよう手助けするのが僕達の役目だからね！」

「お前は女性が好きなだけだろ」

「そんなの当たり前だろう！
まさか君、男性が好きなの？」

「ちょっと黙ろうか」

……まとめ役って大変だね。
演技だけど

「さぁ行こう。
僕の後ろに隠れていいからね！」

「やだ。
ナルシストがうつる。
触るな」

「なるほど、それが照れ隠しだね！」

「もういいから行くぞ！」

まとめ役の狼が残りの狼を引きずっていった。

これで第二幕は終わり。
幕が降りる。

おもしろかった。

次の第三幕も楽しみ。

第三幕　－ｓｉｄｅ七村－

文化祭なんて、と思ってたけど……劇、なかなかおもしろいじゃない。

背景や小道具も手作りにしては凝ってると思うわ。

私は客席の一番前を陣取って劇をみる。

この私が劇をみてあげてるんだもの。

一番前以外ありえないわ。

幕が上がる。

第三幕のはじまりね。

舞台は背景もなくシンプル。

真ん中にダンボールを組み立てた簡易ベッドが置いてあって誰かが寝てる。

照明は落とされてベッドだけをスポットライトが照らす。

寝てる人は起き上がった。

「あはははは、暇ぁ！！」

……！？

え、誰……？

「まったく老後は退屈でしょうがないね！
通信機器も満足にないなんて、この御時世にどうかしてるわ！
せめて携帯くらいないとね！」

老後って……まさか、この人がおばあちゃん？

なんてテンションの高い……。

「やっぱり時代はスマホだね！
流行は追わないとね！
そういえば最近森に悪い奴がいると聞くけどどうなんだろうね！
ところでなんで私はベッドで寝てるんだろうね！
別に体調が悪いわけでもないのにね！」

なんか……いや、もういいわ。

これはこういう人なのよ。

「私がウザいと思ったそこのアナタ、不幸になるかもね！
恨まないでね！
具体的に言うと、トイレで紙がなかったり消しゴムなくしちゃったりするかもね！
じゃ、おやすみ！」

なんでそんな微妙な不幸に……。

そして結局寝るのね。

照明が落ちて幕が降りる。

これで第三幕終了ね。

このおばあちゃん、なにがしたかったのかしら……。

第四幕　－ｓｉｄｅ柳田－

「はぁ、めんどくさい……。
なんでアタシがおばあちゃんに携帯届けなくちゃいけないのよ。
しかもスマホ。
アタシも持ってないのにっ」

こんにちは、柳田です。
お久しぶりですね。

今、佳亜先輩のクラスの劇をみてます。
ツッコミどころ満載です。

ちょうど第四幕がはじまったとこですよ。

「ちょっと、そこのお嬢さん！」

「は？
おじさん誰？」

「一緒にお茶していかないかい！？」

「嫌ですけど」

「まぁ冗談だけどね！」

バッサリ。

てゆーか、このノリ誰かに似てるような……？

「……なんか用ですか？」

「うん、ちょっとね！
最近、この辺りに悪い狼が出るから気をつけて！」

「悪くない狼がいるんですか」

「ちなみにその狼、３匹いるからね！」

「多いわ！
あ、でも狼って普通に集団行動か……」

「じゃ、気をつけてね！
なにかあったら私がこの銃で退治してあげるからね！」

「銃刀法違反じゃないの？」

「私は善良な猟師さんだからね！
これも猟銃だから！」

「あ、そうですか。
じゃあさようなら」

「うん、さようなら！
またね！」

「できれば二度と会いたくない」

幕が降りて第四幕終了です。

役者さんのセリフが聞こえにくくなってしまうのでここでは除外してますが、実は体育館内はツッコミの嵐です。

みんなツッコミ好きですね。

あちこちからツッコミが飛んできてます。

思い出しましたがこの猟師さん、あのおばあちゃんと喋り方が似てますね。

第五幕　－ｓｉｄｅ瀬田－

アタシは裏方の仕事だったから劇は客席でみる。
同じ裏方のさっちゃんも一緒に。

ツッコミがわいわい飛んでくるから劇は大成功だ。

あ、第五幕がはじまった。

「変な人に会っちゃったなぁ。
あー、やだやだ」

「ちょっと、そこのお嬢さん！
僕と一緒にお茶しませ「またか！」ええ！？」
「つーか、あんたたち誰！？」

「狼さんです☆」

「うぜぇ！
星うぜぇ！」

たしかにうぜぇ。

「お前ちょっと黙ってろ。
えーと、俺達はこの森を管理してる者だ」

「管理？
狼が？
てゆーかさっき『悪い狼に気をつけろ』って言われたんだけど」

「大丈夫、僕達は良い狼だから。
安心して☆」

「語尾に☆がつく限り安心できない」

そりゃそうだ。

「『狼に気をつけろ』ってのは誰に言われた？」

「猟師の人」

「ふーん……まぁマジな話、ここには悪い狼なんてのはいないんだ」

「ああ、うん。
それはなんとなくわかる。
あんたたちみたいな狼ならアタシでも勝てそうだし。
……ところで、そこに隠れてるのは誰？」

「あー、気にしないでくれ。

こいつは引っ込み思案で人前に出るのが苦手なんだ」

「……それは引っ込み思案なの？
まぁいいけど」

実はみっきー、歌のことを考慮してセリフはあんまりない。

ウチのクラスの劇の時間は２０分だったはずなんだけど、誰かが間違えて４０分にしたらしい。

だから最初は劇の合間でみっきーの歌を入れるはずだったんだけど予定変更。

劇と歌は別々にやることになった。

ちなみに劇と歌の関連はなし。

「ああっ、大変だ！」

「なんだよ」

「鏡を忘れてきちゃったよ！
僕は5分に一度鏡で自分を見なきゃ気がすまないのに！」

「うぜぇ」

「鏡の破片が刺さって死ねばいいのに。
なぁ、その猟師どうする？」

あ、みっきー喋った。

「とりあえずは様子見だな」

「なんなのよ？
様子見ってなにが？」

「その猟師はお嬢さんに『悪い狼がいる』って言ったんでしょ？
それが嘘ってことは、その猟師が悪い人じゃね？
って話しだよ」

「そういうことだ。
あんた、気をつけろよな」

「わかった」

「それじゃあお嬢さん！
僕と一緒にお茶に「誰が行くか！」どうしてだい！
照れなくてもいいんだよ！？」

「1人で行ってこい。
んで口のなか大火傷してしばらく喋れなくなれ」

「大火傷する茶って逆にすごいな」

「じゃ、アタシ行くから！」

第五幕終了。

あの狼、なかなかいい味だしてるね。

次でラストだ。

第六幕が終わったら全員で舞台に出て歌わなきゃいけない。

そろそろ舞台裏で待機しなくちゃ。

第六幕　－ｓｉｄｅ隊長－

いよいよ第六幕。

これが終わったら全員の出番だから、劇みながら準備しとかなきゃ。

「はぁ、やっとついた。
なんか疲れたな……。
おばあちゃん、こんにちはー」

「おお、よく来たね！
上がってゆっくりしてね！」

「……どうしよう、さらに疲れそう」

「早く閉めてね！
おばあちゃんは冷え性だからね！」

「あ、うん」

「ところで今日は携帯を持ってきてくれたのかね！」

「よくわかったね。
はい、スマホ」

「やったね！
これでおばあちゃんも流行にのったね！」

「そ、そうだね。
じゃあアタシそろそろ帰るから……」

「まだ来たばっかりだからゆっくりしなさいね！」

「……うん」

私達は舞台に出る準備を終えた。

ここからはゆっくり劇をみられる。

「たのもー！」

「なに！？
誰！？
……あっ、さっきの猟師！」

「こんにちはお嬢さん！
さぁ、さっそくだけどお姉ちゃんに用があるよ！」

おばあちゃんに猟銃を向ける猟師さん。

「お姉ちゃんって……」

「私達は姉弟だからね！

私は弟だからね！」

舞台端から狼3人が出てきた

「なんか騒がしいな……ってそこの奴ら、なにしてる！？」

「あっ、さっきの狼！」

「お嬢さん！
また会えてうれしいよ！」

「うぜぇ！」

「女の子にフラレたショックで死ねばいいのに」

「今はそんなことよりそこの男だろ！
おい、お前が噂の猟師だな。
なにやってんだ」

「私はね！
……いや、やめよう。
わざわざこの口調で話すこともない」

「急に口調変わった！？」

「私はもともと普通の口調なのだ！
誰のせいで、こんな変な口調にされたと思う！？

私の姉のせいだ！」

「おばあちゃん？」

「そうだ！
自分と同じ口調で喋らなければ思いっきり殴られるのだ！
私にとって姉の拳は恐怖以外のなにものでもない！
いっそ殺してくれとさえ思った！」

「そ、それは酷い……」

「この口調のせいで、私の人生は最悪だった！
ウザがられ、友達もできず、ひたすら孤独な人生だった！
それもこれも、全て姉のせいだ！」

「なんだろう、なんかこの人が悪いだったはずなのに可哀想に思えてきた」

「奇遇だな、俺もだよ」

「アタシも」

「僕も」

「この姉を殺して僕も死ぬ！」

「そんなことしても何にもならないぞ！」

「なるさ！
嫌な人生を振り返ることなく気分よく死ねる！」

「甘いね！」

「お、おばあちゃん！？」

今まで黙ってたおばあちゃんがベッドから猟師にダイブした。

「な、なにを！」

「これでこの猟銃は使えないね！」

「ハッ！」

猟銃は弾が出るところがグニャリと曲げられた。
おばあちゃんの腕力って……。

「過ぎたことをウジウジ言う男はモテないね！
お前がモテなかったのはおばあちゃんのせいじゃないね！」

「くっ……」

「てゆーか癖が嫌ならおばあちゃんと別居したときに直せばよかっ

たね！
それだけの話しね！」

「まぁたしかに」

「ウチは長寿の家系だからね！
まだまだ長い残りの人生を楽しみなさいね！」

「お、お姉ちゃん……。
こ、この恨みいつか絶対晴らしてやるからな！
お中元に凄くカロリー高い油とか送ってやるからな！」

「なんて心のこもった仕返し……」

「というより恨んでる相手にお中元送るなんて考えられないよ！
僕には理解できないな！」

「ある意味愛情の裏返しなんだろ。
あとお前の声響いてうるさい」

「それは僕の声は君だけが聞いていたいという愛情の裏返しかい？」

「自分で自分の声聞いて鼓膜が破れればいいのに」

「ところであんたたち森番の狼だね！
こんなとこまでご苦労だね！」

「ああ、まぁ仕事だから」

「なんとなく世話になったから今日はここに泊まっていくといいね！赤ずきんもね！」

『え……』

「遠慮しなくていいからね！」

『……』

《そんなこんなで狼3人と赤ずきんはおばあちゃんの家に泊まりましたとさ。

一方、その頃……》

一瞬照明が落ちてナレーターが喋る。

「すみませーん。
お届けものでーす。
すみませーん！」

「あ、赤ずきん～。
早く帰ってきて～」

《お母さんは赤ずきんの帰りをひたすら待っていましたとさ。
めでたしめでたし》

全然めでたくない……。

でも客席からけっこう拍手が聞こえる。

劇は大成功かな。

とりあえず、これで劇は終了。

一度役者組が舞台裏に引っ込んでから、今度は裏方も含めてみんなで舞台に出る。

次で私達の出番はラストだ。

頑張ろう。

舞台裏

やっと終わったよ、劇。
舞台はまだだけど。

「これでラストだ。
最後で完璧にキメるぞ」

ナベが小声で話す。

完璧……に、きまればいいな。

だってほとんど俺次第だし……。

流れ的には歌の１番は俺だけで歌って、２番からは全員で歌う。

間違いでクラスの舞台担当時間が増えた分、こういう形になった。

誰だよ、２０分を４０分に書き間違えた奴……。

まぁぐちぐち言ってもしょうがない。
やると決めたからにはちゃんとやる。

で、問題は俺が歌の途中で咳しちゃうことだ。
これは……いいや。
どうにでもなれ。

咳も空気よんで出てこないかもしれないしな。
むしろそうであってくれ。

ちなみに歌うのはアップテンポの応援歌っぽい歌。
『泣ける名曲』とかに入ってる曲らしいが、曲聴いて泣くのは切羽詰まった人くらいだろう。

選んだ理由は、それっぽいから。

文化祭みたいな？
思い出みたいな？

そんな感じの雰囲気が漂ってればなんでもいい。

「おい、出るぞ。
マイクは準備できたか？」

「ん」

ナベに返事をして、マイクをたしかめた。

うん、大丈夫。

さて、最後の文化祭だしな。

もうひと頑張りするか。

閉幕　－ｓｉｄｅナベ－

『どーも、お疲れさまでーす』

マイクで挨拶しつつ三木が舞台に出る。

客席は歓声をあげつつ、これからなにをするのかという疑問が浮かんでるようだ。

『実はですね、今回のうちのクラスの舞台担当時間は２０分だったんです。

ところがどっかの誰かさんがミスって４０分にしちゃったんですね。で、尺が足りないんでテキトーになんやかんやしたいと思います』

おいいいいい！！

なにぶっちゃけてんの！？

やっぱこいつに挨拶任せるべきじゃなかったか……。

……いや、意外にウケてる。

これはこれでありか。

『じゃ、尺のために歌でも歌おうと思います。
すいませんね、これまた尺のために歌の1番は俺だけで歌います。
ご了承を。
はい、曲スタート』

曲がながれる。

……おお。

やっぱ上手ぇ。
さすがだ。

客席も予想外の上手さにどよめく。

そうだよな、こいつは本来人前に出るべき……

『げほっ。
ん、失礼』

おいいいいい!!

なに咳してんの！？

いや、咳するだろうとは思ってたけどな。

練習のときも咳しなかった日はなかった。

んで、咳しても平然と歌い始めるお前の根性がすげぇよ。

お、サビも終わったな。

クラスメート全員が歌い始める。

なんか長く感じたな……今年の劇。

練習時間も含め、この舞台まで。

長かったけど、あっという間だった気もする……複雑だな。

チラッと三木に視線を向ける。

今回の文化祭ではっきりとわかったこともある。

……俺、三木が好きだ。

約3年間同じクラスで、冗談言ったりしながら過ごしてきて、ずっと好意はあったんだと思う。

その好意がはっきりした。

世間では草食系男子ってのが流行ってるらしいな。

俺は自覚したら結構ぐいぐいアピールするタイプだから逆だけど。

でも相手は三木。

一筋縄じゃいかないな。

それでも頑張るけど。

そろそろ曲が終わる。

『……ふぅ。
なんとか尺が足りたみたいだ。
ありがとー』

客席は歓声でいっぱいだ。

……ライバルは多い気がする。

少なくはないだろう。

特にあいつ……三木の幼なじみだったか？

あいつは間違いなく三木に対して好意を抱いてる。

一番要注意だな。

拍手に包まれるなか、舞台の幕が降りる。

「おぅ、お疲れ。
歌よかったぞ」

「ん、ナベもお疲れ。
お世辞はありがたく受け取るよ」

お世辞じゃないんだけどな……。

なんて言っても無駄なのは知ってる。

どんな風にアタックしたらこいつは気付くだろう。

しっかり考えなきゃな。

達成感（前書き）

マジでやっと終わったよ、劇。

第三幕くらいからこんな長いの書くもんじゃないなぁとか思いました。

それにしても最近忙しい。

更新は続けてるものの、夜遅くになってしまってます。
すみません。

ついでに、リアルタイムでは最近とても寒いですね。
マイコプラズマが流行してるとか。

体調にはお気をつけくださいませ。

長々と失礼しました。
読んでくださってありがとうございます。

達成感

やー、終わった終わった。

結局歌の途中で咳しちゃったけど。

ある意味いい思い出だな。

達成感。

俺は舞台裏から外に出る。

衣装を着替えたかった。

「先輩！！」

……ん？

誰かがこっちに走ってくる。

「あ、龍」

「先輩、さっきの舞台すごくよかったですよ！」

「マジ？
ありがと」

そういえば一緒に写真を撮るとかって話ししてたっけ。

「それで……あの、先輩……」

「うん、写真撮ろうか」

「はい！！」

誰かに撮ってもらうのはなんとなく恥ずかしい。

自分で撮るか。

「はい、寄って寄って」

「あ、はい……」

龍からデジカメを受け取って自分達にレンズを向けるように持つ。

当然、龍は俺より身長がでかい。

頭一個分かな？

一緒に写真映るには邪魔な身長差だ。

「ちょっと肩借りるぞ」

「え、あ、」

「はい、チーズ」

龍の肩に腕を回してピースする。

安定して一番写真撮りやすい。

「どれどれ……おー、なかなかよく撮れてんじゃん？
なぁ……て、お前どうしたの」

「あ……いえ、なにも」

龍の顔をみると赤かった。

「そ、それより！
もうお昼ですし、約束通りたこ焼き奢りますよ」

あぶね、忘れてた。

わーい、やったね。

「あ、俺一回教室戻って着替えてくるわ。ちょっと待ってて」

「はい」

さっさと着替えてこよ。

自重　－ｓｉｄｅ龍－

……恥ずかしい。

肩組まれたくらいでこんな……。

自分が情けない。

あ、そもそも僕が写真撮ればよかったんだ……。

体育館裏で一人頭を抱える僕。

そりゃ、写真も撮りたかったけど……正直これは口実。

本当は文化祭を一緒にまわらないか誘いたかった。

けど普通、カップルでもない限りは友達と一緒にだよな……。

こればっかりはさすがに自重する。

少しだけ一緒にいられるし、写真も撮れたし……ラッキーだと思おう。

……うわぁぁぁ！

なんか僕すごい女々しくないか！？

それにしても、先輩の歌よかったなぁ。

歌が上手いのは昔から知ってたけど、さらに上手くなってた。

ちなみに、僕は音痴だ。

歌が上手い人がうらやましくてしかたがない。

どちらかというと歌が上手い方が得な気がする。

でも先輩は人前に出るのを恥ずかしがる。

なのによく舞台に出たよな……。

「お待たせ」

「うわぁ！？
あ、先輩……」

「なんだよ人の顔みてうわぁとか」

ごめんなさい。
急に話し掛けられてびっくりしたんです。
今まさに先輩のことを考えてたので。

「あ、そういえば先輩、よく舞台に出ましたね。
いつもは恥ずかしがるのに」

「あー、なんか多数決で決まっちゃって。
まぁ最後の文化祭だし、たまにはいいかと思ってな」

何気ない言葉が僕の胸に刺さる。

最後……そうだ、先輩にとっては最後なんだ。

文化祭も、高校生も。

あと数ヵ月で先輩は学校を卒業するんだ。

進学しない先輩にとって、今年が最後の学生生活なんだ。

先輩が学生じゃなくなったら、僕が話しをできる機会もグンと減る。

うわ、なんか急に悲しくなってきた……。

「じゃ、いこうか」

「……はい」

「どうかした？」

「いえ、行きましょう。
早く行かないとすぐ行列ができますね」

「だな」

今は１０月下旬、ほとんど１１月。

あと５ヵ月あるかないか。

ただの幼なじみで終わりたくないなら、頑張れ僕！！

……でも、文化祭では自重する。

先輩だって友達付き合いがあるからね。

たこ焼き

「んー、うまーい」
たこ焼き買ってもらったぜ。
うまーい。

「よかったです」

「ん」

「ムグッ！？
あ、たこ焼き……」

龍にもお裾分け。

つまようじは1本しかないけど、口付けないように食べてるから大丈夫。

（ハッ！
これは所謂『あーん』ってやつじゃないか……！？
うれしい……けど！
けど、周りの視線が……）

「ほい、もう1つ。
10個入りだからちょうど半分こね」

「あ、え、」

「ほれ」

「ムグッ!?
で、でも先輩のために買ったんですから……先輩食べてくださいよ」

「食べてるよ。
けど俺だけじゃ食べきれないもん」

1個がすげぇデカイんだよこのたこ焼き。
普通サイズならラクラク食べられるけど、こんなのは無理だ。

「てゆーか先輩!
男相手に同じつまようじはダメですよ!
他の人にもこんな風にしてるんですか!?」

「いや、さすがにしないって。
それにつまようじに口付けてないよ」

俺だって常識くらいあるから。

気を許してない相手にそんなことしない。

「現にしてるじゃないですか」

「龍だったら別によくね？
って感覚が未だに抜けないんだよね」

「……」
（そ、それはいい意味！？
いやでも、昔から幼なじみだからってことも……）

昔は普通にジュースも回し飲みしたり、同じアイスつついたりしてたからな。

そこそこ大人に成長した今じゃやらないけど。

でも昔の感覚が残ってるから『龍なら別によくね？』ってのが結構ある気がする。

「はー、ごちそうさま」

食べ終わったたこ焼きの容器はそれ専用のビニール袋に戻しておく。

「龍はこれからどうすんの？」

「これから……とりあえず教室に戻ろうかと」

「そっか。
俺ちょっと行くとこあるんだ。
たこ焼きありがと」

「あ、はい」

「悪いな。
じゃ、またな」

あれだよ、七村さんのとこ行かなきゃ。

教室で待ってる香達も気になるけど、七村さんのとこには1人で行かなきゃなぁと思ってた。

理由はないけどなんとなく。

ドーナツの引換券も1人分しかないしね。

地図

さて、出店のある場所に来てはみたものの……ドーナツ屋さんがわからん。

どこだよドーナツ屋さん。

出店多すぎんだよ。

俺は制服のポケットから眼鏡ケースを取り出した。

相当目が悪い俺には半径1メートル以内の人の顔以外認識できない。

裸眼でクリアにはっきり見えるのは手が届く範囲だけだ。

眼鏡をかけて、周りを見回しながら歩く。

お、会場の地図発見。

どれどれ、ドーナツ屋さんは……あー、東側か。

レッツゴー。

さて、東側に来たが……どこに行っても出店は多いな。

えーと、右側の手前から5番目の店は……あったあった。

ドーナツ屋さんみっけ。

あ、七村さん働いてる。

「……あ！！
き、来たわね！？」

「うん。
お疲れさま」

「引換券はちゃんと持ってきたんでしょうね？」

「ん、ほら」

引換券を見せる。

「ちょっと待ってなさい！
私が仕上げてあげるわ！」

仕上げってことはお客さんの注文がきてから揚げるのか。

なるほど、美味しく食べられる。

待ち人来る

「ほらっ、出来たわよ。
味わって食べなさいよね」

「ありがと」

美味しそうな匂いを漂わせるドーナツの入った袋を受け取った。

ドーナツは5個入り。

せっかくだからここで1ついただく。

「いただきます。
はい、七村さんも」

「え……」

ドーナツを1つ七村さんにもお裾分け。

「な、なによ。
毒見なんてさせなくても、毒なんか入ってないわよ」

「違うって。
一緒に食べようよ」

「アナタのために引換券とっといたのよ？
あっ、別にアナタのためじゃないけど！！
……アナタが食べなさいよ」

「食べるよ。
でも1人だけで食べるのは心苦しい」

どうせなら作ってくれた人と食べたいからね。

「……いただきます」

七村さんにドーナツを手渡してから、俺もドーナツを食べる。

「んー、うまーい」

「本当に？」

「本当本当」

「ふーん……あ、当たり前じゃない！
わざわざ私が作ったんだから！」

「そりゃどうも」

他のドーナツに比べると、俺の手の中にあるこれはちょっと不格好。
どうやら七村さんが生地から作ったらしいね。

正直、格好はどうでもいい。
腹に入れば同じだし。

美味いからまったく問題なし。

「ありがと、七村さん。
ごちそうさま」

「……」

まだ人との関わりが深いとはいえない七村さんには、上手い返答は見つからないだろう。

今はそれでいい。
わかってるから無言でも構わない。

いずれは慣れるだろうから。

それから少しの時間だけど、七村さんと話してから別れた。

ドーナツの残りは3個。

ちょうどいい。

あいつら3人に分けてやろう。

投票

文化祭の閉会式。

マジな話し、これいらないと思うんだよね。

なんか盛り下がるじゃん？

みんな疲れも入ってるせいで妙に厳かだ。

そんな中、閉会式で唯一盛り上がる時がある。

文化祭の人気投票だ。

舞台、出店、展示、などなど文化祭に関わった中で気に入ったクラスに投票する。

投票はもう終わって開票も済んでるから、あとは結果を聞くだけだ。

ベスト3までが発表される。

ちなみに、3位は龍のクラスだった。

2位はあのたこ焼き販売してたクラス。

相当売り上げ伸びたらしいよ。

さて、1位は？

『それでは、発表いたします。
1位のクラスは、……一味違う赤ずきんを見せてくださったクラスです！』

……わぉ。
ウチか。
びっくりだ。

会場は一気に盛り上がる。

『えーと、投票者のコメントをいくつかあげますね。
《すごくおもしろかったです！　それに歌最高！　ライブ感覚で楽しめました！》
《ナルシストがいい味だしてましたね～。　てゆーか、三木さん歌上手かったんですね！》
などなど、いくつかありますよー。
いやー、三木さんの上手さには驚きましたねー』

……は、恥ずかしい。
なんか今更だけど恥ずかしい。
なんだかんだで俺、こんな大人数の前で歌っちゃったんだよな……。
恥ずかしい……。

「恥ずかしがるなよ」

「いや、なんか……。
ナベも生演奏してたじゃん。
あ、バンドで慣れるから恥ずかしくはないか……」

そもそもナベはクラスの代表みたいなもんだから人前で何かやるのは慣れたもんか。

「お前さ、マジでバンド入らねぇ？」

「ヤダよ、めんどくさい。
もっと上手い奴いるだろ」

「お前がいいんだよ」

「なにそれ、口説き文句？」

「……」

冗談めかして言いながらナベの顔をみるとナベは微妙な表情をしてた。

え？

なんか予想外の反応なんですけど。

「……しょうがねぇなぁ。
じゃあまたカラオケ行くぞ！」

「おぅ、行くぞ行くぞ」

なんだ、やっぱりナベはナベか。

宣戦布告　－ＮＯｓｉｄｅ－（前書き）

やっと終わった文化祭話。
今回は裏話的なのを置いていきます。

佳亜ちゃんがドーナツ食べてる間にこんなことがあったんですねー。

それでは、また後書きで会いましょう。

宣戦布告　－ＮＯｓｉｄｅ－

「よぅ」

「……？

こんにちは」

「俺のこと知ってるか？」

「眞辺先輩ですよね。

皆さんからはナベって呼ばれてる」

「ああ。

よく見てるな。

三木のクラスメートだからか？」

「……それはどういう意味ですか？」

「そのままの意味だ」

「……。

それで、僕に何の用ですか？」

「そうだな、本題に入ろう。

俺さ、三木のこと好きなんだわ」

「……！！」

「やっぱり……、と思ってるか？」

「……まぁ、なんとなく予想はしてましたから」

「さすがだな。
長年、三木を好きというだけのことはある」

「……！
……で、それを僕に言ってどうするんです？
まさか僕の気持ちを知ってて、協力しろとでも？」

「いや、そんな女々しい話しをしにきたんじゃない。
あいつを好きな奴はいるんだろうけど……正直、障害はお前くらいしかいないと思ってな。
だから宣戦布告しにきた」

「……別に僕は先輩と付き合ってるわけじゃないんですが」

「幼馴染みなんだろ？
長い付き合いの人間は関係が深い。
実際に三木を見てて思うけど、他の男と違ってお前には気を許してるようにみえる。
逆に言えば、付き合いが長いせいで恋愛対象にみられないデメリットもあるけどな」

「つまりは、僕から先輩へ貴方について『気を付けろ』と注意するのをやめてほしい……ということですか？」

「大まかに言うとそうだな。
まぁ、別に忠告するのは構わない。
それはそれで意識されるかもしれないからな。
ただ言いたかったのは1つ。
仮に、お前が三木と付き合ったとする。
そういう関係になったら俺は2人の仲を邪魔しない。
逆の場合も同じでな」

「仮に、あなたが先輩と付き合っても僕は邪魔するな……ってことですよね。
それはもちろん心得てますよ」

「そうか。
じゃ、話しはそれだけだ。
お互い頑張ろうぜ」

「……そうですね。
でも1つだけ、僕から言いたいことがあります」

「なんだ？」

「僕は貴方に恨みなんてありません。
邪魔もしません。
けど……もしも先輩に変なことをするようなら、許しません」

「しねぇよ。
約束する」

「はい。
約束ですね」

「じゃあな。
文化祭楽しめよ。
お前のクラスの劇おもしろかったぞ」

「はい。
貴方のクラスもかなり好評でしたよ。
おもしろかったです」

「……ちょっと相談があるんだけど」

「なんですか？」

「三木の奴……バンドとか入んねぇかな？
純粋にボーカルがほしいんだ」

「……難しいですね。
というより無理じゃないかと思います」

「やっぱり？」

「恥ずかしがり屋ですからね」

宣戦布告　－ＮＯｓｉｄｅ－（後書き）

どっちか選んで応援してほしくてｓｉｄｅを無しにして会話のみにしました。

読者様はナベくんか、龍斗くんか、どっちの応援をしますか？

しかしこいつらの話おもしろい。
心なしかスラスラ喋ってくれます。

それにしても佳亜ちゃんが微妙にリア充な気がして羨ましい。
羨ましすぎて爆発しそう。

佳亜ちゃんはどっちを選ぶんだろう。
あえてどっちも選らばなかったりして……？

と、作者のくせにワクワクしてます。

長々と失礼しました。
最後まで読んでくださってありがとうございます。

この三角関係がどう動くか、次回もお楽しみに！

買い物

こんにちは。

今日は買い物にきました。

そろそろ寒く……ってかすでにそこそこ寒いんだけど、本格的に冬がくる前に冬物がほしくなった。

というわけで、服を買いに行くんだぜ。

どんなのにしようかなー、と考えながら歩く。

俺は他の人に比べて服を買う機会が少ない気がする。

上着とインナーがあれば着回しができるから、服が少なくてもいいんだよね。

下はほとんどジーンズだし。

いつかは俺も女性の服を着なきゃいけないんだよな。

それはわかってる。

しかしながらタイミングがつかめないのが現状。

女性の服っていまいちピンとこない。

いいな、って思うのがないんだよね。

スカートはひらひらして寒そうだし、ヒールの高い靴は歩くのが大変そう。

そもそも俺は白とかパステルっぽい色合いが似合わなさそう。

女って大変だな。

仮に女性の服を着るとしたら色合いは今の服と似たようなものだろうな。

学生のうちは今のままでもいいかな。

さて、店についた。

あー、寒い。

早く入ろう。

店の扉を開ける。

この店はそんなに大きくない。

けど品揃えが豊富で人気があって、中はお客さんで賑わってた。

「あらあら！
佳亜ちゃんじゃないのぉ！」

「こんにちは、店長さん」

この人は呼び名の通り、店長さん。

俺が小さい頃からこの店でお世話になってる。

恰幅がよくて、女性の心を持ったおじさんだ。

いわゆるオカマさん。

おじさんと呼ぶべきか、おばさんと呼ぶべきか、まだ小さかった頃の俺は子供なりに悩んだ。

悩んだ末に店長さんと呼んだわけだ。

「1年ぶりじゃないかしら？
佳亜ちゃんったら、ぜんっぜん来てくれないんだものぉ」

「だって俺、あんまり服ほしくないんだもん」

「年頃の女の子が言うセリフじゃないわよぉ？
ほらっ！
さっそく見立ててあげるから、いらっしゃい」

俺は店の奥に案内される。

あんまり賑やかなとこで服選んだりとか出来ないんだ。

店長さんがあれこれ選んでくれて、そこから何着か試着して気に入ったら買う。

それが昔から俺がお世話になってるここの流れだ。

だからこの店以外で服買ったことないんだよね。

ここは洒落た服屋さんよりよっぽど商品幅が広い。

靴やアクセサリーに帽子なんかも揃ってるし、スーツからドレスまでなんでもある。

服の買い物ならここだけで充分すぎるくらいだ。

「さてと。
どんなのにしましょうかね。
いつもの感じでいいの？」

「うん、お願い」

「男物ね。
こういうのも似合うけど、きっと女物も素敵よ？
カジュアルなものもあるけど、どう？」

「んー……俺にはまだいいや」

「そんなこと言ってぇ。
なんだかんだで男の子は可愛い服が好きよ？」

「見せる相手もいませんけど」

笑って返事をしながら、置いてある服をみていく。

そうだな。
そういう相手ができたら俺も女物の服を着るかもしれない。

いつになるかわからんけども。

「これとかどうかしら？」

「うん、よさそう。
あと靴が欲しいんだよね」

「スニーカー？
ブーツ？」

「当然スニーカー」

「じゃあ女物を着る日が来たらブーツにしましょうね」

「はーい」

上着3着、インナー2着、靴1足、買いました。
なかなか服買いにくる機会がないからね。
まとめ買いしとかなきゃ。

「はい、お釣ね」

「うん。

おまけありがと」

おまけで割引してくれた。

長い付き合いだから、って。

やったね。

「気を付けてお帰り。
次は彼氏を連れてきてちょうだいね」

「彼氏ができたらね」

できるかすら怪しい。

三度目の正直（前書き）

佳亜ちゃんは蜘蛛嫌い。
てゆーか虫嫌い。

三度目の正直

俺は仰向けに寝転んだ状態で天井を見た。

天井には蜘蛛がいる。

蜘蛛は糸を使って天井からゆっくりおりてきた。

俺に向かって。

「ほぁぁ！」

……起きた。

中途半端に起き上がった状態で。

「はぁ……」

ゆっくりと横になる。

夢でうなされるって相当だな俺。

なんとなく寝返りをうって、ゾワリと寒気が走る。

……いる。

この部屋にいるぞ、俺の天敵。

目だけ動かして周りを見渡す。

なにもいない。

いやいや、絶対いるぞこの感じ。

まさかと思って天井を見る。

俺の天敵、蜘蛛さんは天井から糸を垂らして俺に接近中でした。

「ほぁぁ！」

……起きた。

うわぁ……夢の中で夢みてその中で似たような夢みるとか……引くわ。

疲れてんのかな。

「……」

天井を見上げた俺。

たくさんの目を持つ奴と目が合った気がした。

「……ぎゃー！」

夢だけど、夢じゃなかったー。

……もうやだ。

頼まれ事

「三木！」

「ん？」

後ろから呼ばれて振り向くと、ナベが土下座してた。

ええええ、なんで？

「ちょ、どうしたの」

「頼む！
1回だけでいいんだ！
俺を助けてくれ！」

「いや、だからどうしたの」

ナベから話しを聞く。

どうやらナベのバンドがライブが決まったらしい。

でもボーカルがいない。

そこで俺に臨時ボーカルを引き受けてくれないか、ということらしい。

「ええー……」

「頼む！
お前しか頼めないんだ！」

「でもそんな大事な役、俺にはちょっと……」

「お前ならバッチリだ！
文句の付けようがない！」

そんな風にお世話を言わないでほしい。
照れる。

「今後の生活に支障がでないよう客にはお前の顔がみえないように隠すし、バンドの挨拶とかも全部俺がするから！」

「うー……。
てゆーか土下座やめてよ」

そこまで配慮されるとなると断りにくい。
どうしよう。

「なぁ、頼むよ」

「……1回だけだよな？
わかったよ」

「……！」

困ってんだし、ナベには色々よくしてもらってるし、ここは助けるべきだろう。

「よかった！
サンキュー！」

「うあ」

突進するように抱きつかれた。

そのまま転びそうになる。

「っと、悪い」

「体格差考えてくれよ」

ナベ身長でかいから。

龍と同じくらいかな。

俺と１０センチ以上差がある。

「それじゃ、練習日とか色々あとから連絡するから。よろしくな」

「ん」

自分で引き受けたことだ。

ちゃんとできるように頑張ろう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7569v/

俺の日常はこんな感じ。

2011年12月17日12時04分発行